
現実世界の仮想現実

芥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実世界の仮想現実

【Nコード】

N5022X

【作者名】

芥

【あらすじ】

VR技術の応用で作られたVRPG『デュアルワールド』その魅力に引き寄せられる者は多かった。そんな人々の中の一人である青年が、なんとなくゲームへ挑む物語。ゲーム内で二ケと名乗る青年は少女シアを助け、一夜を過ごした。その後訪れた街で事件に巻き込まれた。そしてその後二ケは現実世界と仮想世界の違いを考えるようになる……。

誤字脱字等々ありましたら、一言でも構いませんので、お気軽に感想までお願いします。

新たな一歩

V R R P G。

その意味する所は、普段ゲームに触れている者には実に分かりやすく、そして惹かれる文字だった。

普通のR P Gとは違う。

前にくつついているV Rとは、ヴァーチャル・リアリティーの略で、仮想現実を作り出しその中で様々な体験をすると、まるで実体を持った自分の体が体験したかのように感じる事が出来る技術の名称だ。

簡単に言ってしまうえば、仮想の自分アバターを仮想世界で動かすイメージだ。

その構想や技術は昔から注目され力を注がれてきたが、その技術が娯楽であるゲームの世界へと入ってくるのには、随分と時間がかかった。

未発達だったV R技術は進歩と共に、実験の意味も兼ねてか様々な所で目に付く様になり、やがて充分に発達した後に、ようやく娯楽への転用が認められた、と言う訳だ。

ゲームをプレイする人と言うのは特別な限定条件がある訳じゃない。

やりたい人がやって、やりたくなくなればやらない。だからこそ娯楽なのだが。

つまり様々な人間がゲームに触れていて、その中にはV R技術に触れた人ももちろん居る。居て当たり前だった。

だから情報が流れやすいこの時代に、V R技術に触れた人の体験談を聞いてそれをゲームに使うとどうなるのか、という各々の妄想は、V R技術が発達する前よりも、より現実味を帯びて強まるばかりだった。

しかしV R技術を応用したゲームと言うものは、作る側も頭を悩

ませるものだったのだ。

今まで積み上げてきたものが僅かに応用が利くとは言え、ほとんどは未知の物だった。

ノウハウの積み重ねが無い状態での開発は困難を極めた。

しかし、もしその困難を最初に突破したのなら、その先に待つ様々な恩恵は素晴らしく魅力的に違いなかった。

複数あるゲーム製作会社はこぞって製作に踏み切り、何社かはその困難の前に破れ、VRゲームの開発競争から外れていった。残った会社はどれも大手の、体力がある会社ばかりだった。

どの会社も開発が進み、各社の広告宣伝にゲーマーは心躍らせるばかりだった。

その頃に、VRゲームをプレイするためのハードが発表された。

ゲームの広告宣伝が飛び交う中で、ハードはどうなるのか、と囁かれていたが、いくら待っても謎が明かされず、VRゲームの開発側もハードについては一切の情報を明かさなかった。

だがハードが無ければソフトなんて作れるわけが無い、その認識は誰もが持っていた上に、ハードよりも確実に情報が流れるソフトの方が皆気になって仕方なかった頃の、発表だった。

『VRG』バーチャル・リアリティ・ゲーム。

実にシンプルで分かりやすい名前だった、だがもつと良い名前をという声もそれなりに有ったらしい。

しかし、最初の一步としてはいい名前だと、賞賛する人もかなり居て、更にハードなんてどうでも良いからゲームを早くやりたい、という人達も重なり、次第に皆納得してしまうのだった。

そのハードの形は、見た目はHMDヘッドマウントディスプレイとなんら変わりなかった。

使用例の画像は機械が目を完全に覆い、耳まで伸びた所に横長のボタンが並んでいた。

それがVRGの電源である事は明白だった。

他にも画像や情報が記載されていたが、どれも既に情報を追っていた人達にとっては既出の情報ばかりで、いち早くプレイしたいゲ

ーマー達はもう実物を触るしかない所まで来ていた。

そして発売当日。

長蛇の列がどこまでも伸びていた。

皆の目標、もとい標的はもちろんVRGとそのソフトだ。

VRGの発売と共に店頭に並ぶ、栄光ある最初の一步を踏み出すソフトは四本。

シューティング、アクション、RPG、シミュレーション、といったラインナップだった。もちろんその前には、見慣れないが想像すると気持ちを高揚させてしまう文字、VRとそれぞれに付いている。

人気なのはアクション、次にRPGとシューティング、更にその次にシミュレーションとなっていた。

発売当初はまだアクションがトップを独走していたが、VRゲームソフトがそうそう簡単に出る訳も無く、一ヶ月経ってもソフトの数は微々たる物しか増えずに、さらにそのクオリティも先に出たソフト五本に及ばないもので、実質VRGで遊べるソフトは四本と言っても過言ではなかった。

そして一ヶ月も経つと、最初は圧倒的だったアクションの売り上げは落ち着き、トップの座をRPGへと譲っていた。

その原因はアクションゲームにありがちなストーリーの短さと、いくらVRゲームがかつてない新鮮さを与えてもやがてそれに慣れてしまう事だった。

それに比べ、当初からかなりの出来でRPGの王道をひた走っていた物が、安定した売り上げを誇るのは仕方ない事だった。

しかしそれだけじゃなかったのだ。

VRGの発売から一ヶ月。つまりソフトの発売から一ヶ月と言っても等しい丁度その日に、RPGゲームの大規模アップデートが行われた。

VRゲームでないゲームの歴史でもおそらくは無かった蛮行だった。

しかしそのアップデートに伴い、更に売り上げが加速したのだから、猛攻とでも言い直すべきだろう。
そのアップデートとは……。

初体験

俺は特別ゲームに情熱を傾けている訳じゃなかった。

もちろんゲーム自体は好きだが、年間でやるゲームの本数はせいぜい一、二本くらいのもので、もちろん欲しいと思えるゲームがあればそれよりも多い時もあるのだが。

ゲームを買う本数が少ない理由としては、まず直感的に注目し、その後はゲーム雑誌やネット、店頭で実際に手にとって見たりして情報を集めて、設定やあらずじなんかを読んだ時に、この続きが知りたい、やってみたいと強く思わされるような作品だけを買っているからだ。

それに俺自身が一度、一つのゲームを始めてしまうと、そのゲームの裏の裏までやり尽くさないと納得がいかない、という無駄に几帳面というか凝り性な性格も関係しているだろう。

そんな俺が手を出したのがVRPGと言う、全く新しいジャンルのゲームだった。VRGと言われる新ハードとそれ専用のソフトからなる、ゲーム業界に一石を投じた物だ。

VRPGと言っても、既存のRPGをまるで現実のように体験出来るだけで、基本的なゲームとして構成する素材なんかは既存のものと同じ。そう言ってしまうえば些細な事に感じるが、そのVR部分の魅力と言うのはやはり強大な物である事は間違いなかった。

だから発売日当日はバイトを休みにして、長蛇の列に並ぶ羽目となったのだが。

幸いにもバイト先はゲームには興味の無い世代もそれなりにいたので、全員がVRゲームを求めて休みの取り合い、なんて事にはならなくて心の底からほっとしたものだ。

製作側も店側も相当の数が買い求めると予想したのか、何時間と並んで辿り着いても、まだ山のように在庫が並んでいた。それでもニュースなんかでは売り切れ続出、なんて報道しているのだから足

りなかったのだろう。そんな報道を流すテレビを消し、ベッドに横たわる。

ベッドの上には空の箱と説明書や保証書などが広がっていて、少し邪魔くさかったので箱に再び戻しておく。

説明書には一度目を通していたが、念のために再び見ようか、なんて考えが頭をよぎるが、そんな事より早くVRゲームがやりたい、と俺自身が急かすので、そのまま箱にしまい込む。

次にやることはソフトの開封だった。

買ったソフトはVRPGというジャンルに、初めて足跡をつけた記念すべき第一号。

名前を『デュアル・ワールド』

仮想現実であるVR空間での世界。現実とは違うが極めて近い二つ目の世界。故にデュアルワールド。

初めてのVRPGにとつては実にピッタリな名前だった。

ソフトは光学ディスクなんかが主流の時代に、今時かよ、と思われるカートリッジ式。素人には分からないけどきつと高性能なんだろうと無理やり納得して、デュアルワールドのカートリッジをVRGの左側に付いている、ソフト取り込み口から差し込む。その近くにある四角形で細長いランプが緑色に光る。それがソフトの認識が終わった合図だ。

ランプの下にあるボタンは、カートリッジを排出する時に使うボタンだが、今は使わない。今使すべきなのはその隣のVRG自体の電源ボタンだ。

それを押すと、電源ボタンの上に、ソフト認識と同じくランプが灯った。色はオレンジ。きつとソフト認識との差別化のためだろう。そして電源が入った事を確認すると、次に行うのはもちろんそれを身に付ける事だ。

まじまじと見つめ、深呼吸をし、これがVRGへの第一歩！そう心で呟き、意を決してそのVRGを被る。

恐る恐る目を開けると、そこに広がるのは無限に広がるファンタ

ジーな世界……ではなく、ありふれたデジタルな画面だった。

体の感覚も現実のものだし、試しに手で顔を探ると感触でVRGが有ることもわかる。

はあ、とため息をついて改めて画面を見る。

そこに映し出されていたのは時刻設定の画面で、そういえば説明書に初期設定がどうか書いてあった事を思い出し、自分でVRGを付ければ分かるだろう、なんて思っていた事を思い出した。

仕方ないのでさっさと時刻設定を済ませようと思ったが……。

「……これ、どこで操作するんだ？」

てっきり感覚で全てを操作する物だと思っていただけに、そういった所は流し読み程度にしか見てなかった。

もう一度ため息をついてVRGを頭から外し、丁寧に仕舞い込んでしまった説明書を箱から再び取り出して、中身にもう一度目を通す。

どうやら電源とは別に、VR世界に移行するためのボタンがあるらしい。見てみると電源ボタンとは反対の、右側に確かにそれらしいボタンがあった。

改めてVRGを被りなおし、手探りでそのボタンを探し出して、ゆっくりと押した。

その瞬間、妙な浮遊感が体を包み、足の先、手の先から冷たくなって、やがて体の感覚が無くなる。それが体から首へ、首から頭へと伝わっていき、突如、意識が途切れた。

……目覚めの時のような気分で目を開けると、そこに広がっていたのは宇宙だった。

実際の宇宙とは違うと分かったのは、自分の周りに浮いた球体のアイコン達。

それらを視線の中心に捉えるとヘルプとして文字が浮かび上がる。宇宙をイメージして作られたVRGのメインメニュー画面だった。

その中から時刻設定を選ぶと、00:00と空中に表示される。その数字を指でスライドさせると数字が動いたので、今の時刻を手早く入力する。

次に気になったのは自分の体だ。VR空間での体であるアバターの容姿だ。

VRGにおけるアバターはどのゲームの世界でも共通の自分自身の分身であり、VRGでアバターを弄ればそれが即時反映される。なので自分のアバターをまずどういうものなのか把握しておかないと、色々と困るものがあるのだ。そう、説明書に書いてあった。周りに浮かんだ球体達を眺めていき、やがてアバターと名の付いた球体に恐る恐る手を伸ばし触れて見ると、その瞬間に放射状に世界が塗りつぶされ、不思議な浮遊感は無くなり宇宙空間もあつという間に変わってしまった。

そこに新たに現れたのはどこまでも続く真っ白いタイルの床と、大きな鏡が据えてあるだけのとてもさびしい空間だった。

鏡には細くて筋肉も付いていない頼りない男の姿が映り込んでいて、それが自分である事は明白なのだが、信じたくない気持ちも持ちたくなる程にひ弱だった。

服装は質素なデザインの簡単な物しかなかったが、どうせゲーム中はそのゲームの中での服装になるし大して気にする事も無かった。それと鏡に映っていたのはもう一つあって、まるで地球の周りを漂う衛星のように、周りを飛んでいる手の平サイズの球体があった。これはシステムスフィアと言って、触れると空間に応じて空中に半透明の板が現れて、その画面をタッチすることで操作することが出来る。

システムスフィアに触れるといくつかの操作画面が空中に現れ、今出来る操作を視覚的に確かめることが出来た。

……どうやら顔の造形や身長など、普通のゲームと同じぐらい自由で豊富なカスタマイズが施せるようだったが、性別だけは変えられないようになっていたようだ。

こういうキャラをカスタマイズする時に、自分とはかけ離れた美形にしたり、と言うのは特別不思議な事ではないが、どうにもVRゲームに関しては自分が操作するキャラを美形にするのはなんだか嫌な気分がした。

その理由としては、まず第一に思いつくのが操作するキャラがイコールで自分と結びつく事だろう。

気にしない人は気にしないだろうし、嬉々として進んでそれを行う人も居るだろうが、VRゲームでは必然的に一人称視点でゲームをプレイする事になるので、操作するキャラが美形と言う事は、その分身であるプレイする人間も美形、という扱いになるに等しい。

簡単に言ってしまうえば、一人の人間がアバターの皮を被っている、と言う扱いになるので、もしその姿を自分自身で見た時に感じるのは違和感か、優越感か、という話だ。

色々とステータスを弄っていると、あまりに現実とかけ離れたステータスは感覚的なズレ、違和感が凄かった。

慣れればなんて事は無くなるだろうが、最初から違和感だらけの体で行動はしたくなかったので、顔の造形も含め現実に近い値にしながらも、多少は見栄を張って盛っておく。もちろん違和感が無い程度に。

キャラメイクが満足いく形で終わると、次はVR空間での体の動かし方に慣れる必要があった。おそらく最初からそういう事も考えての、果ての無いこの空間なのだろう。

走ったり、跳んだり、回って見たり、逆立ちしたり。

結論から言うならば、疲れる。しかも凄く。

てっきりVR空間だから疲れることは無いだろうと思っていたのだが、動けばその分疲れるのは現実に限らずこっちの世界でも適用されるらしかった。しかし痛み、という物は一切感じない。その代わりに感覚が無くなるのだ。

仮想現実とはいえ、意識は現実にある人間の物なのだから、当然といえば当然の処理だろう。

ゲーム中に炎に包まれて死ぬ時なんかには痛覚があったら、それこそ死ぬ思いをする羽目になる。

痛みの代わりの無感覚は、言うならば麻酔を掛けられている時の感覚が近い物に挙げられるかも知れない。

見ればそこにちゃんとあるのに、動かそうと思っても動かない。触っても触った方からしか感触が無く、触られた方は無感覚だ。ちなみに本来ある痛みの大きさに応じて無感覚の度合いは変わるようで、今の一番酷い場合だ。

アバターも決まって、準備運動も終えたので、システムスフィアからメインメニューへと戻る。操作画面のボタンを押すと、世界が放射状に広がったのとは逆に、世界の果てから宇宙空間が高速で侵食した。

自分の立っていた所が宇宙に吞まれると、足を付けるための地面が無くなっただけだから当然、体が浮遊感に包まれ、すぐに落下する感覚に切り替わる。

覚悟をしてなかっただけに慌てふためいてしまったが、何秒かするとその感覚が当たり前のものとなり、最初に見たVRGのメインメニューへと戻ってくる。

つまり自分の周りに宇宙が広がり、いくつもの球体を取り囲んでいる状態に。

そういえば最初にメインメニューに来た時は、自分の姿を確認して無かったので覚えてないが、今はさっきキャラメイクしたそのまんまの姿が確かにあった。

今度こそ、球体の中からゲームの文字が浮かび上がるものを探す。割とすぐにそれは見つかった。視界の中心に捉えるとゲームと言う文字の下に、大きめの文字でデュアルワールドと表記されている。それに手を伸ばす。仮想の心臓は破裂しそうなほどに脈打つ。

……アバターには血は無いのだから心臓も必要ないのだが、おそらくはキャラメイクの時に感じた違和感の問題か、より現実に近いけるために用意されたもの、もしくはそのどちらもだろう。

球体に触れる。その球体から眩いほどの光が溢れ、視界は真っ白に染まる。

そんな中でも次に目に入れる風景を妄想し、心臓が高鳴りを止めなかった。

よつこそ

白一色の風景が真ん中から空色に染まっていき、眼下には広大な土地が広がっていた。

気付けば自分が飛竜の背中に座っていて、広大な土地を風を切つて飛んでいた。

頭の防具や鞍も付いている事から、視界にある大きな城で飼われている騎竜なのかも知れない。

凄いスピードと飛竜の動きに振り落とされそうになるが、どうやら落ちる事はないように設定されているらしく、引つ張られる感覚は常にあるが、透明な壁に体がぶつかり止まる。

大きな城がそびえていて、その周りを少しスピードを落として飛竜は回る。

まるでこの世界を見る時間を与える様だったが、おそらくこれがデュアルワールドのOPなのだから、推測は間違っていないだろう。……確かにただ飛んでいるだけでも相当楽しい。普通は味わうこととの無い感覚を楽しめる上に、今までは画面の向こうの世界だったものが、その世界に入り込んで現実のように感じる事が出来る。

遙か彼方にはどこまでも続く森や山、海までも見える。

現実にある高層ビルの群も無いし、汚れた空気もない。肺にいっぱい空気を吸い込めばそれがどれだけ新鮮なものかが分かるぐらいだ。

時々山の向こうに見える建物らしきものは、また別の街だろう。

RPGなのだから最初の街以外にも、いくつもの街がこれから待ち受けているだろうし、今見える風景は全て自分で踏破する事が出来るのだ。

あの森も、あの山も、あの海も。きつとこれから色々なイベントがあったり、レベル上げでお世話になったり、それぞれにそれぞれの思い出が刻まれる事だろう。

今はまだ白紙。これから自分の足跡をこの世界に付けていく。

そう考えると、やっぱり気持ちが高ぶって仕方ない。VR技術のおかげで今までのゲームよりもそれを身近に、確かに感じることが出来た。

飛竜の背中で世界を眺めていたのは一分ぐらいだろうか、OPにしては丁度いい時間だ。

飛竜は進路を変えて緩やかに降下していく。目指した場所は城下町の中心にある大きな噴水で、NPC——ゲーム側の住人——である街の人々が避けて飛竜が着地できるだけのスペースを作る。

飛竜がゆつくりと、何度も翼を羽ばたかせ着地し、静止した所で飛竜から飛び降りる。衝撃はあったが痛みは無い。

降りてみて初めて飛竜の大きさに驚いた。高さは三メートル、横は頭の中から尻尾の先までで五メートルもある。

……さっきまでは世界の大きさばかりに目を取られて、それを比較対象としていたからこの竜の大きさにも気が付かなかったのだらう。

改めて全体像を見回してから、飛竜の頭の方へと歩いて行き手を伸ばす。

飛竜もそれに気が付いてくれたようで、長い首を曲げて鼻先を手近に近づけてくれる。

近づけてくれた頭を、猫や犬でも撫でる様にしてやると、クウンと可愛らしく鳴いて嬉しそうな顔を浮かべてくれるのだった。

飛竜に世界を見せてくれたお礼に少し戯れていると、突如周りから拍手の嵐が巻き起こる。

何事かと思つて周りを見渡すと、そこにはひたすらに人が居た。

もちろんNPCなのだが、その顔は実に現実らしく動きも滑らかで、とても仮想のものとは思えないぐらいだった。

拍手に戸惑っていると、飛竜が吼えた。狼の遠吠えの様に上を向き、全てに響き渡らせるかのように力強く。あまりの迫力に腰が抜けそうになった程だ。

それが合図となって、システムスフィアと同じ様な球体が空から降ってきた。

大きさはシステムスフィアとは比べ物にならないくらいに大きい
が、流石に飛竜ほどではなく、およそ三十センチ程度の球体が空中
に浮いていて、ニューゲームと文字が浮かび上がる事からここが今、
従来のゲームにおけるタイトル画面なのだとわかる。

タイトルロゴは表示されなかったが、このNPC達の拍手と目に見える風景が、このデュアルワールドの象徴であって、それと同時に歓迎の意味も込められている。

包む雰囲気、この世界が、デュアルワールドへようこそ、と言っている。

その演出に少し感動を覚えるが、まだ始まったばかり、いやまだゲームは始まってもない。

このニューゲームと表記された球体に触れる事で、ようやく始まる。

意を決し、手を伸ばし、触れる。

メインメニューからデュアルワールドを始める時には白い閃光に包まれた。今度はそれと逆でメインメニューの宇宙空間を思い出す暗闇が身を包む。

しかし宇宙空間のように無数の星が輝いているなんて事は無く、方向感覚すら麻痺する黒一色の世界だった。

それも一瞬の事で、眩い光が暗闇を裂いたと思えば、目の前には剣や斧、弓なんかを携行した屈強な男や女が結構な数で雑多に立ち並んでいる。

誰も彼も服装が見た事のあるような革製や布製のいかにも冒険者と言う格好。中には魔法使いだと一目で分かるローブを羽織った者や、騎士なのだろうか重そうな金属の鎧を纏った人も居て、誰もが
ある一点に居る人物を見つめていた。

そこには王様と一目見て分かるように、と言う配慮なのか、重そう
な王冠を被っている初老の男が、豪華な金枠と布地が赤く弾力の

ありそうな玉座に腰掛けていた。

その後ろには相談役なのか、王様よりもかなり年を取っているだろう顔にたくさんの皺が刻まれた老人が、玉座より二歩ほど後ろに下がり杖を突いて待機している。

ガヤガヤと騒ぎ立てている数ある冒険者達に向け、王様が立ち上がり、叫ぶ。

「ここに立ち上がってくれた冒険者達よ、王の名の元に感謝する！この世界の命運はそなた等の腕に懸かっている。もちろん他の国からも、多数の勇気ある者がこの世界の危機に立ち上がってくれている。急ぎ、世界の安寧の為に、魔物達に砕かれた星の命を集めてくれ！」

王様がそう叫ぶとその場に居た全員が目を滾らせて、一致団結し遠吠えの様に気合の入った声で叫ぶ。

なんとなくそれに習わないといけない様な気がして、少し遅れながらもその声と重なり混ざる。

その後は特に何もなく、さっきの威勢はどこへやら、ぞろぞろと後ろの階段から全員が降りていく。

その流れに乗って階段を降りていくと、城の兵士に誘導されて城の入り口まで連れて行かれる。

どうやらこれから話を進めないと、城に再び入る事は出来そうになかった。

その証拠に門番が二人、堅く閉じた門の前で立ち塞がって動こうとしない。

無理矢理入ろうとすると、その手に持った長槍を二人全く同時に動かし、まるで×印を作るように道を塞いだ。

「王は執務にお戻りになった、面会は許可されてない。」

「また魔物達が活性化した事もあり、今後城での職務に従事する者

以外は立ち入り禁止だ」

門番の二人はそれだけ言い、俺が数歩離れるとまた元の長槍を天に向け、待機状態へ戻る。

王様の時もあったが声はそれぞれピッタリと合っていて違和感も無く、かといって演技に問題も無くはまり役なのだが、目の前の二人は違う声だったし、王様もまた違う声だ。

もしかしたら、このデュアルワールドのNPCは全員それぞれに声があるんだろうか、なんて考えが頭を過ぎるが、いくらなんでもそんなことが出来る訳はないだろうし、まだ三人の声しか聞いてないからあまりにも情報が少ない。

それにエンディングを迎えればキャストも表示されるから、その時に疑問も解決するだろう。

そう自問自答し、城を背に歩き出す。

振り返った先の開けた町並みの中心に、さっきまで見ていた噴水があった。

OPで見て、タイトル画面でもあった町の中心の大きな噴水の周りには、子供たちが遊んで居たり、その子供たちの付き添いらしい大人達も居て世間話でもしてるのだろう、やけに賑やかだった。

残念ながらOPで乗っていた飛竜は姿形も無く、あれがOPだけの特別な存在だった事を思い知らされる。

しかしこれからストーリーを進める事でまたあの飛竜に乗れるかもしれない、そう思うとあの風景を思い出して胸が躍ってしまう。

しかもOPとは違い自由に操作できる可能性もあるんだから、期待は膨らむばかりだ。

とは言ってもおそらくは乗れても中盤からで、序盤では無理だろうというのはどんなRPGでも似たような物だ。

いつまでも飛竜の事ばかり考えていても仕方ないので、まだ日の差すうちにRPGでの醍醐味の初歩の初歩。街中の人達に聞き込みを開始しなければなるまい。

と思ったが、その前にまずはステータス確認だ。
と思っただが、メニューの開き方がわからない。

メインメニューの時みたく周りに浮いてる訳でもないし、キャラメイクの時のようなシステムスフィアも無い。

となれば、残されたのはジェスチャーかボイスか。

一瞬考えたが、メニューを出すジェスチャーと言うのがすぐに思いつかず、とりあえずボイスの方から試して見ることにする。

「……メニュー」

なんか大声で言うとは恥ずかしい気がして、小声で呟く。

NPCなのだからこちらからアクションを仕掛けない限り、反応が返って来る事はないのだが、造形がリアルなので頭で分かっている、いざとなると体が本能的に避けるのだった。

幸いにも試行一発目から当たりだった様で、目の前にキャラメイク時と同じ半透明な板が空中に浮かぶ。

アイテム、ステータスから始まり、その下にお馴染みのメニューがつつらと並べられてるがとりあえずアイテムを覗く。

半透明の操作盤のアイテムの表記されている所をタッチすると、新たな操作版が空中に現れる。

そこにはアイテムが表示されていて、現在は銅の剣、薬草が二つのみだった。最初から武器と回復アイテムがあるだけまだ親切な方と言えるかも知れない。

更にアイテムを表記する操作盤の端に表記されている数字から、持ち歩けるアイテムの上限数は三十だと言う事がわかる。

もちろん今持っている武器と薬草で二つの枠が取られているから、現在の残り枠は二十八となる。

それ以外は特に得るものも無く、アイテムの操作盤を閉じる。……前にやり残した事があった。

お約束と言うのかなんというか、当たり前前の事なのにそれが抜けて

いた自分の頭に少し残念な感情抱かずにいられない。

思い出しただけマシか、と自分に言い聞かせ、アイテム欄にある銅の剣を指先で叩く。

操作盤に更に重なるように、装備しますか、はい、いいえの表示が現れる。

武器は装備しないと意味が無いよ、って訳だ。

はい、を更に叩き、その瞬間にアイテム欄から銅の剣と言う表示は消え去る。

……成る程、装備は手持ちの道具とは別か。

次に腰の所にずっしりとした重みが増えるのを感じ、視線を移すとそこには安っぽい皮製のベルトにぶら下がった、錆びてるんじゃないかと思うぐらいの赤さを帯びたこつい剣があった。

試しに抜こうとして見るが抜けない。どんなに力を入れても、抜く角度を変えて見ても。

少し銅の剣と格闘して、街の中では抜くことは出来ないのだと結論付けた。

確かに、RPGで街中を抜刀しながら歩く、そんな主人公を俺は見ただ事が無い。

アクションゲームなんかだと自由度の高い作品では出来る事もあるが、RPGは基本的には敵と遭遇した時にしか戦わないのだから、そういった場面以外で剣を抜くタイミングはイベントぐらいな物だ。装備できたのは確実なのでこれ以上は無駄だと悟り、再びアイテム欄に目を向けたが、他にやる事は特に無かったので再びメニュー画面の操作に戻り、今度はステータスの文字を叩く。

新しく現れた操作盤からはいろんな情報が読み取れる。

まずは各種ステータス。Lvから始まりHP、SP、MP、筋力、技力、魔力、敏捷と続いている。

まだレベルが一なのでどの数値も一桁が大半で、HP、MP、SPはなんとか二桁だが、基本的に増減するものだと思うるので二桁でも心許ない。

それとは別の所に表記されているのはA P。アビリティポイントだ。

今はまだ何の世話にもならないが、後から特殊な技能を得るのに使うだろう事は予測が付く。

操作盤の端っこに地味に表記された、所持金を表す欄は空しくゼ口を表示していて、ただお金の単位であるC^{クロム}だけが意味のある表記となっていた。

最後に気になったのが、半透明な紫色の水晶の欠片の様なアイコンがあつて、その隣にはこれもまた所持金と一緒にゼロと書かれている。単位は無かった。

最初はなんだろうと思つたが、すぐに思い当たる節が浮かぶ。

王様が言っていた『魔物達に砕かれた星の命』それがこれの事なのだろうと言うのは、何作かR P Gをやっていると直感的にわかる。いわゆるキーアイテム。冒険の目的であり、いくつもあるそれをどのくらい集めたのかを表記するカウンター。

とは言え物語の本筋には関係の無い、主人公を特別に強化したりするのに使うアイテムなんかも似たような感じで、メニューに表示されている事もあるが、今回は王様の発言から分かるように砕かれた星の命、つまり欠片と言うのは簡単に推測できる事で、アイコンから見て疑う余地も無いだろう。

それがどのくらいの大きさかまでは流石に予測が付かないが、少し進めばボーナス的なイベントで一つぐらいは手に入るはずだ。それで実物を手に入れば大きなサイズなんてすぐに分かるだろう。

だから今は特に気にしない事にする。

そして次にする事、メニューの下から数えたほうが早い所に、コンフィグの文字。

つまりゲームの色々なところを自分なりに調整する設定の項目。それを叩く。

現れた操作盤を上の項目から確認していく。

B G M、効果音、音声等のお馴染みとも言える音量調節は無く、

文字送りの調整も無い。

これらはVRゲームであるが故に必要な無い項目だったのだろう。確かにBGMは流れてないし、兵士に止められた時も、会話した時も、効果音らしきものは無かった。

画面に文字が表示される訳ではないので文字送りも必要ないし、音声消してしまえば読唇術でも使っしかないだろう。幸いに口の動きもリアルそのものだ。

誰もしないし、出来ないだろうが。

慣れ親しんでいる項目はほとんどが無く、せいぜい操作盤の色を変える、透明、半透明を切り替えたりする項目ぐらいが従来のゲームからも引き継がれている項目だろうか。

その代わりにVRゲーム特有の項目ももちろんある。

まずはその一つを弄ると、自分の周りを飛ぶ球体が現れる。

それはシステムスフィアだった。弄った項目は、メニュー開閉時の認証方法という項目だった。

デフォルトの音声認識、今切り替えたシステムスフィア認識、後はメニューを出す時に浮かんだもう一つの方法、ジェスチャーだ。どうやらきっかけになるジェスチャーを自分で登録するらしく、人によっては便利になるだろうが、俺はそれを選ぶ気になれなかった。

他にも項目はあったが、特に調整する必要もないと思ったのでそのままにしてメニュー画面を閉じる。

なんだか設定が終わると一仕事でもした様な気になってしまうが、従来のゲームで言えばようやくこれから自由に操作出来る様になり、気持ち外に向いているはずなのだが……。

「あ」

不意にある事を思い出して、もう一度メニューを開く。今度はボイス認識ではなく、変更した通りシステムスフィアに触れて。

動作は違えど全く同じメニューが開き、更に端の所に表記されている時間に目をやる。

デジタルな時刻表示はもうすぐ昼になる事を示していた。

区切りもいいので、ここで一旦ゲームを中断して昼飯を食べてから、気持ちを改めてやろう。

昼飯のメニューをどうするか、冷蔵庫の中身を記憶から漁りながら考える。

それと同時に平行して次にゲームの中でやる事も考える。

当初の予定通り街中の人達に話を聞いて、……その話によって多少は行動が変わるかもしれないが、その後はRPGの肝でもある戦闘だ。

VRPGの戦闘がどういう仕様なのかは、情報も無く分からない事しかないが、ここまで素晴らしい出来を誇る世界を作っているのだから、戦闘が味気の無い物にならない、という予感ひしひしと感じていた。

そう考えると俄然やる気が出てきて、このまま昼飯を食べずに……なんて考えも浮かぶが、腹が減ってはなんとやら、ちゃんと腹ごしらえはする事にしよう。

開いたままのメニューから中断を選ぶ。

その瞬間、現実でVR世界に飛び込んだ時のような感覚が再び襲い、意識が途切れた。

正しきは真実

腹ごしらえを済ませ、使い慣れたドアノブを捻って、見慣れた自分の部屋に入る。

ベッドの上に転がしたままのVRGを手に取り、まだ慣れてないせいか少し手間取りながら頭に装着する。

目の前に広がる光景は真つ黒な画面を下地に、操作盤と同じ半透明な板が張り付いているもので、そこにはゲームを中断している旨と、何のゲームを中断しているか——今はデュアルワールド——が表記され、その下に再開する場合はVRボタンを押してくださいとご丁寧にも表示されている。

何も気に留めることも無く、頭の右側、耳より少し前の所ぐらいにあるVRボタンを慣れない手つきで探り、押す。

三回目にもなる体の先から冷えていき意識が途切れる感覚に、少しは慣れてきたものの、今だに少しの不安があったりする。

これは特にこのVRGに限った事ではなく、VR技術で仮想現実^{仮想現実}に飛ぶ際は付いて回るらしく、次第に気にしなくなってくるらしい。それが何時になるかは自分次第なので、今は気長に待つしかないだろう。

いくら俺が不安を抱こうとも、もう数ある実績を上げたVR技術の応用な上、商品化されたという事は安全面も特に気にする事もないはずなのだから。

意識が途切れ、再び目を開けるとそこはもうデュアルワールドで、中断した城の前からそのまま始まる。さっきとどこも変わっていない。

こつちとしては立ったまま寝てて、そこから目を開けた、という奇妙な感覚があったりするのだが、そこらへんに文句を言うのはお門違いか。

それが嫌なら何処かに座ったり、寝転がりながら中断コマンドを

叩けばいいだけの話なのだから。

今度からはそうしようと、心に決めてから足を踏み出す。

やる事は昼前に決めた通り、町の人達への聞き込み。情報もそうだがイベントがあるかもしれないし、武器屋と防具屋、後は道具屋なども見て回りたい気持ちがあった。

所持金は相変わらず空だが、性能と値段から手ごろな物に目を付けておくのは俺なりの序盤の定石だ。

序盤は基礎ステータス自体が低いために、装備も含めた総合的なステータスの大部分を武器の性能に頼らざる負えない。

なので少し値が張っても攻撃力が上がる武器を買っておけば、そうそう戦闘で負ける事も無くなるし、楽に敵を倒せるおかげで経験値稼ぎもお金稼ぎもスムーズに進む。

この街は閑散として品揃えも無い、狭くて住人も少ない、よくあるRPG初めの村みたいな状況とは正反対だったので、品揃えは期待できるし、人が多い分、情報も期待できる。

一国の城下町なのでそれなりに広さがあって、全部周るのは骨が折れそうだが、それもまたRPGらしい楽しみとも言えるだろう。

自然と顔が笑い、足取りが軽くなる。

心の中で無駄にテンションを上げながら、まずは噴水を目指して歩き出した。

城の前、二人の門番を背に歩き出し、足を踏み入れたのは大通りと思われる広々とした道。

そこには荷物を運んでいる馬車や、道の端にいくつも立ち並ぶ露店、並ぶ商品を品定めしている人も居れば、店主と笑いに笑っている人も居たりして、活気に溢れるいい所だと思えた。

歩けないほど人が居たわけではなかったなので、歩いている人達の隙間を縫って歩いていく。

その途中で気付いた事だったが、システムスフィアが浮かぶ様に設定を変えてから、俺の周りを飛ぶシステムスフィアに通行人は気付いてないどころか、ぶつかる軌道でもぶつかったりせずに人を

すり抜けて行く。

システムの名の通り、どうやら干渉できるのは俺だけみたいだった。

噴水までたどり着き、手当たり次第に話を聞こうと思っていたのだが、なにやら騒がしく変な雰囲気醸し出している人ばかりが目についた。

噴水を取り囲むように家々が並んでいるその一角。およそ十人ちよつとの人が何かを取り囲むように集まって、なにやら怒声やら罵声を叫んでいるようだった。

気になって近づいて見るが、全員が全員別々に叫んでいるので全く聞き取れないし、何を中心にそんな怒っているのかもわからない。これがイベントである事ばかりを見た時からなんとなく分かっていたので、人垣の一番外側に居た、少し高級そうな服を着てぼつちやりとした商人風な男に事情を聞くために、その肩を叩く。

前の何かに向けて放っていた嫌な顔のまま振り向き、今度はその敵意が俺に向けられる。

だが愛想の良い顔を見ると、少なくとも刺々しい物は無くなったようで、やんわりとした嫌な顔に変わってくれる。

これがイベント通りの仕様なのか俺の愛想が良かったのかは分からないが、話が聞ける程度には和らいでくれたのでよしとする。

あまり待たせてもまた刺々しくなりそうだったので、手早く口を開く。まず確かめるのはどうしてこうなったのか、誰がこうしたのか、だ。

「この人ばかりは何なんですか？」

俺がそう言うと、俺の全身をくまなくしたから上まで見て、それから嫌々と言う顔が少しの驚きと共に商人にふさわしい笑顔に変わる。

「あんだ、冒険者か。成る程、なら知らないはずだな、あの性悪女の事を」

商人風の男の顔が再び嫌そうな顔をするが、自分に向けられた物ではないとわかる。

この騒動の中心、この人ばかりを作った原因である人物に向けられていた物が、再び向けられたただだ。

性悪女と言っていたけど、こういう時は大体物語りに絡んでくる重要キャラクターな可能性が高いので、性悪という部分で避けたい気持ちがあつたが、仕方なく首を突っ込む事にした。

性悪女？ と返すと、なんらかのその性悪女にやられた事を思い出して腹が立ったのか、眉間に皺を寄せ、怒りのままに説明してくれた。

「あの女、名前は偽名ばかりで分からないんだが、金を持つてる男ばかりを狙って、色仕掛けで出来た隙を突いて人様の金をくすねてたんだ」

成る程。どっちが正しいのかはまだ決めかねるが、なんとなく事情は分かってきた。

そう言われるとこの商人風の男もそうだが、集まっている人たちは全員男で、身なりがどれも質のよさそうなものばかりだった。

事情は分かったので、今度は本当にこの人垣に首を突っ込み、その性悪女と言うのをこの目で確認する事にする。

ゲームの主人公らしく無理矢理人垣を掻き分けて前へ出る。

なんなく最前に出れた俺の目が、その罵声怒声を浴びせられている性悪女を捉えた。

ピンクか紫か、またはその間の色合いを持った髪の毛を左右で縛る、いわゆるツインテールにしている、その毛先は面白いくらいに跳ねている。

目尻が少し上がっていて気の強そうなイメージを受けるが、長い事怒鳴り声に晒されていたせいなのか、その紫の瞳には涙が少し溜まっている様にも見えた。

服装に乱れは無く、暴力なんかを振るわないのはせめてもの良心なのか、年齢制限の壁なのか。

女の子は地面に座り込んでしまつて逃げる気も起きないのだろう、ただ虚ろに人垣に目を向けているばかりだった。

そんな時女の子と目があつた。誤解ではなくしつかりと、ぴつたりと。

俺が顔に怒りを浮かべていなくて、怒鳴ったりもしていないから、この人達の中では浮いて見えたのかも知れない。

彼女の視線が一縷の希望を持つて、俺に助けてと訴えかけてくる。選択肢でも出てきそうな空気が流れたが、このデュアルワールドでは自分の行動によって選択を選ぶはずだ。

この人だからだつて、気にせず関わり合いにならなければ、こういった事態にはなつてないはず。

助けを求める少女の瞳に、俺は……彼女に背を向けた。

一歩踏み出した後、人だかりの方を見る。何事かと、集まっていた男達全員が俺に注目している。

普段の俺ならこんな事はしないだろう。でもここはゲームの世界、俺が主人公の世界。

だったら多少の無茶も通つていいはずだ。

だから俺は、彼女を守るように、男達と対立するように、その狭間に壁の様に立ち塞がる。

金はない。だから彼女が盗んだというお金を俺が返すのは無理だ。力で捻じ伏せる。これも初期ステータスなので無理だろう。

口で捻じ伏せる。話を聞くに相手の方が筋が通つていて駄目だろう。ハッターなんかで誤魔化せる程の頭の回転と口のうまさも自信はない。

じゃあどうするか。思い浮かぶ答えは一つ、それもうまくいくか

は分からない。

でも彼女の助けに応えたからには、どんな手でも使って助けてやるしかない。

まずは俺の話を聞かせる所まで、場を落ち着かせるしかない。

「皆さん、落ち着いてください！ 怒鳴るだけでは何も解決しません。まずは話を……」

「関係ない余所者は黙っててくれるか！」

俺が乱入して声を上げた所までは静寂を保っていたが、それは乱入者である俺の正体は何なのかを頭の中から探し出していた時間らしく、その答えが出た瞬間に怒鳴り声で張り上げた声が止められてしまう。

「あんた、身なりからして冒険者だろう。だとしたらこの問題に関係ないし、関わる必要も無いだろう」

確かに正論ではある。俺にメリットは無いだろうし、デメリットしかない。

もちろんそれはこのデュアルワールドの住人から見たら、場合である。俺も同じ立場だったならそう言うだろう。

俺の推測が正しければ、このイベントはデメリットもあるがそれを越えるメリットをもたらしてくれる筈だ。

だから相手がいくら引き下がった方がいいと勧めてきても、それを跳ね除けて俺は彼女を助ける。

「そうですね。確かにあなたの見立て通り、私は駆け出しの冒険者です。彼女とも面識はありませんし、助ける義務も無いです」

「だったら……！」

「しかし、私にもやはり思う所はあります。私は今日始めてこの

街を拝見しましたが、とても素晴らしく感嘆いたしました。所がその素晴らしい町並みの一角でこんな騒ぎが起きてるじゃないですか。しかもこんな大人数がよってたかって、一人の女の子に」

口を挟む隙も無い程に流れるように言葉を紡ぐ。しかも内容がこの街を褒める物であれば、この街に住む者にとつては悪い気はしないだろう。そして更にそれを貶めているのが自分達だと余所者に言われれば、頭に血の上った人達も少しは頭を冷やしてくれる。

そうなれば狙い通り、俺がペースを握って話を進められる。

「傍目から少し眺めさせて頂きましたが解決する様子も無かったので、私が仲介人としてこの問題を解決したいと思ひまして」

「う……ん、そう言われればそうかも知れないが、だがこの女が一方的に悪いのは確かだ。あんたはどうやって解決するんだ？」

心の中でガッツポーズをする。

向こうがこっちに対して歩み寄ってくる姿勢を見せたなら、後はもう俺が仕切って行っても大丈夫だろう。多少は強引になるが、致し方ない。

「ええ、解決するためにもお互いの話を聞かせてもらっていいですか？嘘をついているとは思いませんが、お互いの齟齬はなるべく無くしておいた方がスムーズですから」

「わかった」

男達の代表として俺と話していた三十手前、下手をすれば三十を越えてるかも知れない細長い顔をした男がそう言い、自分が少女に騙されるまでを詳細に語ってくれた。

周りの男達もその人が喋る中で、所々頷いたりしていて、おおよその手口は全員が共通の認識を持っているようだった。

実際語ってくれた内容も商人風の男から聞いたものと同じ様なものだった。

他の男達に改めて「皆さん、このような感じですか？」と聞くと力強く頷き返す。

これで片方の言い分は揃った。

次は騒動の原因、力無くへたり込んでいながら男を騙し続けてきた可愛らしい少女。

その言い分を揃えなければならない。

地面に力なく座り込んでいる少女の前にしゃがみ込んで、目線を合わせる。

泣いてたり、怯えている子供なんかは目線を近くして優しく語り掛ける事で、素直な子なら言うことを聞いて懐いてくれたりもする。ちなみにこれはバイトで培ったスキルで、そのおかげで割り親子連れに顔と名前を覚えられてたりする。

今回はそんな小さな子供ではないものの、怯えて精神的にも弱ってる事が見て分かるので、少しでも信頼してもらったためにやってみたが、どうやら効果は少なからずあるようだった。

「……あなたは、どうして……」

今にも泣き出しそうな声で喋るので、喋るのを一旦止めさせるために手を翳して制する。

それは少女に伝わってくれてみたいで、言葉は無くなる。

背中に刺す男達の視線が痛い、慌てず焦らず、落ち着かせる。

「安心してください、私はあなたの味方です。だからどうかありのままの真実を話してください。それで私が何とかします」

立場的には仲介人としてなので、彼女の味方とは大きな声で言えず、彼女だけに聞こえる声量で耳元に少し千近づいて囁く。

耳元から顔を離し彼女の顔を見るが、まだ疑いが完全には晴れてはいないような表情だったので、最後の一押しとして出来る限り優しく、笑顔で、今度は囁く必要は無いのでしっかりと言葉を吐く。

「大丈夫」

彼女の顔が今度こそ明るく、希望を見つけた顔になる。

後は事の顛末を聞き出す。

それは俺が言わなくても、少女は状況が分かっっていて自分から話し出すのだった。

「……私はシア・アメシスト、孤児院の子です」

少女の名前とこの騒動の真相に迫るキーワードと思われる、孤児院。

それを聞いた男達が急にざわめき出す。言葉の中の単語すら聞き取れないが、少女の言葉になにかを連想させるものがあつたのだらう。

少女はそんな男達のざわめきも意を解さない素振りで、しっかりと俺の目を見続け、話を続ける。

「私は幼少の頃に捨てられて、ずっと孤児院で過ごしてきました。親の顔も知らないし、記憶も孤児院の物しかありません。……けど私は幸せだった。母代わりに大事に育ててくれた人も居て、私は血の繋がっていないとは知っていましたが、それでもその人を母と呼びました。それが……母さんが一番喜んでくれたから……！」

何かを思い出したのか、一度引っ込んだはずの涙が再び溢れそうになっている。

俺はゆっくりでいい、とだけ言って静かに言葉を待った。

後ろの男達はもう黙っていて、ただ静かに俺と同様少女の、シアの言葉を待っていた。

「でも……幸せな日々は永遠には続きませんでした。孤児院の前に置かれて行く子供が年々増えるばかりで、私も手伝いはしていたものの、それでも次第に追いつかなくなり、やがて……母さんは過労で倒れ、そのまま……息を引き取りました。そうなれば母さんの名前の元に集まっていたお金も、人一倍動いていた母が居なくなる事によって人手も足りなくなり、その結果は……」

そこでシアは黙ってしまった。

再び涙を溢れさせ、今度はそう簡単に止まりそうも無いほどに泣いていた。

しかし、俺には今のシアの話が男達から金をふんだくる事に繋がらない。まだ何か明かされていない真実がある。

それを知るのはシアと、後ろに居る、さっきざわついていた男達。

俺は振り返り、男達に問う。

「何か……知っていますね」

なるべく感情を消す。怒りを感じていた訳じゃないし、シアに同情した訳でもない。

出来るはずがない。まだ真相を知らないのだから。

「あ……ああ、確かその孤児院は潰れてしまった。それと残された子供達の引き取り手を探していたのも知っている。その子供達がどうなったかは知らないが……」

「売られましたよ。……いや……買われていった、と言った方が正しい、ですかね……」

いつの間にか泣き止んでいたシアが少し強めに話しながら会話に入ってきた。

その声にはいろんな感情が混ざっている、そう思わせる声色だった。

「私は働ける年で働く所も見つかったので、この街から離れる事はありませんでした。でも買われた子供達が心配で、……これは明かせませんが、ある人に頼んで子供達が今どうなっているか、……それと過去の事を調べてもらいました」

急に男達がざわめく。それもさっきの比にはならないほどに。中には逃げ出そうとする者までいたが、俺は大声を張り上げ、元からこの騒ぎに興味を向けていた人達に協力を仰ぎ捕まえてもらう。

元よりこの街に住んでいるのだから逃げ道などないだろうに。

ここまでシアが話してるのだから、延々と怒鳴り続けた奴等は、最後まで聞かなければいけない義務がある。

男のむさい怒鳴り声より、透き通るようなシアの声で語られる方が一千倍はマシなのだから、それくらいは我慢すべきだ、と逃げた奴等に言い聞かせ黙らせる。

逃げ出そうとした男達は涙目になっていたが、生憎と逃げた事が自分たちが悪いと示しているようなもので、一切の情けはかけない。

場が収まると、シアは再び語りだす。

「そして子供達の生まれの理由を知りました。金持ちの道楽、と言うにはあまりに行き過ぎたその行為を」

一息を置く。

きつとこれから喋ることに關しては、一際抱く感情が違うのだろう。

目には先程までは見えなかった怒りが垣間見え、それが男達に向けてられている。

「彼らは自分達が遊び呆けていた証拠を！ その証拠の子供を孤児院に預ければいいと、繰り返し続けた。その結果は、……悲惨な物にしかならなかった！！ 子供達の引き取り手を探す時もある人は事実を知りながらも、無視をした！！」

シアが初めて見せた激情だった。

だからその声に、雰囲気、…… 事実、近くの全員が驚き、当の本人達は力なく崩れ去る。

正直、この展開は予想していなかった。

俺が借金を肩代わりする方向で話を進めようとしていただけに、俺もこの話に吞まれていた。

でも俺は立場上仲介人だ。もう流的には決した様なものだが。だから最後には俺が仕切って終わらせなければなるまい。

「ここに互いの合意の元、選ばれた仲介人である私が、この騒動の裁量をさせて頂きます！！」

噴水を取り囲む全員に聞こえるように、まるで一つのエンターテインメントのように。

「騒動の発端は少女、シア・アメシストがここにおります男達に色仕掛けを仕掛け、そこに出来た隙を突き金を盗んだ事に始まります。男達の言い分は一つ。あの女が俺達を騙した、だから俺達は悪くない。一方少女は男達が金に物を言わせ、子供を作るも育てずに他人に擦り付けたその責任を、大切な母君と必死に背負ってきました。しかし当然限界はあり、それに耐え切れなくなり家族同然の子供達は各地へ売りに出され、たった一人の母親を間接的に殺され、居場

所である孤児院すら潰された。後に調べると引取り手を探す時に名乗り出なかった人達が子供達の生みの親だと発覚。それを知った彼女は！？」

ここまで大仰に囃し立てると嘘っぽく感じてしまうのだが、今の時に限ってはこれぐらいやっても足りないくらいだ。

言葉を切ったのはこの先の閉め所を知らないから。

彼女が何故事件を起したのかは分かっていたが、その先のどうしたいのかを俺はまだ聞いてない。

だけど、わざわざ彼女に聞いてから俺が言い直す必要も無い。

座ったままの彼女に手を差し伸べる。

ここから語るのは君だ、と。

少女は手を取ってくれた。立ち上がり足に着いた汚れすら払わずに、大きな声で叫んだ。

空に、全てに、響くように。

「彼らが見捨ててきた子供達とその子供達の未来の代金を払っていただき、新たに孤児院を建てます！！」

彼女の言葉を染み渡らせるように間をおいて、後は俺が場を引き継ぐ。

「仲介人である私には少女、シア・アメシストに理があると思いますが、……折角ですので皆様にも裁量をしていただきましょう！！私と同じ意見をお持ちの方は拍手を！！」

俺が叫ぶと、次の瞬間拍手の嵐が巻き起こる。

OPの歓迎の拍手とは違う、皆が正しいと思った、彼女が正しいと。

行った行動だけじゃなく、その理由に至るまでを吟味し、下して

くれた判断に、もはやケチのつけようは無かった。

そんな拍手の嵐の中、服が引つ張られた。

振り返ると少女の顔があり、瞳が合う。

「……ありがとうございます！」

そう言って少女、シア・アメシストは大粒の涙を流した。
今度は悲しみからではなく、喜びから。

結末

騒動は収まりを見せた。

街中での大騒ぎに城の兵士達が何事かと様子を見に来て、当事者であるシアと男達は事の顛末を詳しく聞くために城へと連れて行かれた。

俺はただの仲介人だったので、特に拘束されるような事も無く、町の人々から賞賛されるばかりだった。

仲介人、と言っても話を聞き出し、町の人々を扇動したりと、道化の様な役割しかしてなかったが、結果的に思った通りの結末に至れて良かった。

無理矢理にでも首を突っ込んで、このイベントをこなそうと思った一因に、あの少女の存在がある。

流星にこの展開は予測できなかったが、あの少女が仲間になる可能性が高いと睨んだからだ。

地面に座っていた時に魅力的な細足が顔を覗かせるスカートの隙間から見えた、太股の所に黒いベルトで括り付けられた、こげ茶色の皮の鞘に納まった短刀。

あれは彼女が戦闘も可能である事を示している気がしてならなかったのだ。

それに他の街の人々なんかとは違う、物語の本筋に絡まないモブキャラ特有の地味さという物が、彼女から感じられなかった。

むしろその逆であの目立つ髪色と、可愛らしい顔立ちに声、服装はどこか周りとは一線を引くデザインだった

これであの少女には貸しを作れたので、今後それを理由に仲間として連れ立って歩けるとすればいい事尽くめだ。

最初からそんなに高いレベルでは無いだろうけど、一人が二人になって戦闘における行動回数が増えたり、パーティ内での役割分担なんかも出来るようになる。

もつとも彼女の目的が目的なので、ここはまた一つ彼女を言いくるめる舌戦を繰り広げなければならぬかもしれないが、こちらに好意を寄せてくれている分、あの騒動を収める時よりも簡単かも知れない。

あの少女の事を考えたついでに改めてあの騒動を思い出す。

推測にしか過ぎないが、彼女はある真実を皆に分かってもらいたかったんだと思う。

だからあそこから実力行使で逃げようとも思わなかったんだろうし、どうにか話を聞いてもらおうと最初は努力したに違いない。いや下手をすると子供達の実事を知った時から憎しみ全開だったかも知れないが。

外見からは気の強そうなイメージしか持てないキャラなのに、あの騒動の中で見せた彼女の顔はどれも礼節を知る淑女、と言うイメージしか持てなかった。

とは言え、色仕掛けで騙して金を盗んだ事是否定しなかった事からも、それが事実であるのは十分推し量れる。

どんな理由があろうと盗みを働いた女の子に淑女と言うのは、他の淑女に失礼な気がしないでもないが、あくまでも俺自身が抱いたイメージなので、さほど気にすることでもないだろう。

思い返した騒動と少女の心境を推理して一つの疑問が浮かぶ。ゲームのNPCなのにリアル過ぎないか、という事だ。

あの最中では普段大人しい俺もついに気が大きくなり、演劇部での癖なのかつい大立ち回りをしてしまった。

これがNPCしか居ないオフラインゲームだから良かったものの、将来的に出てくるであろうオンラインゲームでやったならさぞ恥ずかしい事だろう。

自分の行動を思い返して、顔が真っ赤に染まり、恥ずかしい気持ち胸いっぱい広がりは悶える。

少しの間頭を抱えて悶えるとようやく落ち着きを取り戻すことが出来て、改めて落ち着いて考える。

門番の時はてつきり何回城に入ろうと挑戦しても、寸分変わらない動作と、一言一句変わらない台詞で返されると思っていたので気にせずに先へ進んだが、今回は俺の話す言葉を理解した上で会話をしていた。

選択肢があるわけじゃないので、あらかじめ決められた通りにNPCや主人公が動くのではなく、プレイヤーの行動、言葉で状況が逐一変わっていく。

そしてそれにしつかりと対応するNPCの頭脳。思考の元であるAIが人間と同等の物を持つてるとしか思えなかった。

VRGが出るまでの間にこんな高等なAIを持ったキャラが居るゲームは無い筈だ。そんなゲームがあつたならネットなんかで騒がれないはずが無い。

それにこの人間並みの思考を持つキャラは、固有キャラの可能性が高いシアに限つての事じゃないという所も、中々興味深いものがある。

商人風の男は典型的な返答だったものの聞かれたら、それに対しての答えを返してくれた。

仲介人として間に入つた時に男達を代表して俺と会話していた、細長い顔の男も俺とちゃんと会話をしていたし、感情が荒れ狂つていた男達をなだめようと俺が言つた言葉も、しつかりと男達は理解し収まってくれた。

シアは俺が差し出した手の意味を言葉にせずとも理解してくれたし、街の人々も突然の俺の呼び掛けに応えてくれた。

俺の行動が一般的な行動だとは思つてない。

それを予想し対応できるAIを作るとなると相当難しいのではないかと思う。専門的な知識は無いので詳しくは分からないが、簡単に出来るなら、これもまたさつきと同じ理由で従来のゲームでそういったキャラが居ないのはおかしいはずだ。

それにこれはオフラインゲームで、いくつものプレイヤーが購入し、プレイしているはずで、それら全ての行動に対応できるのは、

やはりそれぞれのデュアルワールドにおいてNPC達が自分で考え、行動する必要がある。

人と同等の思考を持つ仮想の人間。

映画かなんかでよく題材にされたりする言葉の並びだが、今回は同じフィクションでありながら自分で、自分なりのコンタクトを相手に取れる。

その間には絶対的に埋まらない差があるが、逆にここまで人間に近いと良くない事を考えてしまうの仕方が無い事かも知れない。

年齢制限的な行動はおそらくは禁止されている。

デュアルワールドは全年齢対象のゲームなので過度な暴力や性的行為は無いはずだ。

……そもそもVR技術の応用での性行為等はVRGに限らずVR技術に関わる全てで禁止されている為に関係なかった。なんでも身体や精神にどのような影響を及ぼすか分かっていないからだとか。

いくら実用化が進んでいてもまだまだ発展途中の技術なのかも知れない。

後はプレイヤーがデュアルワールドの住人に対してどのような感情を抱くか、だ。

俺はゲームをプレイしているだけで、いかに住人がリアルだろうとその絶対的な壁を持つために気持ち悪いとは思わない。

そもそも自分自身がこの世界の冒険者と言う役割を演じているのだから、その仮の自分と相対しているのが限りなく人間に近いフィクションのキャラだとしても、こっちもフィクションのキャラを演じているだけ、と割り切れてしまう。

だが俺とは違う考えを持っていて、はっきりと住人達を気持ち悪いと言う人も居るだろう。

現実と同じ様にそこに人がいて、喋りかければ応えてくれて、自分の行動が周りに影響を及ぼす。だからこそ、そこに現実と同じ考えを持ってきてしまうのだろう。

……他のプレイヤーの心配をしてもしょうがないか。

空を見上げた。

熟しすぎて腐りかけた思考を、空を見上げる事で綺麗にする為に、長く答えの出ない事ばかりを考えていても、ただ脳を空回すだけの無駄な行為にしかない。

他人がどう思ってるのか、どんな技術でこの世界が出来ているのか、そんな事は何も気にする事じゃなかった。

俺はただこのデュアルワールドの冒険者となって、砕かれた星の命を探す。ゲームをクリアする、それだけがやる事だ。

別にオンラインゲームではないのだから他のプレイヤーに気を使うこともないし、ノイズのような思考をこのゲームに持ち込んでも仕方ない。

この世界を余す事無く楽しむ。それが一番必要で大事な事だから腐りかけの思考は無くなり、強い日差しが満遍なく街に降り注ぐ。噴水に腰掛けていた俺は、視線を空から城の方へと移す。

そこには一人の少女が立っていた。

右手を上げて存在をアピールすると、俺の姿を見つけた少女が途端に表情を明るく切り替える。長い間事情を聞かれていたおかげで暗かった表情は見る影も無い。

噴水の近く、俺の目の前まで駆けて来て立ち止まると、肩より少し長いツインテールが揺らしながら、腰ぐらいまで頭が下がるくらいのお辞儀をされた。

下げられた頭を無理矢理上げる訳にもいかず、とりあえずは黙って頭を上げるのを待った。

少女、シアが頭を上げると同時に俺は言葉を掛けようとするが、それより早くシアが言葉を滑り込ませてくる。

「本当にありがとうございました！ あなたがいなければ私は……」

そこまで言うとは急に言葉が途切れ途切れになり、それに伴って眩しいくらい笑顔が歪んでいき、泣き顔へとゆっくり変わっていく

のが見て取れた。

あ、と思う間も無く、シアはその顔を手で覆ってしまい、嗚咽を漏らす。

思った通り、見た目のままの強気キャラではなかったようだが、それにプラスして涙脆い部分もあるらしい。

周りの人々が視線を向けてくるが、大体の人がさっきまでの騒ぎを知っているので、男が少女を泣かせている、といった場面に見られないだけまだマシだった。

それでも街の人達が見ている中、ただ黙って待つのも男らしくない上に、刺さる視線のおかげで居心地も良くないので、噴水から腰を上げてシアに近づく。

我ながら凄くクサイ事をしようとしているのは分かっていたし、後でまた悶える事になるだろうという事も分かっていたが、それでもその小柄な体と小さな肩を揺らしながら泣いている姿を見て、体が反応してしまいそつとその体を包み込む。

心の奥底では拒否されたらどうしよう、なんて怯えた気持ちもあったが、それは杞憂だったようでシアは受け入れてくれたみたいだった。その証拠に最初は俺が一方的に抱いてるだけだったが、こちらに体を預けてくれる。

そして泣き止む所どころか、更に声を上げて涙を流す。

全てが終わって、今まで溜め込んでいた辛い気持ちなんかが堰を切って溢れ出したのだろう。

俺にとってはこの世界は今日来たばかりなのだが、シアにしてみればここで暮らしてきた記憶が、思い出がある。

どのくらいの期間かはわからないが、その生きてきた年月の一部を灰色に染めてきたのだから、それはとても悲しい事で、その今日まで積み重ねた灰色の時間も今日限りで終わった。

だから救われた証に、全てを終わらせる為に、今はただ胸を貸して泣かせてやるのが俺が出来る事だった。

「……大丈夫？」

「……はい……すいま、せん……」

シアは散々泣いた後、ようやく落ち着いてきて一緒に噴水の端に腰掛けて居たがまだその顔を手で隠したままだ。

泣いた後らしく目が真っ赤になつてゐるのをシアが体から離れた時に見たが、すぐにそれを隠してしまった事から、そんな顔を見られなく無いという事だろう。

……現実こんな子が居たら即告白なのに、と考えるがゲームと現実を一緒にするな、なんてお決まりの台詞がどこから飛んで来そうなので自重する。

そこでふと思い出し、システムスフィアに触れてメニューを開いた流れのまま止まる事アイテム欄を開く。中から騒動の後に露店のおばさんからもらったソフトクリームを二つ選択し取り出す。白いクリームの甘さがどうたら、要約するとオーソドックスなバニラ味と説明文に書かれていた。

それを泣き腫らした顔のシアに差し出す。

おずおずと差し出す手にしっかりと握らせ、手を離す。

シアがそれを一口食べるまで見守り、恐る恐るだったが口をつけたので、俺も自分の持つソフトクリームに口をつける。

それなりの甘さだったが、しつこくなく口の中で溶けると、また違った甘みが膨らむ。

後味はすつきりしていて、いくら食べても太らないんじゃないかと思うぐらいだ。

……ゲームの中だから太るわけが無いという突っ込みは考えないでだが。

ローグ系、不思議系と言った方が一般的には分かりやすいかもしれないが、そういったゲームには必ずあると言つていい満腹度というステータスは、このデュアルワールドには無い。

RPGなのだから無くても不思議な事は無いのだが、色々とりア

ルな世界なのでそういったステータスがあってもおかしくない、と思って改めてステータスの画面なんかを見たが、それらしい表記は見当たらなかった。

このソフトクリームも満腹度を上げるものではなく、食べると体力を回復させる道具——しかも薬草の五倍は回復する——と説明にも書いてあって、未だに一度も戦闘を経験していないのに使うのはもったいない気もするが、二人で食べなよ、とくれたおばさんに悪い気がしたので大人しく二人で食べる事にした。

暑い日差しの中、後ろには噴水と子供の声が、前には冷たいソフトクリームと暑さに負けにくいぐらいのむさ苦しい露店の親父が、何かの商品を声を張り上げて宣伝している。

街の活気をBGMに黙々とソフトクリームを食べていた。

シアの方が一口分早く食べ始めたのに、俺のほうが明らかに早く食べ終わりそうだったのは性別の差か、食べ方の問題か。……ちなみにソフトクリームに限らずアイスは舐めずに、普通に食べる派だ。そんなくだらない事を考えながら街を歩く人々を眺めていると、横から声を掛けられる。もちろん声の主は俺の隣に腰掛けるシアだった。

「今回は本当にありがとうございました。私じゃどうにもならなくて……復讐、って訳じゃなかったんですけど、私にはあんな事しか彼らに出来なくて、彼らに見つかって囲まれた時も真実を全て伝えなかったんです。どんな顔をされようともそれが真実だと知って欲しかったです」

「……ああ、わかってる。だが俺はあんな事を言ってしまったが、君の取った方法は好きじゃない。結局それはただの犯罪でしかないし、下手をすれば真実すら誰にも届かせられなくなる。本当に伝えたい事があるのならば誠意を持って、正当な手段で迫るべきだ。……ごめんね、説教くさくなっちゃったけど」

「いえ、それは正しいと思います。私が……間違っていたんです。

母さんも自分が辛い時こそ人に優しく接しろと言ってましたし、それを守れずに不当な手段で奪われたものを取り返そうとした……」

少し声色が震えていたので、また泣きそうになっているのが手に取るように分かる。

また泣かれても困るのでその頭に手を優しく乗つけて、撫でてやる。

破壊力抜群の潤んだ瞳での上目遣いに危うくやられそうになったが……何とか堪えてゆつくりと撫でながら言葉を掛けてやる。

「大丈夫。確かにやり方は駄目だったけど、行動する元となった気持ちは正しいはずだよ。シアが報われなかった子供達のために何かしようとした。それは間違っではないから」

「あ……はい、ありがとうございます……」

赤面して俯いたのでシアの表情は見えないが、怒ってるという事も悲しんでいるという事も無いだろう。

ふと、こんな妹が居たなら俺も良い兄でいれるのになー、と現実の残念な妹を思い浮かべてしまう。

思考は現実に向いていたが、撫でてる手は止まらずシアの頭をひたすらに撫でていた。

だが思考もこっち側に引つ張られる。

そのきっかけはシアがぼそりと呟いた言葉。

何か言ったのは分かるが、街の喧騒に吞まれ何を言ったのかは分からない。

わからないからと言って無視する訳にもいかず、俺は聞き直す。今度ははっきりと聞こえた。

「……名前。あなたの……」

そういえば俺はあの騒動の時にシアの名前を知ってなんとも思わずに使っていたけど、俺の名前をまだシアに教えていなかったのに今気が付いた。

「ああ、俺の名前まだ教えてなかったな。……ごめんな、俺は……」

そこで固まってしまった。何故かという俺が今言おうとした名前は現実の名前で、ここ仮想現実での名前ではなかったからだ。

……そういえば、アバターを決める時に名前を決めてない。いや、俺の記憶が正しければ操作盤にも名前を入力する欄は無かったはずだ。

「……あの……」

「ああ、ごめんね。ちょっと待って……うん、何も聞かないで、少
しだけ、ね？」

やばい。こっちに来てから初めてうるたえてるかも知れない。

とりあえずはこの場を切り抜けるためにも、普段使ってるHNとかでいいだろう。

……後で名前を設定する所を確認しておこう。

手早く思考を纏めて、目が泳いでるシアに名前を告げる。

「俺は、二ヶ。そう呼んでくれ」

「……二ヶ、さん」

まるで噛み締めるように俺の名を反復するシアの頭から手を離し、その口の端に付いた少しのソフトクリームを指で取ってやる。

それを数秒たってから認識して、シアの目がゆっくりと見開かれて、真っ赤に染まる様は見てるこっちとしては中々に見ごたえのある変化だった。俺がうるたえた事を隠すためにやった事とは言え少

々やり過ぎたかも知れない、とも思ったが、可愛かったので良ししよう。

再び俯いてしまったシアに助け舟を出してやる。

もっとも攻めたのも助けたのも俺なので、自作自演みたいなものだが。

「それで城に連れて行かれて、その罰とかはなかったのか？」

男達とシアは街中で大騒ぎ——より騒ぎを大きくしたのは俺だが——した当事者として連れて行かれたが、理由を含めればシアの方が理に適っているとは言え、行った行為としては実際に十数件から金を騙し取ったシアの方がよろしくない。男達はそれがあつたからこそシアを見つけて取り囲むような行動に及んだのだから。

だから事の顛末を城の兵士が聞いたとして、どう判断を下すかは俺には全く分らない。

今こうしてシアとゆったりと話せているし、シア自身もあまり切羽詰まったような態度も取ってなかったので大丈夫だとは思うが、関わった以上その顛末は聞いておかなければ目覚めが悪い。

「私は、私が行動を起す理由と彼らが街中で長時間私を拘束した事を考慮されて、お金を騙し取った事とその盗んだお金は帳消しだと言われました。その代わりに彼らもお咎め無しと言う事で決着しました」

「そう、か……」

案外あっさりとしていて驚いた。流石にこの世界観で禁固刑とかは無いと思っただけだが、あるいは……なんて思ってた自分がどこか馬鹿らしく見えてくる。

だがお互いにそこまで損失をこうむった訳じゃ無さそうだし、これにて一件落着か。

ああ、最後にシアに聞く事がまだ残っていた。

「ところでシアはこれからどうするんだ？」

過去も清算出来たようだし、確か働く所もあるといったからそこで働いて、働いて、働いて、すこしづつ貯金をためていき、新たな孤児院を建てて、そこで憧れた母親のように捨てられた哀れな子供を育てていく。そんな未来をシアは考えているかもしれない。

正直、シアが仲間になるという可能性はあの騒動のクライマックスで言った、シアが目指す目標を聞いた時に格段に下がったように思えた。

孤児院を建て直す。つまり詳しい事は聞いていないが、おそらくはこの思い出のある街で、出来れば同じ所に建てるだろう。お金がどのくらいかかるかはわからないが、相当な金額が必要だろうし、継続的に収入も無ければ続かない。

一応俺は冒険者と言う立場で、根無し草な俺が彼女のためにできる事といえばお金を立ち寄った時に寄付するとか、食べ物なんかを贈与するとか、そのぐらいしか浮かばない。

ゲーム中ではサブイベント的なポジションで割とあるイベントなので、もちろんやり込む派の俺は、これから何度と無く足を運ぶ事になるだろうがそれもいいだろう。

現実世界ではそう言った行動は無にも等しいのだから、仮想の現実くらいは心優しく生きたいものだ。

突如、俺の思考を遮るシアの発言が飛び出す。

「ニケさんは、冒険者ですよね？」

「うん？あ、ああ、まだ駆け出しだけどね」

戦闘を一度も体験してない上に、いまだ初期装備の初期ステータス。それどころか街から一步も出ていない。もっと言うなら移動し

た範囲が城からこの噴水のある広場までの、百メートルもないんじゃないかと思う短距離。

二つの意味で駆け出しな冒険者。

そんな俺にさらにシアは困惑させるように言葉を紡いでいく。

「私も、連れて行ってくれませんか……！」

出発

それは意外な申し出だった。

とは言え最初からそれを狙っていただけに、心の中では歓喜していたのだが、俺が独りでに考えていた事が引つかかり素直に喜べないのと、どうしてその申し出をするのかという理由が純粹に知りたかった。

だから俺はすぐにその答えを返さず、両手の先同士を合わせながらそわそわと俺の返事を待つシアに、まずは質問を投げかけてやるのだった。

「シアの目標、孤児院の件はどうするんだ？てつきり働いて建て直すものだと思つてたけど……」

「孤児院の事を諦めた訳じゃないんです。でも普通に働いていたら何十年掛かるかわかりませんし、稼ぎも普通に働くより冒険者としての方がいいんです。旅のついでに色々と周って見るのもいいんじゃないかと思つて……。もちろんニケさん次第なのですが……」

「俺次第、か……」

何も迷う事はない。むしろ願つたりな申し出なのだ。

俺は本当に駆け出しで、この街の事も、外の事も何も分かつてる事はない。

そこに仲間が一人増える。しかもそれなりの時間をこの町で過ごし、地理に明るい上に、この世界の事も一般常識ぐらいなら知っているだろう。

おまけに、こんな可愛い子を連れていけるなら羨望の眼差しを向けられる事もあるだろうし、何よりこれから予想される長い旅路で飽きることなく過ごせる。

これは可愛いとか関係無しに、話し相手が居ない孤独な旅は得て

して寂しいものだ。

だから俺は何も迷わないで、シアの申し出を受ける。

「俺は構わない。むしろ助かるぐらいだ。……それじゃあよろしく」

右手を差し出す。

左手にはソフトクリームのクリームはもう食べてしまっていてコーンの部分だけが残っていた。

俺の申し出を受ける言葉と、その差し出された右手に何を思ったのかは俺の知るところではないが、しっかりと握り返して、笑顔でそれを喜ぶシアはとても幸せそうだった。

「こちらこそ無理を言つてすみません……。不束者ですがよろしく願います」

笑顔が日差しでさらに眩しく照らされる。

その返事の言葉は色々と誤解を招く気がしなくてもないが、シア自身が本当にそう思っているという極僅かな可能性もあるので、特に言及する事もなくシアの差し出した手を握る。

シアも握り返してくれて、硬く握手を交わした。

システムからシア・アメシストが仲間になった的なメッセージが出てきても不思議じゃなかったが、残念ながらそんなメッセージは出ない。

でもお互いが仲間だと認める事によって、システム側でそれを勝手に認識でもしているのだろう。

シアと固く結んだ手を解き、システムスフィアに触れて、メニューを出すところにはしっかりとシアの名前が仲間として、パーティの一員として登録されていた。

パーティが何人まで連れて行けるのかは分からないが、流石に二人二人でその枠が埋まるとは思えないのでとりあえず置いておき、

新たにパーティに入ったシアのステータスを見ようとメニューを指先で叩く。

そこに表示されたステータスは、ほとんど何も表示していなかった。

せいぜい表示されていた所は名前や武器、生い立ちと書かれた文字。生い立ちの文字を叩いても出てくるのは俺がああ騒動の中で聞いた事と何も変わらない事ばかり。

なんだこれ、と思って色々試すものの何も変わる事はなかった。思いつくのはパーティ加入時のレベルが俺、つまり主人公基準で俺がレベルだからシアもレベル……そのせいで魔法なんかは一切覚えていない、と言うのは十分に考えられる話だった。

しかしその考えからいくと、魔法、スキル、アビリティは分かるが、レベル、基礎ステータス、HP等も一切の表示がないのはどういう事なのだろう。

従来のRPGではもちろんこんな仕様を見た事はないし、何らかの意味があるのかは分からないが、現実問題そうなってるのだから意味のある仕様なのだろうと無理矢理納得する。

念のためシアにも確認しようと顔の向きを変えると、ばつちり目が合う。

「……どうした？」

「いえ、ニケさんこそ何も無い所を眺めていて……、何か考え事ですか？」

「え……」

俺は今まで空中に浮かんだ、近未来デザイン的な半透明の操作盤を操作し、シアのステータスを見ておこうと考えて、そのあまりにも情報が少ない画面を見ていた。

それが今のシアの言葉からすると、このメニュー画面はシアに見えていないという事になる。

システムスフィアがNPC達に接触も認識もされないのと同じで、このメニュー画面も同様に接触、認識ができない。システムに関わる事、普通のゲームならば気にする事でもなかったが、このVRゲームという舞台になって初めて意識する。

確かにNPCがメニューを開く必要もないし、それで困る事もない。NPC達からすればここが現実で、俺達が普段暮らしている現実をそれと認識する事となんら変わらない。

それならば、レベル、ステータスやスキル、魔法等ははどうなるのか。

戦闘を経験し上昇するレベルは、戦闘経験を積んだって事で特に問題ない。ステータスも同様に、体が何だか軽い気がする程度の認識で済むだろう。

スキル、魔法に関してはレベルアップと共に閃いたという形なら問題はないだろう。

アビリティはどうなる？

未だに俺のAPはゼロなので何も習得する事は出来ないが、文字を叩くと一覧が表示され、どんなアビリティがどの程度のポイント消費で獲得できるのか、どのような効果を持つのかが表示されている。

その中には多種多様な特殊技能の名前が並ぶ。

裁縫、料理、鍛冶、採掘、掃除、錬金……家庭的なものから専門職的な事までがごちゃ混ぜに並んでいて良く分からない感じだったが、ある法則性に気付く。

戦闘に関するものは並んだ名前の中には無く、それ以外の部分ばかりがアビリティの一覧に名を連ねる。

つまり、アビリティもまたスキルや魔法と同じで自然に習得が可能と言うわけだ。

だからNPCにはメニュー画面が要らない。

俺はレベルアップなどでシステムからポイントを供給されて、それをメニュー画面から使う事によって、昨日まで出来なかった事が

……さつきまで出来なかった事さえも、ポイントを消費しアビリティを習得したならば、その瞬間から出来るようになってしまう。

ゲームをプレイしている側から見れば当たり前だが、何年、何十年とこの世界で生きてきた人達に、俺がこんなチート紛いな事をしているのか、と俺の僅かな良心が痛むが、おそらく強化しなければただの人間程度の戦闘力しか得られないので、ここはゲームとして割り切って痛む心を治めておく。

シアが心配そうに見つめてくるので、耐え切れなくなって適当に誤魔化す。

「……ああ、うん。考え事をしててね、これからの事とか……」

「これからの事、ですか……？」

シアも俺に付いて来ると言ったのだから、俺の動向はすなわちパティ、ひいてはシア自身の動向にもなり得る。

だからそれに興味を向ける事は自然な事で、俺もこういう展開になってしまったので、シアに街を案内してもらおうとか考えていた。俺自身の出自がどうか良く分からないので、一応、騒動時に余所者と言ってるのでそれに沿って、シアに捏造した設定のまま、道案内を頼む事にする。

「まだこの街に来たばかりで見て回る暇も無かったから、街を回りたいんだけど大丈夫かな？ シアは退屈になると思うんだけど……」

「私は大丈夫です。……むしろ喜んで道案内を勤めさせていただきますよ」

ありがとう、と言って手に持ったコーンを口に放り込んで、噴水から腰を上げる。

シアもそれに習って、まだ手に持っていたコーンを口に入れ立ち上がる。だがコーンまでしっかりとアイスが入っていた様で、きつ

とあのキーンとした感じを我慢しているのだろう、こめかみ辺りを押さえて、まぶたを強く瞑り、眉間に皺を寄せている。

そんなに急がなくてもいいのに、と思うがあえて言葉にする程でもないか、と思い少しだけ笑ってやる。当の本人はそんな事とは露知らず、ひたすらに耐えているのだった。

シアの頭の痛みが取れるのを待つてやる。

ようやく収まってきたのか頭から手を離し、今までの自分を思い出してか、恥ずかしそうな笑みを俺に向けて浮かべた。

それに同じく笑顔で返してやり、予期せぬイベントもあってか遅くなってしまったが、当初の計画通りに街の人々から話を聞きながら街の探索へ向かうために、改めて声に出して言う。

「それじゃあ行こうか」

「はい！」

本来ならそんな事も言う必要はなかった。でも予期せぬイベントこと、シアの加入イベントにより、こんな事を言っても返事をしてくれる仲間が増えた。

それを？み締めて足を踏み出す。街の喧騒に紛れて初期装備の皮靴が、石の地面を踏み鳴らす。

それに続いて軽い足音が続く。

最初の目的はこの噴水周りでの聞き込み。あの騒動で街の人々に顔が知られてやりやすくなってるはずだ。……俺の気分的な問題でも。

探索と遭遇

街での聞き込み及び探索は思いのほかスムーズにいった。

その要因はやっぱりシアのおかげ、と言いたいのだが半分ぐらいは意外な事に俺のおかげでもあった。

正しく言えば俺の冒険者と言う肩書きが、思っていたよりも力を持っていて、シアの地の利と俺の人に対する利が、相まった結果、と言うべきか。

まず計画通りに噴水の周りに居た人達に話を聞いた。

特に重要な情報は無く、RPGにはよくある基礎的な情報ばかりが集まった。

この街はあの噴水を中心として円を描き、そこからはみ出るように城が建っている。

シアから聞いて分かった事だが、城から街を貫き外へ繋がる大通り、その中心に位置するこの大きな噴水を取り囲んでいる建物の群れを『内街』《インタウン》

それ以外の外側の城壁に近い所を『外街』《アウトタウン》そしてその全てをまとめたこの国の名前はフィルストと言うらしい。

俺がシアの騒動に巻き込まれたのはもちろん内街。

ここでは城に続く大通りがあることから城に用のある者や、観光で訪れる人なんかが多く来る場所らしく、物や宿の質は高いものと同じく値段もお高いものになっているという話だ。

逆に外街は正反対、というか汗臭い感じの所だとシアに教えられて、最初は何の事かと思ったが実際に案内されて納得した。これはたしかに汗臭い。

なにせ城壁に隣接した外周部の通りは、誰も彼もがあゲーム開始時の、王様が叫んでいたあの時の冒険者達によく似た格好をしていたからだ。

外街は、内街が気品と礼節を弁える上級階級の街とすれば、外街は正反対の有様に見える。

質より量、静かさより騒がしさを選ぶような、しかも全体がそういう風潮になってるのに驚いた。

なんでも休憩がてらにこの街に立ち寄る冒険者達が多いために、自然と外街には冒険者に適した環境が出来上がっていき、気付けば一日寝ればいい宿屋や、内街とは味のランクが落ちるが量はその数倍を誇る定食屋、冒険者達の交流の場であると共に情報交換の場でもある酒場等どんどん増えていったらしい。

それで最終的には冒険者が多く集う、土臭い感じになってしまった、というところか。

何故冒険者が外街に集まるようになったのかは実に単純で、外に出るのにも、入るのにも近いから。

街から外へ通じる門は一つで、下手をすると城の物より豪華なのでは、と思わせる大きさを誇り警備している兵士も何人が居るうえに、休憩所的な物まで備えられていた。

とは言え硬く閉じているものではなく、常に人が二人か三人は通れる隙間が空けられていて、どうやら人が通るのを防ぐものではないらしかった。

シアが言うには魔物の侵攻が及んだ時に閉められるらしいのだが、シア自体は閉じた状態を見た事がないと言っていた。

次に色んな店屋を回……ろうとは思っていた。

いくらゲームとはいえ文無しでお店に入る度胸が恥ずかしながら無かったのだ。咎められる事もないだろうが、VRゲームとなると頭で考えていたRPGの定石よりも、実際感じる恥ずかしさの方が上回ってしまうのだった。

何時間も歩き回って、まるでデートのような有様だったが、収穫は乏しく努力に対して報われた気はしないが別に気にする事もなかった。

疲れきってる足を休ませるために、城のはずれに街とその周りの

草原を見下ろす事のできる高い丘に二人はいた。そこがこの街の、シアの道案内の終点だった。

二人とももう立っている事すら辛いぐらいに足が疲弊していて、そこにたどり着いた時に、なりふり構わずに少し長めの芝生達のクッションに身を投げた。

しばらく二人とも言葉も交わさず、寝転がっているせいで街は首を上げないと見えないが、代わりに空を見ていた。

まだ強く日の光が差す空。メニュー画面を開き、現実時間を確認するがまだ四時過ぎだ。

昼過ぎからあの騒動に巻き込まれ、街をシアと一緒に探索して、まだ三時間と少ししか経っていないというのは自分でも驚きだった。色んな物を見て、色んな人達と話し、全てが新鮮だった。

もちろん知識としては知っているものだし、画面越しにはそれらを見てきたから全く知らないと言う訳ではなかったが、この限りなく現実を再現したVR空間でそれを改めて見るのは、やはり現実に近いだけに新鮮さを感じるのは当然の事かも知れない。

だから、それを思い出して自然に顔が笑い、呟いてしまう。

「楽しかったなあ……」

「そう……言われると、私も案内した甲斐が、あります……」

隣で仲良く寝転がっているシアが俺の呟きに反応して、言葉を返してくれる。

その声はやはり疲労感が現れていて、今にも寝てしまいそうなくらいにも感じてしまうが、シアの顔は笑顔だった。つられて俺も笑顔で返す。

そういえばセーブとかどこでするんだろう……、あと夜とか、俺は中断して現実で寝ればいいけど、そうなると中断してる時はこの世界の時は止まってしまふのだからシアが寝る時間も俺に付き合う羽目になるし、やっぱり睡眠とかは取らないと駄目だよなあ、

NPC達もこの世界で生きてるんだし。

……なんて、これからの事を考えるが、街を探索してて発見した、法則とも言える事実、自分の目で見たほうが早いを思い出し、今は考えない事にする。

なんとかなるだろう。そんなお気楽な考えを添えて。

再び二人共が沈黙する。気まずい様なものじゃなく、二人共が疲れを癒し、この風景を楽しむために。

だからそんな静かな所に、二人以外のものが足を踏み入れたなら、俺とシアが気付くのも当然だった。

そして、ここは街から離れていて、人の目も無く、街の外と同じ様な草原で……だから、敵にエンカウトしたとしても、当然だった。

「——ッ！」

体は疲れきっていたがそんなのかまわずに全身に力を込めて跳ね起きる。見ればシアも同様に臨戦態勢に入っていた。

スカートを少し上げて、吸い込まれそうなその太股に隠されていた短刀を一息に抜いて構える。

それを見てから俺も慌てて、シアとは恥ずかしくて比べられないほど不器用に、錆びた様な黒ずんだ赤色をした銅の剣を構える。

この銅の剣は片手剣なので利き腕の右手に持ち、反対の左手には、盾でも持てればいいのだが生憎とそんなものは無いので手持ち無沙汰だ。

相対したこのデュアルワールドでの最初の記念すべき敵は、黒味がかった紫色の体表を持ち、鋭い牙が並んだ口からはよだれが垂れ流しになっており、鋭い眼光で身を竦ませたくなるほどに敵意、いや殺意に満ちていた狼だった。数は四体と一体。

四体が横一列に並び、その後ろにリーダー格と思われる一回り大きく、基本的な見た目は一緒だが、それとは区別するためか頭の上

でこげ茶の長い毛が靡く狼が一体。

多分、勝てない。そう直感した。

勝てないモンスター、王様の言葉に習うなら魔物だと思う要因は二つ。

ここが地理的に普通は長時間居る必要が無い所だからだ。俺はシアに案内されたからであって、普通のプレイヤーならばイベントで来るか、来ても立ち寄って何も無いと判断すればすぐに去ってしまうだろう。

だからここに敵がいたとしても気が付かない。

二つ目は明らかなリーダー格の狼の存在と、数の多さ。

こいつらはそれぞれがバラバラに動いてるわけではなく、見てすぐ分かるようにリーダー格の狼を中心に集団として、襲ってきてる。なんとか前に陣取る狼達四体を倒しても、その奥に控えるアイツは体の大きさと比例して強さもまた一回りは強いだろう。

こっちは二人。レベルも装備も初期状態。

数も個々の強さも足りないのは分かりきってる事だった。

それに俺は足が竦みそうになって、逃げ腰になっているのが自分でも分かっていた。

現実ではありえないシチュエーション。こちらに殺意を向ける獰猛な敵達。

それに、知らず知らずのうちに怯えていた。逃げていた。

どうせ勝てないなら、逃げるのに全力を尽くせばもしかしたら…

…なんて考えが過ぎる。

足は疲れ切ってるがこの際そんなのは関係ない。原始的な恐怖に押され背を向けて走る事はできるだろう。でも、逃げ切れるのか、と言われると、それもまた無理だろうと予感できる。

現実世界で狼より足の速い人間なんて、ましてやスポーツなんて一切して来なかった俺が仮想世界とは言え、狼の足の速さに適うはずも無い、というのはすぐにわかる。

そついった所は現実と似せなくていいかなあ……などと考えなが

ら、八方塞がりのこの状況に弱腰になる俺の思考を、炎が焼き払った。

え、と思う間も無く手に持った銅の剣が突如現れた炎に包まれ、ただの銅の剣がその赤色も伴って煌々と燃えている。柄までは炎が包んでないが、刀身に宿る炎の勢いからして、普通は猛烈な熱が柄を握る俺の手を襲うのに、全くと言っていいほど熱は感じられない。感覚的にはただ銅の剣を握っているのとなんら変わらない。

これは、起こった現象から察するに付加魔法^{エンチャント}。

誰が？ と疑問が浮かぼうとしていたが、この場にいる者は限られている。

自分ではもちろん無いし、敵がそんなことするはずも無い。だから……。

ファイアチャージ
「火炎装填！」

そう女性特有の声色で叫ぶ。手に持っていた短刀が炎を帯びる。

これは、この付加魔法はシアが放ったものだった。しかも自分だけではなく俺の剣にまで。

でもあの時、シアのステータスを見た時には魔法の類は何も表示されてなかったはずだ。だからこそシアのレベルが俺基準で最底の一なのだと思っただけ、だから魔法の類を覚えていなくてもなんら不思議では無いと納得したのだ。

だが、今確かにシアは魔法を使った。考えても答えが出るわけでもなく、シアの叫び声でようやく今の状況を思い出し、くだらない思考を閉じて目の前の敵に目を向ける事が出来た。

「ニケさん、剣を！」

構える。様にもなっていない素人丸出しの構えだが、今はそんな事構ってられない。

必要なのは敵から逃げ出さず、切り伏せて、生き延びる事だ。

少し長めの草をしつかりと踏み、駆け出す。無謀な突進と言われれば確かにその通りだが、行動の幅が無い今はこの選択肢しか思い浮かばない。

四体の狼は半分の二体づつに別れ、それぞれが俺とシアにその凶暴な牙を剥き出しにして、噛み付こうと助走をつけて走ってくる。

それに対して俺は不恰好ながら剣を横一線に振る。炎が軌跡を描き、まるで炎の壁でも作り出したかのように一瞬ただけで空中を炎が覆った。

すると狼達は速めていた足を止め、殺しきれなかった勢いを保ったまま草の上を滑ってくる。

苛立ったように短く吼えた狼達に足を止める間も無く、再び返す刃で炎を振るう。

攻撃を当てるのを重視し胴の辺りを狙った。まず一匹目に攻撃がヒットしその身を焼いた。もう一匹もそのまま炎で焼き払おうとしたが、一匹目に当たって鈍った刃は、二匹目の狼に当たる事も無く難なく避けられてしまう。

剣を振るったままの体勢で、剣に体重を乗せていた俺は攻撃をよけられた事によって体が硬直する。そんな隙を見逃すつもりは無いのだろう、攻撃を避けた狼は体勢を整え、獰猛で鋭い目で俺を標的と定め、襲い掛かるうとしていた。

だがそれは狼の短い悲鳴のような鳴き声とその頭に刺された炎の短剣に防がれた。

「大丈夫ですか……！」

「ああ、おかげさまで」

狼が、頭に刺さった短剣の炎に体を包まれて、まるで灰のような細かい粒子となり、風に乗ってどこかへ飛ばされていった。

俺の助けに入ったという事は、始めにシアに向かっていった狼二

匹はもうシアの手によって倒されたのだろう。……意外と武闘派なのかもしれない、とか思いつつ、あんなに泣いたりして大人しそうなイメージを持っていたシアを、改めて見つめ直す。

極端に変わったような気配は無いし、言動も普通だった。ただ今は街中でのシアとは少し違っていて、その少し強気な顔立ちに近い、勇ましさを感じられた。

従えていた狼四匹を瞬殺され、怒りを覚えたのかリーダー格である狼がたてがみを揺らして、空間を揺らすように吼えた。

体の奥底まで響き渡るぐらいの声だった。悲しみや怒り、リーダー格の狼が抱いた感情が込められた咆哮。その中でも一番強い感情は怒り。それに殺意も同じぐらい纏っていて、抵抗すら無駄なんじゃないかと思わせるぐらいに迫力満点だった。

……実を言うとシアの付加魔法の炎を振るって狼を倒した時に、これはいけるんじゃないのか、と思った。手下扱いの狼を一撃で粉碎する事が出来たから、それより少し強いだけの奴も二人掛かりなら倒せると、そう思った。

でもその咆哮は、そんな稚拙な考えを吹き飛ばし、余りあって恐怖を刻み込む。

だから一步、足を、引いてしまった。

それを俺が怯えたのだと奴は悟った。だからまずは俺を標的に定め、その足を踏み出すのは至極当然の事だった。……複数を相手にするにはまず弱い奴から。基本に忠実な奴だ、なんて思ってる間も無く間を詰められて、目の間にさっきの狼よりも凶暴凶悪で、鋭く大きな口と牙が俺を噛み砕こうと迫っていた。

怯えに囚われた俺はなりふり構わず、ただその俺に向けられた殺意から逃げるために剣を振るう。だが。

適当に振るった炎を纏った剣は、狼の体に確かに当たったが、まるで岩かなんかに打ち付けたような嫌な音と痺れるほどの衝撃を手に伝わらせ弾き返される。

驚愕する暇も無く反射的に手持ち無沙汰な左手で自分の身を庇う。

そこに盾があつたならいま俺の剣が弾かれたのと同様に音を立てつつも狼の牙を防いでくれただろうが、生憎と現実には盾が無いので当然の如く腕を噛まれる。

痛みは無い。だが左手がぐちゃぐちゃと噛まれ、形と感覚が無くなつていくのが分かる。

右手の剣で再び攻撃を加えようとするが、そこで剣が纏っていた炎が消えているのに気付く。

時間切れ。悪態をつく暇も無く、それでもと剣を振るつたが案の定弾かれる。

だが次の瞬間、狼は苦しそうな悲鳴を上げて、俺の左手を離し、後ろに跳躍して距離をとった。

何事かと見ると狼の右目が無くなっていた。

そして俺の隣にはシアの姿が。それだけでシアがああ狼の右目に短刀突き刺したのだと言うのは簡単に予測がつく。

俺の左手は狼に食われたせいで感覚が無くなり、だらんとぶら下がっている。

HPは現在の状況では確認できないが、まだ全身から力が抜けたわけではないし、剣を掴む右手もまだまだ健在なので大丈夫だろう。

「ニケさん！大丈夫ですか！？」

「大丈夫だ！すまん、助かった」

二人が隣り合わせに立ち並んで狼に向けそれぞれ武器を構える。

一瞬の気も抜け無い。あんな狼の突進スピードからして、もう一度付加魔法を使う暇は無い。だからこそシアも改めて付加魔法を掛け直すといった事はしないのだろう。

だが付加魔法が無ければ、いや付加魔法があっても奴の体表は手下の狼に比べて随分と硬くて通らなかつた。じゃあどこを攻撃すれば。

それは今シアがやったように、これは従来のRPGではなくアク

シヨンの方の知識になるが、ボスが固い時は目や間接の隙間などの柔らかい所が弱点なのでそこを狙うのは、割とよくある攻略法だ。

だから狙うべきは目か口の中、という事になる。

シアもそれが分かっているさっきもそうしたのだろう。

シアに目線を送る。シアも同じ様に俺に目線を送っていたようでした。しっかりとアイコンタクトが取れた。

俺が右側から狼に向けて走ると、反対の軌跡を描いてシアは左から攻める。

狼は迷いもしなかった。右目が死角になっているにもかかわらず、そちら側に回り込もうとしていたシアを標的に捉え、襲い掛かる。

狼からすれば手下三人と自身の右目を潰したのはシアなのだから、俺よりも憎悪値^{ヘイト}が高いのは当たり前だったのかもしれない。だから俺は進路をやや直線的に狼へと取る。

俺を気にしていないというのならこっちとしては好都合だった。

シアの持つ武器は短刀。明らかに武器としての攻撃力は低く、どちらかというと手数重視な武器だろう。対して俺の片手剣は確かに初期装備で攻撃力も低いかもしれないが、一発の威力は短刀よりも重いはずだ。

敵の柔らかい部位を狙って攻撃するならば、手数勝負の短刀より一発が重い片手剣の方が有利だ。

だから俺よりも戦い慣れたシアよりも、今の本命は俺だった。

狼がこっちに背を向け始め、それと同時に俺も片手剣を逆手に持つ。

別に格好をつけてる訳ではなく、斬るのではなく貫く、刺すのならば逆手の方がやりやすいと思ったからだ。

この作戦を成功させるためには、完全に敵の狙いから外れた俺が奇襲として一発で成功させないといけない。

もし攻撃を外してこっちの狙いがばれてしまえば、途端に警戒され隙も無くなり、あつという間に全滅の道を辿るに違いない。

緊張が体を強張らせるが、酸素を取り込んで無理矢理解し、息を

止めた。

戦いは一瞬で決まる。

シアが、さっき俺に襲い掛かったのと同様の狼の食いつこうとする突進を、ひらりと身を捻ってかわす。避けられた事をすぐに察知した狼が、今度は黒光りする鋭い爪が生え揃った前足でシアの体を裂こうとするが、それもまたシアは軽く飛んで避ける。どころかその襲い掛かる前足を足場に再び飛んで狼の上を飛び越える。

俺はもう狼との距離は僅かで、ここで狼が振り返れば目の前に顔が来るであろう距離まで詰めている。

そして狼を飛び越えて狼の背中側、つまり俺の隣に着地し、狼が振り返る動作を見せてから振り返るまでの間に唱える。

「ファイアチャージ
火炎装填」

炎が灯る。もちろんシアの短剣ではなく、俺の逆手に持った片手剣が。

狼が振り返る。その速さからどの辺りにどのタイミングで来るか予測し、剣を構える。

そして炎が貫いた。狼が振り返き際に俺のことを認識し、そのまま食い付こうと開けたその大口に。

硬い体に覆われた生き物は、得てして体の体内は脆く、その一撃で凶悪な狼は葬り去った。

体の内から焼かれ、炎に包まれた後、手下の狼とは違い灰のような粒子とならずにその体を残していたが、どうやら動かないようだ。力が抜けてその場に座り込む。元から街での探索でへとへとだった事を思い出し、鞭打って動かしていた体は強制的に休む事を決めたようだ。

シアも同様に、座り込んで空に向け息を吐いていた。そして俺の視線に気がつく笑顔でやったね、と返して来る。

俺の初戦闘にして、シアとの初の共闘。それは少し危なかったが、

なんとか二人で力を合わせて勝つ事ができたのだった。

戦闘の後、RPGでは経験値がいくらだとかの表示があるのはお馴染みだが、このデュアルワールドでは表示は一切無かった。

俺はなんと無しにメニューを開くと俺のレベルから一から二になつていた。

それに伴いAPも二ポイント入り、片手剣スキルの一番簡単な技だと思われる『スラッシュ』も習得したようだ。その証拠に今まで灰色だったのが白い文字で書かれていた。

とりあえず俺のステータスはそれぐらいで後回しにし、気になったシアのステータスを開く。

今までは魔法の欄は灰色の文字で書かれていて叩いても何も起こらなかった。

だが今シアのステータス画面を開いて見ると、魔法の欄が白くなつていて叩くとシアが覚えている魔法、火炎装填がしっかりと表示されていた。

疑問なのがなぜそれが最初見た時に無かったのか。街中の探索をしていただけなので戦闘はもちろんそんな魔法を覚えるイベントも無かったはずだ。

だとすれば最初から覚えていたという事になるが、それだと表示されなかった意味が分からない。

考えつくのは戦闘中に思いついた、ぐらいだが、まるで勝手知つたるかの如く使っていたシアを思い出し、その可能性を捨てる。

次に思いついたのは、あまり期待できないが、俺が知らなかったからという線だ。

つまりあのステータス画面は全てを表示するシステム的な物ではなく、俺の記憶から作られるプロフィール帳なんじゃないかという可能性だ。

もちろん俺自身のステータスは数字まで事細かに書かれていてシステムのなのは間違いないが、仲間に関しては違う仕様と考えるとどうにか説明が付けれる。

それを証明するためにも俺はシアに話しかける。

「あれ、凄かったな。知らなかったよ、シアが魔法を使えるなんて」「ごめんなさい、言っただけで済んだね……」

「いや、いいよ。そのおかげで勝てたんだし。他にも使える魔法とがあるの?」

「ええ、初歩的な回復魔法ですが……。あ、ニケさん左手、大丈夫ですか?」

「うん。動かないけどとりあえずは……」

「ちよつと待っててください」

そう言っただけでシアは重そうな体を起し、俺の近くまで来てまた座る。左手を持ち上げられてシアの右手がその上に翳される。

横目に開いたままのシアの魔法の欄を見るが、まだ火炎装填のみだ。

シアが呪文を唱える。

ヒールドロップ

「癒水」

シアの翳された右手から水滴が一滴垂れて俺の左手にぶつかったかと思うと、水滴が触れた所から淡い青色の光が左手を包んで輝く。再び横目で見た魔法の欄にはしっかりと癒水と刻まれていた。

可能性の低かった推測は見事的に射ていたという訳だ。

謎も解け、シアの回復魔法のおかげで左手の感覚も戻ったおれは改めてシアにお礼を言う。

「ありがとうな。こんな回復までしてもらっちゃって」

「気にしないでください。私達はもう仲間なんですから……」

「そう、だな。ごめんな」

「いえいえ」

なんか仲睦まじいやり取りを繰り広げる。気が付けば開かれたままのメニューの端っこにあるデジタル時計が、そろそろ五時ぐらいを示そうとしていた。

今日はバイトも休みにしたので一日中やるつもりだったが、晩飯の準備なんかもあるのでここで一旦落ちないといけない。幸いまだ時間があるので今度は中断ではなくセーブしてやめよう、とか考えていたが、その前に目の前に転がったままのあのリーダー格の狼が気になって仕方なかったのでシアに尋ねて見る。

「あれって何で手下の狼みたく消えないの？」

死体に指差し、シアに聞くと、少し見開いて、それから落ち着くように息を吐き、それから普段と変わらぬ顔に戻って、説明をしてくれた。

「あれは魔物の死体クリーチャーコープスって言って、あれから素材を剥ぎ取って売るとお金になるんです。冒険者の代表的なお金を稼ぐ手段ですね。えっと、外街にあつたお店覚えてますか？」

「ああ、なんか無駄にでつかいところだったかな。名前は……クリーチャーズコレクト」

「そうです。あそこに死体ごと持っていくと、解体などをやってくれるんです。武器とかに素材を使いたい場合は解体だけしてもらって素材を受け取る事もできます」

「へえー、じゃああれも持ってた方がいいんだよね」

「そうですね。損にはならないですから、出来る事なら持ち帰った方がいいです」

そう言われておれは重い腰を上げた。急に起き上がって襲い掛かってくるんじゃないかと内心ビクビクしながらその死体に近づく。

そして四次元ポーチこと、最初から腰についていたポーチへ入れようと試みると、案外素直に入ってくれた。

アイテム欄を確認するとそこには『ウルフリーダーの死体』と書かれていて、確かにアイテムとして収まっている事を確認した。

そして振り返るとどこかで聞き覚えのある声が耳に届いた。

もう一度、振り向くとそこには見覚えのある紫色の体表の狼たちを従えて、今倒したばかりのウルフリーダーがこちらを睨んでいた。俺とシアは戦う事を選ばずに、一目散に逃げ出した。

逃亡戦

街を見下ろす事の出来る丘から、新たに出現したウルフリーダーから逃げるために全力疾走をしていた。

街を数時間歩き、疲れ果てて休憩している所に四体の狼を連れた一体のウルフリーダーが現れた。シアと協力し何とかこれを倒して一息つき、戦闘の余韻に浸っていた。ここまでは良かったのだが……。

「……ハア……で、どう、する……！」

丘から街に入るまでは相当な距離がある。その道中は折り畳まれたような通路が延々と続き、百八十度曲がるカーブで追ってくる狼達を牽制して何とか距離を稼いでいるが、やはり総合的に見ると直線の方が距離は長いので、直線的なスピードではまず敵わない狼達に距離を詰められてしまう。

「……まずは、手下の方を、叩きましょう。……奴等なら、ファイアチャ火炎装填イッを掛けたニケさんの、一撃で……倒せます」

「……それは、つまりあと、一回しか掛けられない……って事、かな？」

二人で、では無く俺に言うことはつまりそういう事になってしまふ。それが悪いとも言う気は無いし、仕方ない事は分かっている。MPには限界があるのだから。

息も切れ、足も縛れそうになるが、それでも必死に走りながら作戦を練る。

死ぬ、という事に関してゲームだから怖くないと言うのは無かった。

それはVRゲームという現実に近い環境だから本能的に怖いというのもあるし、ゲーム的に考えれば、死んだ時のデメリットが未だにはつきりしていない分、何が起こるかわから無いから怖いのもある。

……後は心情的な問題もあった。俺がシアがやられる様を見たくはない。

「……そうです。多分、あと一回が……限界です」
「そうか……」

このままジリ貧の逃亡劇をいつまでもやっていたって追い詰められるだけだ。

ならいつそ抵抗した方がまだ生き残る可能性は高い。

「シア、次でッ……」

剣を振る。曲がり角から頭を出した狼を叩き、吹き飛ばされた狼がさらに別の狼とぶつかり、全体の動きを阻害する。でも今回は狼を叩き、前へ振り返った所で吹き飛ばされた狼とは別の狼が曲がり角を曲がって走ってくるのが見えた。

完全に体が前へ走ろうと向いてしまっているのに、狼の足の速さからして、今から再度振り向いても剣が間に合うかは分からない。でも何もせずに後ろから後頭部でも齧られるのは流石に嫌だったのだ、迎撃しようと体を再び傾けた時、不意に何かの影が通った。

「りよう、かい……です！」

滑り込んできた影はシアだった。ご丁寧に俺への返事まで添えて。シアはどうやらスピード型のようで。足の速さもシアの方が早い。だから俺が後方を勤めていたのだが、俺が止め切れなかった狼をシ

アが斬り飛ばし時間稼いでる間に、俺と並走するシアが付加魔法を唱え、その瞬間俺の剣は炎に包まれる。さっきの戦闘から推測するに効果時間は一分ぐらいか。

それまでに決めなければ博打のような逃亡劇をするしかない。腹を決め曲がり角に滑り込む。

右手に持つ剣を左肩まで絞り、体も捻って待機する。数秒もしないうちに懲りずに追ってきた狼の鼻先が見えた。そこで最大限の力で剣を半円を描いて切り込む。

並走していた二匹をまずは焼き払い、勢いのまま壁に衝突した衝撃を押さえ込み、次に備える。

馬鹿見たく学習能力の無い狼は再び並走してくる。それをさっきと同じく迎撃し、今度は残った親玉ことウルフリーダーを討つために、曲がり角から一気に飛び出す。

十メートルほどの通路の丁度真ん中辺りに標的の姿があった。

黒味がかった紫色の体表、頭の上のこげ茶のたてがみは間違いなくウルフリーダーの姿だ。

だけどさっきとはつきりと違う箇所があった。

先程倒したウルフリーダーの目を、シアが目潰した事で注目したのもあってちゃんと覚えていた。しかし、今この対峙しているウルフリーダーには俺が知っているウルフリーダーには無い、目に古傷のような物があった。

それは、丁度シアが潰した場所と同じ右目に、×印で確かに刻まれていた。

それに一瞬気を取られるが、今は一刻も争う事態なので些細な事だと思いを捨て、同時に足に力を込めてウルフリーダーへ一直線に向かう。

ウルフリーダーも俺を認識すると猛然と突っ込んできながら、その大口を開ける。

それに合わせてこちららも炎の剣を合わせ、その口へ吸い込まれるように突いた。

それでさつきと同じ様に倒せる、はずだった。

俺の体が思い切り引つ張られ、そちらにつられてしまう。もちろんピツタリと合わせていた剣の照準もズレて、ウルフリーダーの口を狙っていた剣は、右前足の辺りに吸い込まれる。

ウルフリーダーを倒すのを妨害したのは一人の少女。

言うまでもなくシアだったのだが、それを何故か、と聞く前に俺の剣がウルフリーダーの黒ずんだ紫色の、付加魔法を掛けた剣でさえ弾き返してしまうその体表に、深々と傷を付けて、そこから炎が伝い、ウルフリーダーの体が燃え盛る。

起きた事実と自分の頭の中での想像が相反し、体が固まり、声が出てしまう。

「なん、で……」

ウルフリーダーは炎に包まれながら断末魔を上げて、死体へと変わった。

本来ならそれを手放して喜んで、辛くも勝利する事で得る事の出来た二つ目のウルフリーダーの死体を四次元ポーチに放り込むところなのだが、今は力なく立ち尽くし、炎の消えた剣を収める事すら忘れて、呆然と死体を見ているしかなかった。

「危なかつ、たー……」

隣では流石に疲れきった顔を隠せないシアが俯きながら立っていて、膝に手をつけてその体力を少しでも回復させようとしていた。

「シア、なんだ今の……」

普通なら弾かれる所が、まるで弱点のようになりそこに攻撃が当たっただけで倒すことが出来た。

それを意図的に行ったのは間違いなくシアだ。だから何故あのウルフリーダーを倒すことが出来たのか、知っているのもまたシアなのだ。

とうとう力尽きてシアはその場座り込んでしまった。MPももう無いと言っていたし、相当疲れているのだろう。でも俺との会話はする気らしく、疲れきった顔に笑顔を貼り付けてさつき俺が呟いた事、俺が今思っている疑問に答えてくれる。

「あれは……ウルフリーダーなんですけど、特殊なんです」

「……特殊？」

「はい……。目の所に傷がありましたよね？」

「ああ」

俺が一瞬気を止め、些細な事だと気にしなかったあの傷が何かの証なのだろうか。

「あれが通常とは違う種である事を表していて、その固体は姿形は似ているんですけど性質が大きく異なるんです。普通のウルフリーダーが体表が硬く、内部が弱点なのに対して、あの変異種、冒険者の人達の間ではデュアル種、もしくはD型と呼ばれている固体は、内部ではなく外部が弱点なんです。だから二ヶさんの剣が体表を斬って勝つ事ができたんです。……二ヶさんが飛び出してから気付いたので少し遅くなってしまうんですが……」

「そう、だったのか……まあ、結果オーライって事で、シアが気にする事じゃないよ」

通常種に加えて亜種のようなものまで居て、しかも対処方法があれだけ違うとなると今後も戦闘に際して苦労しそうだ。……でも、それでこそ楽しみがある。

シアには助けてばかりで知識も教えてもらってばかりで、なんか

悪い気がして謝罪と御礼をしたが、あの時の恩に比べれば、なんて言われてしまつて丸め込まれてしまう。

忘れずにD型ウルフリーダーの死体を四次元ポーチに投げ込み、少し休憩して歩けるだけの体力を回復させ、今度はゆっくりと蛇腹の通路を二人で降りていく。

休むために

ようやく街に着いた。

街の唯一の出入り口である門を南、城を北だとすると、北西の位置にある街を見下ろすことが出来るぐらいの丘とその通路で、二度の死闘を繰り広げ、ようやく帰ってきた。

街の喧騒がどこか懐かしく感じ、身に染み渡るものを感じた。だが街はもう日が落ちる事もあって昼間よりは人が少なく、あちこちにあった露天はもう店仕舞いの用意をしている。

メニューを開くと現実時間がもう五時過ぎを示していて、俺もそろそろデュアルワールドをやめて晩飯の準備に取り掛からないと本格的にまずい事になる。

本当は街の探索が終わってから、すぐにもセーブしてやめる予定だったが、予期せぬ戦闘を二度挟み、かなり体も疲弊してしまっただために、元から予想していた時刻よりもだいぶズレた時刻にこの街に帰ってくる羽目になった。

もちろんそれなりの収穫はあった。レベルは二度目の戦闘でD型ウルフリーダーとその手下を倒した事で二から三に、アビリティポイントAPも使う間も無く四も溜まっている。

残念ながら今回はスキルを覚えなかったが、流石にレベルが上がる度に覚えるつてのは無くて当たり前と言うか、珍しいというか。だから特に気にしなかった。……そういえば俺二度目の戦闘で折角覚えたのに『スラッシュ』使わなかったな。まあ、あの時は口の中を狙って突いていたから、覚えていても使おうとは思わなかっただろうが。

街に着いた俺はまずセーブできる所を探す。晩飯の後も再びやる気ではいたが、もしこのまま不慮の事故で電源が切れてしまつては今までの時間がそのまま無駄になってしまふ。

そしてセーブで思いつくのは、教会か宿屋。でも街を探索した時

に教会にそういった機能が無いのは確認済みなので、宿屋にまずは足を運ぶ。内街インタウンか外街アウトタウンかはまだ決めてないが正直セーブ出来るならばどっちでもいいというのが本音だったりする。

「シア、この辺で一番近い宿屋つてのはどこだろう？」

「この辺なら、……コクカテイ黒香亭ですけど……内街の中でも結構高級な部類に入りますよ？」

正直、高級だとか低俗だとかそんな事は気にしてなかった。質ではなく早く休みたい、早くゲームを終わらせたい。そんな気持ちがいま一番心の領域を占める思いだった。

だから別に高かるうがなんだろうが近くあるのならばそれでいい、と言おうとした所で自分が重大な見落としをしている事に気がついた。

「あ、無理だ……」

「あ、気がつきましたか？」

「わかってたの？」

「えっと、……はい」

疲れなど忘れて悶えた。確かに街の探索中にシアに「今は文無しだから次に来よう」とは言っていたが、肝心な言った本人が忘れていて、言われたほうがしっかり覚えている。しかもそれを指摘された日には穴があつたら入りたい気分にもなるが、生憎穴らしいものは無いので悶々とした感情の行き場を失い、結果、路上で悶えるしかなかった。

一通り悶え終えた後、俺は実に簡潔な解決策をシアに提示する。

「換金しに行こう」

「……はい」

笑顔で返してくれるシアだったが、やはり疲れが見えるので早く休ませてやりたいという気持ちが芽生える。……もちろん俺も休みたいのだが。

そんな訳で近くにある黒香亭には悪いが、今は外街にあるクリーチャーズコレクト、CCへ重たい足を引きずりながらも出来る限りの速さで向かうのだった。

重たい足で十分も歩くと外街の名物、というかフィルストを象徴するような対魔物用の門が見える。そこからさらに五分くらいの道程を歩き、やがて門に劣らない大きさの建物へとたどり着く。

看板にはCCと書かれていて、きっちりしているとはいえない外装で、所々塗装が剥げたりしていたりもする。

そんな少し小汚いCCの建物に俺とシアは足を踏み入れる。黒の両開き扉は見た目に反して押すと簡単に開いて、もしかしたらこのドアも壊れかけなんじゃ……と思わせる。

ドアをくぐるとまずは結構な人数が一度には入れそうなロビー、左手には壁に沿って階段があり二階にも行けるようだ。今は用が無いので行こうとは思わないが。

ドアをくぐりそのまま真っ直ぐに進むとカウンターがある。部屋の三分の一は占めているカウンターでは何人かが窓口に立ち、その後ろではなにやら慌しく働いてる人達の姿も見える。

後ろを歩いていたシアにどこで換金するのか聞くと、小さくカウンターで言えば大丈夫、と答えるのでそのまま進み、一番近い所に居る受付の人に話しかける。

お姉さん系のすらっとした人がこういう受付を担当しているのが大体のゲームでの有様だが、見事に正反対の三十台後半と見られる顔と筋骨隆々でごつく、その黒く焼けた肌は間違いなく外で働く人間の証拠で、こんな所で事務的な受付を普段からしてるとはとてんじゃないが思えなかった。

しかし対応は実にスムーズで、多少馴れ馴れしい所もあったが、

気さくなおっさんだと思えばなんて事はなかった。

「すみません、クリーチャーコープスを換金したいんですけど」

「ん？ お前さん、新人か？」

「……はい、そうですけど」

「そうかそうか。いや別にお前さんに文句があるとかじゃないんだ。ただこの義務として、最初に訪れた冒険者つてのには説明しなきゃならん事が山ほどあつてなあ……って、後ろの人は……シアか？」

前半部分の説明を真面目に聞いてただけに、突然飛び出したシアの名前に呆気に取られる。

なんでここで急にシアの名前が出るのかは分からないが、この受付のおっさんがシアの名前を口に出した事から少なくとも知り合いである事は分かる。

当の本人のシアは俺の後ろに隠れていたが、少し経っても会話が進まずに、自分に視線が注がれているのに気付いたようで観念してその体を俺の後ろから出す。

「どーも……ガランさん。お久しぶり、です……」

「おお、やっぱりシアか。どこほつつき歩いてるかと思えば、男でも捕まえてたのか、成る程成る程」

「違います！」

俺の後ろに隠れてた割には元気よく挨拶をしていたが、ガランというこの受付のおっさんの年齢特有の冗談に、まともに返事をしてる辺りシアの性格も出ている。

「お二人は知り合いなんですか？」

「ん……？ ああ、つい……一ヶ月前だったか。それまでうちで働いてたんだが、書き置きと共に姿を消しちまってなあ。てっきり他所

にでも行っただかと思えば……」

シアの言っていた働く場所とはこのことだったのか、と思い返し、そこから出て行った経緯は、おそらくあの騒動の発端となった、子供達の事を知ったからだろう。

シアの性格を鑑みるに迷惑を掛けると思ったから何も言わずにここを出て行き、その後はまさに体当たりの行動をしていた訳だ。

俺の後ろに立っていたシアは一步踏み出し、改めて俺の隣に立った。

そしてその頭を俺にしたように、深々と下げるのだった。

「ごめんなさい！私の身勝手で……」

「……なあに、気にする事はねえさ。確かにあれだけ働いてた優秀なシアが突然居なくなつて慌てたが、それぐらいで致命傷になるほど俺らはシアに負担掛けてた訳じゃないと思つてる。それにシアが自分の意思で出て行つたんだ、それを引き止める訳にも行かないだろう」

「……ガランさん」

二人の意味深な会話についてシアの過去の事とかを聞いて見たい衝動に駆られたが、あまり無理に聞くのも悪いし、何より今は急がなきゃならない。

二人の間でなにやら気まずいやらほんわかしてるのかよくわからない空気が流れるが、俺はそれを遠慮なくぶつた切つて話を進める。

「それで……」

「おつとすまん。懐かしい奴にあつたとは言え、仕事は仕事だ。きつちり説明させてもらう。……んだが、シアから何も聞いてないのか？」

「いえ、ここにクリーチャーコープスを持ってくると解体やらなん

やらをやってくれる、というのは聞きましたが詳しい事は……」

「そうか……それじゃ、シア、お前から説明してやれ」

「え！わたし、ですか……？」

「これも黙って消えた罰って事だ。『マニュアルの天使』様なら大丈夫だろう、これで許してやるよ」

「その呼び方はやめてください！ もう……」

おっさんこと、ガランさんがその顔に笑顔を浮かべ、シアに此处、CCの説明を、これもまた冗談だろうが罰として強制する。……いやほんとに罰なのかもしれない。あのぐらいの年のおっさんがシアぐらいの年齢の子を、娘のように可愛がっていても何らおかしくないし、そうだとしたら今まで親のような気持ちですっと接してきたいつかは別れも……、とは考えていても、それが急に居なくなつたとすれば少なからずショックはあつただろう。だから、今こうして顔を見て、無事で居る事がわかって、ほっとした。だから、心配を掛けた事に対する罰。

とは言えこれ以上俺が無為に二人の過去を詮索するのは良くないだろう。シアもこれからCCの説明をしてくれるようだし、二人の間柄の詮索はやめ、シアに向き直る。

「えっと、……」ここクリーチャーズコレクトでは冒険者様による魔物の死体、クリーチャーコープスをお預かりし精査、後にその質量、レート等に応じまして金額を算出し、冒険者様に提示。納得いかれましたら受付でサインをしてもらい、冒険証の提示での本人確認を終えた後、その金額が支払われます。それ以外にも武器や防具などに魔物の素材が使いたい場合、その旨を伝えていただければその素材自体をお渡しする事もできます。もちろんその場合はお渡しする金額は減少しますし、素材全てをお求めする場合は手数料を払っていただきます”……です”

「流石、一ヶ月も仕事しなくても、一字一句間違えないでよく覚え

てるもんだ」

何だか事務的な説明だと思ったら、ガランさんの発言から本当に推測するに本当にマニユアルっぽいらしい。

だからマニユアルの天使、か……。確かに説明としては凄くしつかりしていて分かりやすかつたし、つかえる事も無くまるで当たり前のように長文をスラスラと読む様は、シアの可愛さも伴ってマニユアルの天使の名に相応しい仕事っぷりだ。シアのその様に驚きと賞賛を送りたい気持ちがあつたが、今はそれよりもさっきのシアの説明の中で必須らしい話をしておきながら、俺が初めて聞いた単語があつた。

だから説明してくれたシアにお礼を言い、気になった単語についてどちらとも無くぶつける。

「……冒険証って何ですか？」

俺の質問に二人共が一瞬目を丸め、その後取り繕つたように顔を戻し、俺の左手を二人揃って注視する。なんだろう、と俺もそこに視線を移すと左手首にあるのは金色か茶色がよく分からない色合いのリングで、色の無い宝石みたいに輝く物体がはめ込まれている。もしか、と思い手首にあるそれを顔の横まで持ち上げると二人の視線も一緒に移動し、半ばそれで確信は出来ていたが、最後の念のための確認に二人に聞く。

「……これ、ですか？」

二人ともが頷いた。何だか恥ずかしくて顔が真っ赤になりそうになるが、自分に仕方ない事、仕方ない事と言ひ聞かせてクールダウンさせる。ともあれ換金に必要なものは揃つてたし、さっきのシアの説明で分からないところも無い。これで換金に関する知識は全て

揃った。

さっきの恥ずかしさをまだ引きずっていたのを乾いた笑いで誤魔化し、俺は取り繕ったように改めてガランさんに換金をお願いする。

「よし、それじゃあここにコープスを出してくれ。最初から換金って事は素材類は持ち帰り無しって事でいいんだな？」

一瞬迷う。確か武器や防具にも使えると言ってたから、序盤で装備が心許ない今、魔物の素材で武器の一つでも作れれば……、と考えるが結局首を縦に振って全てを換金する事にする。

四次元ポーチへ手を突っ込み、ウルフリーダーの死体を思い浮かべながらポーチの中身を掴み、引きずるように取り出す。現実ならどうやって入ってたのかと驚く所だが、リアルに中々こだわってるデュアルワールドでもここらへんの仕様は従来のゲーム的なものと何ら変わらない。

完全にリアルを再現しようというわけではなく、元をただせばゲームに過ぎないのだから。

まず一体のウルフリーダーの死体を取り出し、カウンターの上へ乗つけて、俺が再びポーチに手を入れた事でまだあるのだろうと思ってくれたのか、ガランさんが自然な動作で最初に取り出したウルフリーダーの死体を少し横に退ける。

俺は再びウルフリーダーの死体を取り出し、カウンターの上にある最初に出したウルフリーダーの死体に半分ほど重なるように置いた。同じウルフリーダーの死体とは言え、二つ目に取り出したのはD型のウルフリーダーの死体で、普通のよりは多少値段が上がると思われる。

その証拠に俺がそれをカウンターに置き、死体の顔、右目の所に刻まれたD型の証である傷痕を見たガランさんの目が見開き、感心したようなため息を吐いたからだ。

「初心者のかせに、一体以上持ってきた上にそれがD型とは……こりゃこの先が楽しみだ」

「まあ、ほとんどはシアのおかげなんですけどね」

自嘲気味に笑うと隣に立つシアが何だか凄く慌てた様子で叫ぶ。

「そ、そんな事はないですっ！二ヶさんが居なかったら倒せなかったですし、わたし一人の力程度じゃ……」

「二ヶ、って言うのか……シアは強かったろう？」

「ええ、そりゃもう。俺よりよっぽど冒険者って肩書きが合うんじゃないかってぐらいに」

「ははは、ここにいる時に護身術代わりに最低限の戦い方ってのを叩き込んだからな。駆け出しよりは強くて当たり前だな」

必死に講義するシアを余所に、俺とガランさんとそんな会話を交わす。

通りであんなに強いわけだ。俺と会話をしながらも慣れた手つきで後ろに居たこの従業員らしき人に、俺が取り出した二体のウルフリーダーを持って行かせる。多分、これから精査が行われるのだろう。

とか思っていると放っておかれたシアが泣き出しそうな顔をしていたので、その頭に手を乗つけてそつと撫でてやる。シアは恥かしそうに俯いたが、心地いいのか振り解くような事はせずに黙っていた。

「……まるで兄妹だな」

「あ、やっぱりそう思います？俺もそんな気がしてたんですよ」

そんな事を言い、シアの頭を小気味よくポンポンと叩く。

シアは相変わらず俯いていたが、今のでさらに顔を真っ赤にしている気がしないでもない。だからと言ってやめる気は毛頭無かった

が。

するとガランさんが大きく笑い、俺に言う。

「シアを頼むな。この先も……」

「むしろ俺が世話になるかも知れないですけど、ね」

俺も同じくらい大きく笑い返してやる。言葉に隠した意味をガランさんはしっかりと受け取ってくれたみたいで右手の拳を突き出してくる。

俺もそれに答え右手の拳を差し出し、ガランさんの拳にしっかりとぶつける。大きさは明らかに釣り合っていなかったが、そんなのは関係なかった。

そして少しの間そうしてると突然ガランさんが後ろを振り向く。

そこに居たのはさっきウルフリーダーの死体を持っていた同じ人で、その手には死体ではなく何枚かの紙の束を持っていて、それをガランさんに手渡すとそそくさと奥へ消えていった。

どうやら精査、と言うものが終わったらしい。あの紙には換金に関わる情報が書かれているに違いなかった。

無言で真剣な目つきを紙に向け、静かに捲っていく。

「ふん……まあ妥当な所か。ほら、これが換金する際の精査要素が書かれた紙だ。後学のために見ておくといい」

そう言っって紙の束を俺に渡してくる。それを受け取り一番上の紙の一番上から目を通していく。

そこには死体の損傷具合などの項目がずらっと並び、それぞれにプラスやマイナスが書き込まれている。わかりやすいのは、一体目のウルフリーダーの死体をシアが右目を潰したのでその分マイナスになっているところか。

しかしこうなるとなるべく無傷で敵を倒さないと、コープスを持

つてきてもたいした金は入らない事になる。それはただ力だけで圧倒するのも駄目って事で、これから金を手に入れたと思うたら多少でも作戦を考える必要がありそうだった。だが、いざとなればそんな事に構っている暇も無くなるのだが。今日のウルフリーダー戦でも、正直ギリギリ過ぎる戦いだっただ。

紙に一通り目を通し、ガランさんに返す。

そのついでに紙の最後の方に書かれた単語の意味を尋ねる。

「ありがとうございます。あと、レートって何ですか？」

「レートってのはクリーチャー単体の相場価格って言えばわかるか？　ウルフリーダーのレートは今日は約千、D型は三千だ」

「なるほど……」

相場って事は市場があるって事だが、OPで見た他の街々と連携して形成でもしてるのだろうか。詳しい事は分からないが、ようは日によってクリーチャー単体の価格が変動するって事でレートはその価格の事を指してるのだと、噛み砕いて理解しておく。

「合わせて四千二百クロムだな。詳細は見せた通り。これで大丈夫か」
「大丈夫です。お願いします」

ガランさんは一瞬仕事の顔になり、再びさっきまで気さくなおっさんの顔に戻る。

ガランさんに促されて左手首の冒險証を差し出す。確かに、言っただけでガランさんはカウンターの下からお金を取り出し、差し出したままの俺の左手にお金を握らせる。

現実の日本の通貨と似たような感じで四枚のお札と二枚の硬貨。もちろんデザインは違っし、百円玉の変わりは金色の硬貨だ。

それをどこに入れようか迷ったが、財布らしい装備は無いのでとりあえず四次元ポーチへ放り込む。

「これで換金までの一通りだ。大丈夫か？」

「はい、ありがとうございます。今後世話になると思いますがよろしく願います」

「こつちこそ、大物頼むぜ」

ガランさんの大きくこつい手と硬く握手をして、CCを出す。

後ろでシアが再びガランさんに改めての謝罪と別れの言葉を告げていたが、俺が関わる場所ではないのでそのままドアを開けて外で待つ。

シアが外へ出てくる僅かな間にメニューを開く。所持金の欄には先程受け取った四千二百Cがしっかりと刻まれていて、あれで良かったのかと思わせる。それとは違う画面の端に現在時刻が表示されていて、もう六時近い。まずいなあ、とは思うがもうすぐでセーブが出来るので、中断は選ばずにそのままいる事に決めた。こういう時にあとちょっと、あとちょっとって思ってしまうのはやはりゲームに毒されているからなのか。

開いていたメニューを閉じると、丁度シアが扉を開き出てくる。元から目的は分かっていたので、シアは俺が何も言わなくても的確な言葉を掛けてくれる。

「ここから一番近い宿は、『^{ナクツバキ}哭椿』ってところですね」
「よし、じゃあ行くか」

シアが俺の一步前を歩いて道案内をしてくれる。俺は情け無いながらもそれについて行き、五分もするとその哭椿という宿にたどり着いた。

石造りでしっかりと手入れも行き届いてるようで、少なくともCよりは外見が綺麗だった。

哭椿と書かれた看板がドアの近くに垂れ下がっていて、なんだか

いい雰囲気醸しだしていた。

扉を開け、シアと共にくぐると待ち受けていたのはガリガリな、下手するとシアよりも細いんじゃないかと思わされる青年だった。年の頃は俺と同じくらいだろうか。

「ようこそ、哭椿へ。本日はどのようなご用件で？」

「えっと、休みたいんですが……」

「一部屋、二部屋、どっちですか？」

一瞬戸惑った。NPCとはいえ現実そのもの見たいなものなのに、女の子と一つの部屋で寝るのは。俺は……まあいいんだが、問題なのはシアの方だ。今日初めて会った男と同じ部屋で寝るのは流石に抵抗があるだろう。だから俺は多少の出費は覚悟して二部屋を示す、二本指を立てた右手を上げた。元はといえばシアの存在がなければこのお金も無かったような物なのだから、シアのために使った所になにもおかしい所はないのだし。

だが俺の上げようとした右手をシアの手が押さえ、代わりに少し大きめな声で一部屋、と宿屋の店主らしき青年に宣言するのだった。俺がそれに驚き、何か言おうと言葉を頭の中で考えてる間に、青年が薄く笑い話を進めてしまう。

「かしこまりました、一部屋ですね。それでは宿帳を付けさせて頂きますのでお名前をよろしいですか？」

「あ……ああ、えっと、二ヶ、で」

「二ヶ様、以下一名様、本日はご利用頂き有難うございます。こちらがお部屋の鍵となります。お部屋の位置はあちらの案内板に書かれておりますので、鍵の部屋番号と照らし合わせてお向かいください」

青年は流暢にそう言って鍵を手渡してくると、二回へ続くと思わ

れる階段の近くにある案内板を指差す。そしてごゆっくりどうぞ、
と言うと顔に笑顔を貼り付けてその場で佇むばかりだった。

なんだか抗議を唱える間も無く押し切られてしまったが、やっぱり不安なのでシアにいいのか？ と小さく聞くが、先に部屋に行きましようとなんだか怪しい笑顔で言うばかりで、取り合ってくれなかったので仕方なく階段を近くの案内板に目を通し、鍵番号の二番の部屋を探す。案内板によると二階に上がって通路の一番奥の通り側、つまりはこの宿の入り口側の部屋に二番と割り振られていた。

階段を上り、奥の部屋、二番の部屋へたどり着く。鍵穴に鍵を通し回す。ガチャリと鍵の開いた音がしてから鍵を抜いて、ドアノブを回す。割り振られた部屋はしっかりと清掃も行き届いていて、シアに言われたような汗臭い冒険者達がとりあえず泊まるには少しもつたないくらいだった。そして、案の定ベッドは一つ、何とか二人は寝れそうだがおそらくはぴったりくっつかないとどちらともなく落ちるだろう。柵も無い白いシーツの様な物が何枚か掛けられただけの布団は明らかに二人では狭すぎる。

これ、どうするんだろう、とか思いながらも、さっき店主が宿帳を付けてくれた事を思い出し、セーブがおそらく完了している事にほっ、として、次に繰り広げられる展開に目を背けながらもメニューの中断を叩くのだった。

宿屋、哭椿

失った感覚が体に戻ってくる。疲れきっていた体は現実の体に戻った瞬間に嘘のように無くなっていた。だから、重たかった仮想の体に慣れていた感覚のせいで、現実の体が嘘見たく軽く感じられて、なんだか気分が良かった。

VRGを頭から外し、ベッドの上に無造作に放っておく。

頭の中でこれからあの状況をどう打開しようか考えるが、空腹感からかうまく思考がまとまらない。

部屋に置かれた時計を見ると、もうほとんど六時としか言えない六時前を指していた。

ベッドから妙に軽くなった体を起し、部屋のドアへ向かい、デュアルワールドでの出来事は一旦置いておき、とりあえずは今日の夕飯の献立を考えるのだった。

晩飯も食べ終えて再び自分の部屋に戻ってくる。VRGを被ってVRボタンを押そうとした所で画面端の電池残量を確認、昼前から続けてやってた事もあり充電が半分を切っていたので、箱から充電器を取り出しセットする。

充電されている事を画面上で確認し、今度こそVRボタンをしつかりと押す。

落ちる感覚と共に意識が途絶え、デュアルワールドで目を覚ます。状況は確か、死闘二回潜り抜け、その疲れを癒すためにも宿屋に泊まるうとしたが、文無しだったために魔物の死体をCCで換金し、クローチャー・クリサス・スライムコレクションこの世界の通貨であるCを入手。ナクツバキそれを使って近場の宿屋『哭椿』で部屋を二人いるのに何故か一部屋だけを借り、そこに足を踏み入れた所で途切れている。

復帰した俺を襲ったのは、まず全身の疲れと主に足を中心に感じる重たい感じだった。

そういえばこっち、デュアルワールドではこんな状態だった。だ

からこそなんとか宿に泊まろうとしていた事を思い出す。

本当に一室といった感じの部屋の窓側にはシアが立っていた。両開きの窓を開け放っていて少しの風が部屋の中へ流れ込む。窓辺に立ち、外の通りを歩いてる人達を眺めているようだった。

シアの隣まで歩いていき、シアが見ていたものを見ようと同じ様に窓辺に立ち外へ目を向ける。

それに気付いたシアが一瞬こっちを見るが、何も言わずにまた窓の外へ向き直る。

風が頬を撫でる中なんとなく呟く。

「……なに、見てたんだ？」

シアの表情は何も変わらない。ただ何かの感情に浸ったような遠い目で、通りを少し慌てた様子で歩いている冒険者達の流れを眺めている。

「……私も、あの人達と同じ舞台に、立てたのかなあ、なんて思いました」

「冒険者に憧れてたのか？」

「……はい。ＣＣで働いてる時に色んな冒険者の人達と関わって、色んな話を聞いて、外に憧れていました」

でも、とシアは続ける。憧れながらも冒険者としての道を選ばなかったのは、冒険者となればＣＣにいつまでも居るわけにはいかなから、それはＣＣの皆を裏切る事になるんじゃないかと。折角拾ってくれて、仕事までくれたのに、それはあんまりじゃないかと。そんな想いを話してくれた。

「でも結局、感情的に行動してしまったんですけどね……」

自分を嘲笑うように、そんな言葉を吐いてシアは笑った。儚く消えそうな、今にも泣きそうな、そんな顔をするシアの頭に手を載せ、これでもかというくらいくしゃくしゃにしてやる。

抵抗する気配もなくシアはただそれを受け止めていた。

「終わった事は気にするな。ガランさんも気にしちゃいないさ。シアに比べたら付き合いなんて無いようなものだけど、そんな事をいつまでも気にするような人じゃないってのは分かる。むしろいつまでもシアの方が気にしたら、ガランさんも素直にシアが帰ってきた事を喜べないだろう?」

「……そう、ですかね」

そうだ、と返事する代わりに再び頭をくしゃくしゃにしてやる。

今度はしっかりと抵抗の意思を示し、元気が出てきた事を窺わせる素振りをする。

シアの元気が出て来たところで、肝心で重要な一つの疑問をぶつける。

「シア、そういえば何で部屋を一部屋にしたんだ? 明らかに二人で寝るには狭いぞ」

「えっと、それは……その、まだ駆け出しですし、あの、……資金も出来る限り節約しないといけないかなー、と思ひまして……他に他意はないです、はい」

窓から差す夕日のせいかな顔は赤く、俯いてるせいで表情は見て取る事ができない。

そういえば今現在このデュアルワールドで夕日が出るような時間だという事は、ここの時間軸は現在時刻と連動しているという事になる。……などと余計な事を考えてお茶を濁して見るが、これは、あれか。……そうか。しかし一つ気がかりな点がある。だがそれも実

際にやってみればわかるだろう。

「そうか……ならいいんだが」

「今日は疲れましたし、私はお風呂に入ってきます、それでは！」

言うが早いかシアはすぐに部屋を飛び出してしまった。……しかし風呂もあるとは中々現実感溢れるゲームだと改めて感心せざる終えない。戦闘などの面が現実味を帯びているのは、より現実に近いけるため、緊張感をもたせるためだという事は分かるが、生活面で現実に似せる必要はあるのかといえば正直必要ない気もするが……。でも確かに本来のRPGではシナリオがあつてそれに沿うように進んでいくが、このデュアルワールドでは『砕かれた星の命の欠片』集める事だけが目標と定められ、それ以外は何も決められていない。つまり、その目標に至るまでの道程を自分で決めていくしかない訳だ。

だから全ての自由度を上げるためにも、生活面の充実も欠かせない要素なのかもしれない。

一人部屋に残った俺は特にする事もなく、重たい足を休ませるためにベッドに腰掛けた。

パタパタと動かす力もなく、座るだけのつもりが腰掛けた途端に全身の力がベッドまるで吸われたように抜け、そのまま横たわる。

体に力が入らない。それだけ体自体が疲弊していたのだろう、動かさうと言う気すら起きない。

ああ、そういえば俺も風呂に入れば少しは疲れも取れるだろうか。現実ではあの疲れた時に入る風呂には何とも言えない染み入る感覚があつて、結構気分的にも肉体的にも疲れが取れる。

もし、生活面も現実に近いものを再現しているのなら、もしかしたら、とも思わないでもない。

とはいえシアはこの宿に風呂がある事を知っていたようだが、俺は何も知らないのです。まずは店主のあの青年に聞かねばならないだろ

う。……なるべく荷物は部屋に置いておこうと思ったが、よく考えたら手荷物ぐらいしかないのでは何も気にする事はなかった事に気付く。便利だな、四次元ポーチ。

まだ体は重かったが目的が出来たので力を入れてベッドから起き上がる。

そのまま部屋を出て鍵を掛ける。シアも荷物らしいものは置いてなかったので仮に俺より先に来て入れなくとも大して困る事もないだろう。それでも一応シアには伝えておかないといけないが、……それはもし会えたらにしよう。わざわざ自分の身を滅ぼしかねないところに、自らの意思で赴く必要はない。

少しの通路を渡り、階段を下りると、相変わらず青年が店番をしていたので、近づいて風呂場を尋ねてみる。

「風呂場……ですか？　そうですね、うちは本当に寝泊りするだけなので備え付けの物はありませんが、近くにお湯屋があるんです。そちらでしたらお客様の要望にもお応え出来るかと思いますが……」

「お湯屋か……それってどこら辺にあるんでしょうか？」

「ここを出ますと左手側に『覚能乃湯』サノウノユというお湯屋があります。ここを出てから目で見れば暖簾が見えると思いますので、そちらに向かっていた頂ければ」

「わかりました、ありがとうございます。あ、鍵はどうすればいいですか」

「鍵は紛失対策にこちらで預かる決まりとなっております。お顔を覚えていただきますのでこちらにお顔を出していただければまたお渡します」

そういうシステムなのか、と半ば感心し、鍵を取り出して店主に渡す。

「それではいつてらっしゃいませ」

恭しく礼をする様と、完璧な対応は相当手馴れている感じがして、まだ見た目は若いのに相当しっかりしてるんだなあ、と思わせる。おそらく同年代であり、バイトで鍛えた多種多様な客の捌き方をマスターした俺でもあそこまでの対応は出来ないだろう。ましてや一切の彼自身の感情、嫌そうにしたりと言うのが全く感じられなくて、店主としては完璧だ。

俺もあそこまでは言わないが、もっと精進しないとならない、と何故かゲームのNPCに対して負けず嫌いな俺は闘志を燃やしつつ、^{ナクツバキ}哭椿から出て左手の、黒色にお馴染みの温泉マークが白く刻まれた暖簾を目標に歩き出した。

外はもう暗くなりかけていて、人も疎らになっている。それでもまだ俺のように出歩く人も居るが、大体は帰る途中の人達らしかった。

覚能乃湯 二ヶ

お湯屋『サノウノユ覚能乃湯』は、実に和風な、馴染みある近所の銭湯と似たような感じだった。

暖簾と言われた時点で何だかそんな気はしていたが、街の雰囲気
が日本とはかけ離れていたもので、なんだか凄いギャップを感じてしまふ。とはいえ覚能乃湯は、そんなものと一緒に疲れも吹き飛ばしてくれるくらい快適だった。現実にあるお湯の種類は揃えられている上にサウナまで完備してる辺りはゲーム会社のこだわりが見え隠れする。

ゲームの中だからいいか、とそのまま入ろうかとも思ったが、やはりNPCとはいえ周りの目が気になるのでしつかりと備え付けの洗面器具で体を洗い、室内に取り揃えられた選り取り戻りの風呂を片っ端から試していく。そしてその途中、一通り回って少し温めのところに入っただけのんびりしていると先客が話しかけてくる。こういったところでのコミュニケーションはそう珍しいものではないが、まさか話しかけられるとは思わなかったので驚いてしまう。

これもまたNPCだが、俺と同じぐらいの年の男だった。それでいて引き締まった筋肉にところどころに見え隠れする傷痕がそれなりの経験を持つ冒険者である事を示している。髪は短く、濡れているがほとんど変わらない長さだ。

「よ、あんたも冒険者かい？」

「そっちは中々経験豊富そうで」

「ははは、そう返されたのは初めてだ。それに見る目もある」

ガランさんほどではなかったが、豪快に笑う青年は俺の向かいで風呂に使っていた。

何だか年の近い感じがして、変な親近感が沸いていた。シアとも

違い、男で、文字通り裸の付き合いだと、多少近しく感じてしまっても不思議じゃないだろう。

「俺はレオン。あんたは？」

「二ヶ、まだまだ駆け出しの冒険者。というか今日なっただけ」

「お、駆け出しか。それじゃここはいつちよ先輩として色々教えてやら無いとな」

「お手柔らかに」

そんなやり取りをしたが、話し始める前にレオンが風呂から上がる。なんだろうと思っていると突いて来いと手で示すので疑問に思いながらも黙って付いていく。

レオンが向かったのは覚能乃湯、男湯の中から外へ出る扉。そう、露天風呂だった。

「こつちの方が気分がいいだろう？」

顔だけをこちらに向けてそんな事を言うレオンに、俺は全面的に同意せざる終えなかった。元より露天風呂は行く予定だったのだが、お楽しみは最後に取って置く派なので、今まで入らずにいたのだが、新たな話仲間が出来たのならこれ以上無いタイミングだろう。

レオンが誘ってくれなかったら俺から誘っていたかも知れない。

外へ足を踏み入れると、火照った体には寒いくらいの風が吹いており、早く湯に漬かりたい気持ちが大きくなる。

そこに広がる露天風呂はどうやら大きな楕円の形をしているようで、全体が石造りのそれを竹かなんかの大きな仕切りが真ん中あった。……いやいや、と突っ込まざる終えなかったがそこはそれ、年齢制限の壁があるから決して何らかのトラブルがあってもあれが倒れたりはしない。……はず。だが音声は聞こえるようで、なにやら姦しい声が時々聞こえる。

「な！」

力強く俺に同意を求めてきたが、俺自身は、さっきまでの俺の気持ち返してくれ、と叫びたかった。だが、何とか言葉を飲み込んで、湯に漬かる。俺は扉から近めの所に腰を下ろし、レオンもその隣に腰を下ろす。

「それで、何で冒険者やろうなんて思ったんだ、こんなろくでもない仕事……下手すりゃ死ぬかも知れない」

「……さあ俺にも分からないな」

事実だった。俺は現実からこのゲームの世界に遊びに来ているようなもので、この体も、この名前もすべては偽りの物で、死ぬかも知れないなんて言われたって、死んだらやり直せばいいとしか言えない、この世界に生きている人間じゃないから。

それをこっちの住人であるNPCに伝えたって何も変わらないし、何も理解はしてくれないだろう。だからそんな無意味な事はしないし、しようとも思えない。

前も確かこんな事を思った気もするが、彼らはこの世界に生きている。それを俺がわざわざ壊す必要は無い。俺一人がこの世界の駆け出しの冒険者を演じればそれで丸く収まり、俺はただゲームを楽しむ事が出来る。……こんな事を考えさせるのもこのVRゲームだから、リアル過ぎるから、だろうなあ。

「……そうか。まあ、ニケみたいな奴も結構いるからなあ。ニケに限らず、生きる意味だとか、やる事がないから、だとかそんな不確定な事を目標に冒険者になる奴も少なくない」

「そりゃまあ、物好きだな」

「ニケ、お前もそうだろうが」

レオンにそう言われたが適当に笑って誤魔化すと、それを察して話題を変えてくれる。

見た目と喋り方から熱血系な感じだとは思っていたが、どうやらこの人の良さから見ても筋金入りだろうな、とは予想がつく。

「それで、なんか魔物は倒したのか？」

「ウルフリーダーを二体」

「ほう、そいつは駆け出しにしちゃ出来だな。何人だ？」

「二人。それと片方はD型だった」

そう言った途端レオンが勢いよく噴出した。

何事かと思つて隣を見ると、むせ返っているレオンが苦しそうにしていた。ガロンさんにもなんだか将来を期待している的な事を言っていたが、やっぱり値段にも結構な違いがあつたように、強さもまた違うのだろうか。

ようやく落ち着きを取り戻したレオンが、俺になんだか聞いてはいけない事をこれから聞く、と言わんばかりの顔で迫り、顔に書かれたその通りに俺に質問を投げかけてくる。

「お前つ……！二人でD型なんて、もう一人が強いのか？」

「いや、もう一人は冒険者ですらない。しかも女の子」

レオンは今度こそ言葉を無くし、失礼だが変な顔でこっちを見たまま固まった。

レオンの頭の中はきつと真っ白になってるか、過去の記憶でも探ってるのだろう、どちらにしろ今の俺にこのレオンに掛けてやる言葉は何も無かった。

「大したもんだな。理由は無いとか言つてたが、なるべくしてなっ

たんじゃねえのか、それ？」

「そうだとこれからも安心できるな。先輩のお墨付きとあらば」

「へっ、安心してると足元すくわれるぞ。俺だってそこまで名があるって訳じゃねえから、俺と同じくらいまでは保証してやるがな」

「そりゃ心強い」

二人で大いに笑いあった。学校を卒業し就職するわけでもなく、バイトで自分の小遣いをちまちまと稼いでる俺にとって、人と触れ合うのは家族かバイト先の人達。後はたまに遊ぶ友達か。

だからこうして仮想世界のNPCだとしても、同じ年ぐらいの男とこんなに和気藹々に話すのはとても心地が良かった。

「連れが女だと色々と苦勞するだろう？ 買い物が無駄に長かったり、こまけえ事をいつまでもグチグチ言ったり、拳句人の事を道具みてえに扱いやがって……」

何だか淒く私怨が混じってるような気もするが、俺とシアは今日初めて会ったばかりで何もトラブルめいた事も無いし、困った事も無かった。とはいえ街の探索時は文無しで話を聞いて回るだけだったし、その後は戦闘をして宿に……。ああ、そういえば何故か部屋を一部屋にされたんだっけ。とはいえ間違っても起せないこの世界では杞憂だろうし、シアとも長い付き合いではないのでこれから色々問題が出てくる可能性はあるが、今はまだシアとの問題は全く無い。

「いや、俺の場合は今日初めて知り合ったばかりだからあんまりそういうのは……。レオンはその口調からして女性の連れがいるのか？」

レオンは心底嫌な顔を作り、それだけで全てを肯定した上に、あ

あ好きじゃないんだなあ、という感想まで抱かせる。なので俺はそれ以上追及せずに別の話題でも、と頭を探っていると、レオンがそんな俺の様子を見てだろうか、気にするなと声を掛ける。

「別に一緒に居たくねえ、て訳じゃないんだ。たまたまなんかこう、似たような境遇のお前さんにグチを言いたくなった、ていうか、うん、なんだ……その、すまん」

「いや、気にしないでいいよ。俺にはレオンのその苦しみは分からないけど、そのグチくらいは聞いてやれる」

「……二ヶ、お前良い奴だな」

「何をいまさら」

「前言撤回」

そんなやり取りをして二人で笑った。そろそろのぼせそうだったのでレオンに風呂から上がると伝えたと、じゃあ俺も、なんて言うて付いてくる。

「入っていたければまだ入っていればいいのに」

「風呂に入るのはいつでも出来る。だけど一期一会かもしれない出会いはその場限りだ。大事にしないといけないだろう?」

どうやら風呂から上がってもまだまだ逃がしてはくれなさそうだ。

覚能乃湯 シア

部屋を出て一切振り返らず走った。

ナクンバキ

クリーチャーズコレクション

ここ哭椿という宿はCの近くにあったから名前だけは知っていたが、実際に泊まる機会は一切なかった。でも近くのお湯屋、ウリユ覚能乃湯は近くにあったのでよく利用していた。

そこへ飛び込む。ここしばらくは利用してなかったが、外も中も変わったところはなくて記憶にあるままだった。

まだ顔が熱い気がして、それを塗りつぶすようにお湯を被る。肌を撫でたお湯ではこの体の熱が塗りつぶせなくて。体を洗ったらすぐに少し熱めのお風呂に浸かる。

疲れきった体を癒してくれる温もりが心地よかった。その暖かな熱は体を支配していた熱も溶かしてくれて、ようやく少し落ち着いた。

—— 思い出す。今日一日の出来事。

子供たちが失った未来を、私は”生みの親”から徴収し、払ってもらおうとしていた。

—— やり方がよくない。それはニケさんに言われた。本当の事だと、自分でも今になって見ればなんて馬鹿なことを、としか思えない。けどあの時の私はそれが正しいと思っていた。だから続けた。そしてその報いとして今日、あの場所で捕まり、囲まれた。逃げる隙もなくて、私はそこでようやく気付いたんだ……。このやり方は間違っていた、と。

だから私が犯した罪を罰で贖う事は何も怖くなかった。ただ真実だけは伝えないと、そう……。あの時思った。でも状況はそれを許さない。私が伝えるべき真実が表に出る事を、光を目指す事を許さなかった。

私には何も出来なかった。だけど――。

彼が、ニケさんが人垣を割って顔を出したあの瞬間は一生忘れな

いと思う。

皆が私を恨み、罵倒し、見下していた。なのにそこに突然現れた人は周りの人とは何もかもが違っていて、その目は温かさに満ちた目で、私を見て驚いたような顔をしていたのには私も驚いたなあ……。

そして、私がこの人なら……助けてくれるんじゃないだろうか、……そう思っ、思ってしまった、目を合わせた。思いを込めて。だから一歩踏み出して振り返った時には、自然と涙が流れてしまった。私を庇うように立ったあの背中はずごく……たくましかった。この人は、こんな私でも手を差し伸べてくれる。

そして、最後に手を本当に差し伸べてくれて、私はその手をとって、叫んだ。

それである騒動は終わった。私が間違った方法で解決しようとして、そしてその罰を受けるはずだったのに、それをしっかりと導いてくれた。

私が受けるべき罰は無いとみんなは言うけれど、それは間違っているんだと、私はそう思う。

盗んだお金の使い道は二つしかなかった。新たな居場所を作るか、子供たちが失った未来を少しでも買い戻すか。

ニケさんには孤児院を建て直すとか言っ、てないけど、その先に……それ以外にもまだ私が受ける罰は残ってる。そう思ってしまう。――だから……。

「そこのお嬢ちゃんは何をしみつたれた顔してるのかなあ？」
「えっ……」

目の前にはいつの間にか大人っぽい女の人が出て、何故だかわからないけど私に話しかけてきた。

その顔には覚えはなかったの、初対面なのは間違いなかったのだけれど、どうして私に話しかけてきたんだろうという疑問は残る。

「安心しな。別にとって食おうって訳じゃない。なんだか暗いオーラを放ちながら、お湯に浸かってる物憂げな少女がいたから、私の性分で頼っておけなくてね」

「はぁ……」

何だかよくわからないけどこのお姉さんみたいな女の方は私を心配……してくれたみたいで、悪い人ではない気がした。でも余りに突然の事でなんて反応をしたらいいのかわからない。

「なんか悩み事でもあるなら相談してごらん？」

「……いえ、もう何も悩んではないんです」

「もう？ って事は……」

「はい、私の悩み事はもう解決してるんです」

「……の割にはやけに暗い顔してたけど……」

その質問には答えられなかった。いや答えてしまえば、この思いを自分以外の人に教えてしまえば、それはもう、……私だけの罪でなくなる。

「少し……思い出してただけなんです。私ってなんで思い出すだけでも、悲しくなっちゃうみたいで……」

「……そっか」

お姉さんみたい見知らぬ女の方は、私の隣まで移動する。そして頭がぐいっと引っ張られる感覚がして、気付けばお姉さんに頭を抱えられ、肩に頭を預けていた。

「あの……」

「私はアイリ。悲しい時は誰かを頼るんだぞ。ここであつたのも何

かの縁、少し話でもしようじゃないか。えーと」

「シア、です」

暖かかった。それになんとか懐かしい。お湯の熱さとかじゃなくて、恥ずかしい時とも違って、……あ、そうだ、母さんが私を励ましてくれた時も同じ様に、俯く私をこうして抱きしめてくれた。それで、言葉を掛けてくれた。

「シア、ね。あ、そうだここじゃ何だし、外へ行こう」

「えっ、そ、外ですか？」

「そう、露天風呂。この街初めてだからね、存分に楽しまないと」

そう言っただけという間に外へ繋がる扉の方へ向かって行ってしまい、なにも言う間もなく、黙って帰るのも何だか悪い気がして、仕方なくアイリさんの後を追うしかなかった。

扉を開くとひやりとした風が体を撫でて、思わず引き返したなるが、もうお湯に浸かってこちらに手招きしているアイリさんを見ると、いまさら引き返す訳にもいかなかった。

アイリさんに招かれるまま湯に浸かり、夜空を見上げた。

吸い込まれそうな夜空に星が輝いていて、その広大さを考えたら私の悩みなんてちっぽけ物にすら思えた。

「今日はいい空だね。野宿しながら見る空より断然綺麗だ」

「アイリさん……冒険者なんですか？」

「ああ、一応ね。シアは、冒険者なのかい？」

「いえ……冒険者の人の手伝い、なのかなあ……」

「おいおい、なんだその自信なさげな答えは」

そういえば、ニケさんに連れて行ってくださいと言って、それを受けてもらえたけど、私の立場って具体的にどうなるんだろう。

付き人……ペア……あ。

一瞬、頭が沸騰しそうな事を考えてしまった、ような、気がしたけど気のせい、気のせい。

違う。ニケさんとはそういうのじゃなくて……ええーと、うーん。

「そんなに悩む事なのかい、それは？」

「はっ……えーと……はい」

「ふふふ……悩ましいねえ」

「……？　どういことですか」

「……いずれ気付くさ」

そう言っアイリさんは何かを含んだように笑うのだけれど、私には何の事かさっぱりわからず。でも私の事なのでなんだかはつきりなくて、すぐくもやもやが胸に残る。

「こんな気持ちのいい湯なら酒の一杯でも欲しくなるが、仕方ない。帰ってからレオンの奴と晩酌と行くか」

「……お連れさんがいるんですか？」

「ああ、中々男気溢れる奴だよ。ただ少し短気だがね」

そう言っ笑うアンリさんはなんだかとても幸せそうで、月明かりが霞むぐらいに眩しかった。

それがその連れの方をどれだけ大事に思っているのか、それを映す鏡のようで、すごくうらやましかった。

「あれ？」

体が何だかふらつく……。なんだろう、力が……。

「ん？　おい、大丈夫か？　付き合わせ過ぎたか……仕方ない、こ

れも私の責任だな」

ぼんやりとした意識の中で、ふわっと体軽くなる。目に移る世界は何だか奇妙な事になっていて、床だったはずの固そうな石が壁になって、いつも倒れそうだなあ、と思っていた仕切りが床になっていて、そこでやっと、自分が動いて無いのに視界が動いてくのを見て……。

談笑

湯からレオンと共に出る。

そこに待ち受けるのは中々大きなロビー。湯から上がった客が湯上りを心地よく過ごす為か、大人数が談話の出来る、長いちゃぶ台みたいな足の短いテーブルのが六脚、しかもそれが置いてあるのは畳の上という完璧な日本仕様。とはいえ俺は正座が苦手なのであまり畳というものが好きではない。というよりは嫌な思い出が思い浮かぶから嫌だ、という至極私怨極まりないのだが。だがそれほどあの足の痺れる感覚は恐ろしい。人を殺せるんじゃないかとも思う。

食べ物と飲み物もそれなりには揃えてあり、風呂に入ってそのまま飯を、という流れも可能なようで、実際長テーブルでは何人かが集まり、顔を突き合わせながら談笑している。何だかああいうのはいいなあ、とか思いながら、俺は畳に腰を下ろさずに、一直線に向かう。そこは飲み物が売っているカウンター。その奥に立つ恰幅が良くニコニコと笑顔が眩しいおばちゃんに何があるかを尋ねる。

「おい、どうしたんだ急に。逃げるもんでもあるまいし」

とレオンは言うものの、やはりこれは湯上りの気分が覚めない内にやっておかないといけない気がする。おばちゃんから商品を受け取り、四次元ポーチからお金を取り出して渡す。毎度、とおばちゃんが笑顔を崩さずいい、俺も笑顔でありがとうと言う。

手に持つのはビンのコーヒー牛乳。製作会社は流石だ、わかってる。

その場で蓋を開け、腰に手を当てる。あとはそのまま一気にビンの中身を飲み干す。流れ込む冷めたい感覚が何とも言えなかった。そして一気に飲んだ後思い切り息を吐く。疲れた体はどこへやら、もう体のどこにも疲れを残してはいなかった。

「……何やってんだ、お前」

「和の心、だよ」

「いや、さっぱりわからんが」

やはり日本風な場所であっても、外は正反対のヨーロッパ辺りをイメージして作ったせい、住む人々にはあまり日本的な知識は無いようだ。という事はしっかりとこういう物が用意されているのは、プレイヤーへの配慮という事になる。そんなスタッフの遊び心はどんなゲームでも、俺がゲームをプレイしてる時に見つけるとついほくそ笑んでしまうポイントだ。

そんなスタッフの気配りに感謝しつつも、俺は呆けた顔をしたままのレオンに向き直る。

「そういえばこれからどうするんだ？」

「俺の連れも今ここにいて、後で合流するように話はしてあるから、それまでのんびりしようと思うが」

「よし、じゃあそうするか。食い物でもなんか食べるか」

「いや、俺はつまみ程度でいいな」

「そっか、じゃあ俺は無難にカレーでも食うかな」

現代的なメニューが並ぶ中から基本的にハズレが少ないものを選ぶ。シアもおそらくここに来てるだろうから、待ってれば分かるだろう。あの髪型だし。ツインテールは街中でも見なかったし、そうそう居ないんじゃないだろうか。

もし仮にシアとはぐれてしまっても、その時は哭椿ナクツバキのしっかりした青年店主が何とかしてくれるだろう、と軽く考え、頼んで数十秒で出来た、ほかほかの出来立てカレーを、コーヒー牛乳の時と同じおばちゃんから受け取る。

手前のところが空いてたのでそこに二人向かい合うように胡坐で

座る。ちなみにレオンは枝豆を選んだ。あれだけ俺よりは稼いでそんな素振りをしてた割には随分と所帯染みている。見た目とは違つて実は倅約家だったりするんだらうか……。などと考えていたが今は目の前にあるカレーライスがとても気になつて仕方ない。

VRGを使いVR空間に入つた時、最初はてつきり現実の体の感覚とリンクしているものだと思つていたが、それが覆されたのは先程、晩飯を食べて中断していた途中から再開したときの事だ。相当疲弊していた体のままVR世界から離脱し、現実の体では今までが重かつた分軽く感じた。逆に復帰するとVR世界での疲れが残つたまま、現実では晩飯も食つて動ける状態だというのに動けないほど体が重かつた。それに晩飯を食つた直後にも関わらず、いま俺はこうしてカレーライスを頬張ろうとしている。

結果、導き出されるのはVRGで作^{アバター}り出された仮想体は、現実の体とは一切のリンクがないと言ふ事だ。

トイレとかどうなるんだらう、と思つてしまふが、別にオンラインゲームではないのでポーズが効く分、そこは現実の体が尿意を感じたら自動的に中断して、接続を切ってくれるとか、その辺だらう。実際の所はなつてみないと分からないが、これで現実に戻つて糞尿垂れ流しだつたら軽く死ねるぐらいだ。

そんな事を考えて、カレーライスを見るとなんだか……。いや考えるのをやめよう。折角今日一日死ぬ思いをして稼いだお金で買ったものを、食わないで捨てるなんて選択肢があつていいはずが無い。俺は無心でカレーライスに食らいついた。

あまり辛口ではなく、実に平凡なカレーライスだつた。ここまで味の再現とかが出来るならこつちで暮らしてもいいんじゃないか、と思つてくるが、先程自分で出した現実の体とリンクしないというのを思い出して、あえなくその考えを捨てざる終えなかつた。

VR世界では腹いっぱい食べてようと、現実の体が栄養もなく餓死してしまつたら元も子もない。

「お」

俺が色々と考えながらカレーライスを食べている様子を、奇異の眼差しを向けながら枝豆を貪るレオンが、何かに気付き手を上げる。

「アイリー！ こっちだー」

振り返るとそこには俺やレオンと同じぐらいの年の女性が居て、その丰满な胸を強調したような服で手を振りながらこちらに近づいてくるのには危うくカレーを噴出しそうになったがなんとか堪える。そしてその後ろの少し小柄な女の子が何だかこっちに視線を向けている。

可愛い子だけど俺会った事あったかな……。胸の辺りまで伸びた髪は何も縛る事もなく降ろされていて、湯上り特有の瑞々しさを帯びていて、照明が反射するツヤのある髪は艶やかで紫っぽい色だった。

湯上りだからかほんのり赤くなっている顔を良く見てみると、うん？

なんかどつかで……。

思うが早いか、相手が話すが早いか。

「ニケさんも、来てたんですね」

後者だった。ごめん！と心の中で全力で謝り倒し、それを表に出さないように細心の注意を払いながら、自然な会話に努める。……髪下ろすだけでここまで変わるものなんだなあ。

「……ああ、シアが言ってたから、場所は店主さんに聞いて」

「そっなんですか……あ、すいません、私場所も教えずに飛び出してしまって……」

「いや、全然気にしてないよ」

俺も髪を下ろしたシアに気付かなかったからおあいこで、なんて口には出せないが、心の中で呟いておく。

シアとそんなやり取りをしたのも束の間、シアの隣に立つお姉さんが急に近づき顔を寄せてきて、なんだか値踏みしているような目で全身を見られる。レオンが確かアイリ……って呼んでたな。

「……なんでしょう？ 顔になんか付いてますか？」

「いや、……ちょっとね」

ちよつと、って何だろう。とか思うが教えてくれそうも無いので、まずは仲が良さげだったシアに助けを求める視線を送るが、わたわたとするだけで具体的な救済策は無いようだ。……元よりあまり期待はしていなかったが。俺が助けを求められるのは、残るはレオンだけ。視線を向けると、はあ、と一つため息を付いて、俺の目の前に迫るアイリと言う女性に声を掛ける。

「アイリ、いつまでやってんだ。迷惑してんだろっ」

「おっと、ごめんなさい。つい、ね」

何が、つい、なのかは分からないが、とりあえず見知らぬ女性の顔が急接近したまま、と言う窮地は、その仲間である、レオンによつて救われた

ので、俺もやつと長い息を吐き、落ち着く。

「ごめんね、あたしはアイリ。その馬鹿レオンと一緒に冒険者やつてるわ」

「俺はニケです。まだ駆け出しの冒険者で……」

「そのわりにはD型をもう狩ってたりするけどな」

俺がアイリさんに自己紹介をしてると、言い終わらないうちにレオンが割り込む。

さらにそれに対して俺が文句を言おうとしたのに、被さるようにアイリさんがその会話に乗っかる。

「うっそ！ D型を初心者が、ってますます気になるわねえ」

最後に俺はシアを頼って視線を送るが、相変わらず慌てて何をすればいいのか迷い、最終的に俺がいつもシアにしているように、頭に手を載せて撫でるだけだった。

あれから四人はそれぞれ向かい合うように座った。俺とシア、その向かいにレオンとアイリという席順だ。冒険者として先輩でもある二人に色々と聞くことが出来て、これからの旅路に役立ちそうだった。

話してわかったのは、冒険者と言っても一枚岩で星の欠片を集めているわけではなく、どうやら冒険者の中から星の欠片を探してくれる有志を募った、というのが正しいらしい。

もちろん他の冒険者達も星の欠片を見つけたらCCに報告し、欠片を手渡す。そしてその欠片を国に引渡し、CCから冒険者に報酬が払われるといった形になっているらしい。

一応この世界の人々は全員が魔物とこの星の命に危機を感じていて、国の募集に募った証として無色の宝石があらわれた冒険証を持つ冒険者はなにかと優遇される、と言う話だった。つまり俺の持つ冒険証がその無色の冒険証なのだが、いまいちその実感が、恩恵

クリーチャーズコレクション

をあまり感じない事もあって薄い。まだ俺が駆け出しだということもあるのだろっけ。

冒険証にはめ込まれる宝石は冒険者となった国によって色分けしてあるらしく、レオンとアイリは赤色。シアは冒険証が無いが、この国の冒険証の色は青色なのだから。

無色はこの国でも共通で、世界の救済者、だとか何とか。ご大層な名前が付いていてもやる事は歩き回ってその欠片を探すだけなので、やることは地味極まりないが。

それと武器なんかの話も聞いた。俺自身今は初期装備の片手剣だが、他にも種類があるので参考までに二人に聞いてみた。

レオンは大剣。確かにイメージ通りと言うか、力任せにブンブン振り回している絵が簡単に浮かぶ。

アイリは魔弓使いらしく、後方からの弓攻撃、魔法支援が主な役割で、たまにストレスが溜まつてる時にはレオンごと攻撃魔法で吹き飛ばす事もあるらしい。アイリらしいといえbraしいが。

そしてシアの武器について聞いた時に、聞きなれない言葉を聞いたので例の如くシアに聞いてみる。

「魔剣士？」

「はい。魔法と剣術を合わせて使う人をそう言うんです」

「魔剣士すら知らないって……ニケは今までどこに住んでたのよ」

日本です。とは言えず、笑って誤魔化しておく。間髪入れずにシアに魔剣士について説明させてその場をしのぐ事に……いや、この世界の勉強と言う事にしておこう。

「私の場合は短刀と、知っての通りの火炎装填や癒水ですけど、両方使うので一応魔剣士という扱いになります」

「へえー」

「シアちゃんって、冒険者じゃないって聞いたけど……良く知って

るね」

「CCで働いてましたから、ある程度だけなんですけどね」

褒め称えるようなレオンの表情と声は、シアには少しくすぐったいらしく、もじもじとして俯いてしまふ。それとは別にアイリが最初にあつた時のような、全身を嘗め回すような視線を向けてきている事に気付く。

「……二ヶ、アンタって本当に冒険者？」

痛い所を突かれた気がする。いや突かれた。

俺自身がシアの方が冒険者っぽいと思ってしまうているし、ステータスを比べても明らかにシアの方がらしい。

「多分、きつと……そのうち」

アイリに鼻で笑われた。すごく屈辱的だったが返す言葉もなく、絶対アイリなんか追い越して鼻で笑い返してやろうと心に決めた。今決めた。

それと今後シアの方が冒険者っぽいと言われなかったためにも、明日からは積極的に外に出てレベル上げをしないと……あとはこの国の周りも少し見ておきたい。あの丘から見ただけじゃ、……というよりあの時は疲れてすぐにへばっていたのでまともに見てもいなかったつけ。

「俺、そろそろ宿に戻るよ」

そう言っただけ俺は楽しい席を立つ、少し名残惜しかったが、流石にそろそろ休まないと明日に響く事になりそうだったからだ。だから多少は引きずるものもあったが、振り切ってそこから離れる。明日

はレベル上げが主な目的になるだろうから、俺一人でも大丈夫だと思っただので、一緒に席を立とうとするシアを押し留めて、俺だけがその場を去る。

「じゃーな、またどつかで。シアは後でな、鍵は開けとくから」

「ああ、またどつかで、な」

「ばいばいー、楽しかったよー」

三人に別れを告げて外へ出た。……そういえばここお湯屋だったんだなあ、と黒と白の暖簾を見て思い出した。なんだか食べたか呑んだりしながら談笑していると、どこでも居酒屋のような気分になっってしまうのも、だんだん年寄り臭くなってるのかもなー、などと思いつつ、満天の星空の下、もはや湯上り気分でもないが気持ちは上を向いたまま歩いていく。

恒例行事

宿に帰り、店主の青年から鍵を受け取る。

足早に階段を駆け上がり部屋の鍵を開けて飛び込んだ。ベッドの横に力なく座り込む。

楽しい楽しい時間が遠く、まるで祭りの会場から離れる時のような気持ちを抱きながら、あのひと時を思い返したりする。あの二人も、仲間になるのかなあ。だけどあの二人中々レベル高そうだったし、なるとしてももう少し後か……。

眠気が襲ってくる……。シアがベッドで寝ると思うから俺はこのまま寝よう。

睡魔に襲われながらも現在時刻をメニューを開いて確認する。

現実時間で八時前

楽しかった……。あんなに人とお喋りしたのは久々だったなあ。

レオンさんと、アイリさん、しばらくこの町を楽しむって言ってたし、またいつか会えるかな。

……そういえばニケさん、先に帰っちゃったからあんまり喋れなかったけど、やっぱり今日一日色んな事があったから疲れたんだよね……。部屋開ける時は寝てるかもしれないからそっと開けないと……。ニケさん起こしたら悪いし……。

部屋のドアを開ける。ドアノブはゆっくり捻り、扉を開ける時も軋む音が立たないようにそっと開けて、中を見るために顔を覗かせる。

目は合わなかった。けど姿は見えた。

扉を開けてそのまま進んだ所にある、ベッドの横の床にニケさんが座って寝ていた。

「な、なんで？」

扉を開けた時と同じ様にゆっくりと閉めて、そろりと近づく。

ベッドのシーツには皺がついていて使ったような感じはあるけど、寝たような後には見えなかった。まるで上に乗っただけのようなそんな感じがした。

どちらにしろニケさんがベッドで寝ていないことは見て分かるのだけれど……。

どうして？　なんでニケさんはこんな所で……。

……ああ、そうか。原因は私、か。

こんな事になるなら二部屋取ってもらったなあ、……もう遅いのだけれど。

でもこのままベッドで寝るのも何だか悪い気がするし……どうしよう。

……そうだ、だったら……

う……ん……。

瞼が重い。体も足も重い。ちゃんと休んだはずなのに……。

……ああ、そうか。宿のグレードはこの仮想体アバターの、ステータスに表示されないパラメーターである疲労の回復の度合いが違うのかも知れない。

高級な所で休めばどんな疲労も一発回復。逆に安宿だと一日だけしか休まないと満足に回復しない、とか。今度手持ちに余裕がある時にでも試してみないと。

……ね？　隣で寝てるシアさん。

とりあえず訳が分からなくて、心臓も寝起きの癖にバクバクで、なんかかわいいというのだけは分かる。俺は冷静だ。

状況を整理する。

俺が目覚めるとシアが隣で寝ていた。なんだか凄く、電車で隣の人がこちらに頭を預けて熟睡してる的な、気まずさともどかしさを思い出す。

俺が寝る前の行動から思い出すと、俺は確かに一人で、シアがベッドを使うものだろうと思い、ベッドの脇に腰掛けて寝た。起きるとシアがご丁寧にベッドのシーツを掛けてくれた上で隣で寄り添うように寝ている。寝顔が可愛い。あとシアは髪を下ろしているほうが個人的に可愛いと思う。明日言ってみようかな。

この状況は、どうしてこうなった、の一言に尽きるのだが、俺は冷静なのでとりあえずメニューを開く。

現実時刻は寝る前に見た時間からほとんど変わっていないかった。

……現実時間とリンクしてるものだと思ったけど、これもアバターの時と同じで実は別だったらしい。

一通り動かずに出来る事はしたが、……さてどうしようか。

下手に動くとシアを起してしまいそうで怖いが、こっちは寝起きドツキリをやられた気分なので眠くない。あとこの状況で二度寝出来るほどに俺の女性免疫は高くない。

このまま寝顔を眺めているのも悪くなかったが、流石にそんな訳にも行かないので、意を決してそっと体を起こし、シアをゆっくりと抱きかかえてベッドに寝かす。やっぱり小柄な女の子なので、見た目通り軽かった。

なんとか起こす事なくベッドに運び込めたので、そのままシーツを肩まで掛けてやり、俺はそっと部屋を出た。

空を見ると藍色の空に星が輝いていて、月も星に負けないくらいに光を放っていて、その光を遮る障害が少ないおかげかこんな時間でも道は明るく照らされていて、明かりがなくとも全然平気なぐらいだった。町のほとんどが寝静まり、音は風が吹く音と自分が放つ音だけだった。

そんな静寂が心地よかった。

俺はこの街から外へ出る唯一の道、門へと歩きながらメニュー画面を操作する。

今日の二回の戦闘で二度のレベルアップ。その際に得たAPをまだどれに振るか決めていなかったからだ。

アビリティの欄を開く。戦闘、というか武器関連や特技はスキルとして別枠なので、ここで選ぶのはそれ以外のものになる。

裁縫やなんかの生活系のアビリティはとりあえず関係ないので除外し、必要そうなのをピックアップする。

このデュアルワールドのアビリティは少し変わっていて、一つのアビリティには三ランクあり、一ランク目は基本的な効果を持っていて、ほぼ全てがAPで取得できる。そしてその上のランクに上げるのは、物にもよるが十から二十付近までAPが必要だ。さらにその上もあるが、……生憎と今はまだ俺のレベルが低いせいか詳細すら出ていない。育ててからのお楽しみだろう。

俺がピックアップしたアビリティは四つ。

『手入れ』——武器と防具の耐久値の消耗を抑える

いたって地味な効果だが、こういうのはあるのと無いのでは後に響く時があるので習得しておく。

『魔法』——基本的な魔法を使用する事が可能になる。

このアビリティが無いと魔法が使用出来ないらしい。俺はこのVR世界で魔法を自分が使えるなら絶対使いたかったので、これを習得する。

『休息』——疲労が回復するのが早くなる。

これはさっき疲労と言うものの恐ろしさを味わったので習得しておく。

『識別』——敵を注視すると情報が表示される。

これはもはや必須というか、なきゃ困るぐらいのものだと思うので、習得。

とりあえずこの四つを習得する。どれかをランク二にするためにポイントを残すという選択もあったが、まだまだゲーム序盤なので

質より量を今回は取っておく。他にめばしいものもあつたので、またレベル上がってAPが増えたらそちらを選んでいき、ある程度の数を揃えたら質を上げていく方向で考えていく。

メニュー画面を順に叩いていき、ピックアップした四つのアビリティを習得し、画面を閉じる。目の前にはもう門が見えていた。

少し開いたままの門を潜り、近くで警備をしている城の兵士に挨拶をして外へ出る。

外は危ないから気をつけて、と声を掛けられたのでお礼を言つて、月明かりに照らされた草原へと足を踏み入れる。静けさと中で風に揺られた草達がざわめく。目に見える範囲に敵は映つてないが、これがフィールドだとすると、あの丘で突然現れた狼達のように敵が突然現れてエンカウント、という事もあるかもしれないので、気を引き締めて気配を探る。もちろん胴の剣はまだ抜けない。

静けさが一層深まり、風が強く、一瞬だけ吹いた。

自分が出した音、風によつて起きる自然な音。それらに一切当てはまらない、違和感のような物音がした。振り返るとそこにいたのは俺が持ち望んだ魔物だった。

月明かりが反射し煌いている体表は鱗のようになっていて、その右手には俺よりも高価そうな銀色の剣。左手には皮で作られている質素な盾。二本足で立つその魔物の足の隙間から長くうねうねと動く尻尾が見える。

早速識別アビリティを使うためにその魔物を注視する。

名前は『リザードマン』装備は思った通りの『鉄の剣』『皮の盾』で、それ以外の表示は無い。

その表示を読み終えた瞬間に敵が動いた。

数メートルも離れていたリザードマンは、一回の跳躍で空中から鉄の剣を振り下ろしてくる。

剣を抜く暇もなく、ただ反射的に横へ転がる。地面に振り下ろされた剣が刺さる音が聞こえたが、それを目視する暇もなく、ただ手探りで腰の頼りない俺の武器を手取る。

体勢を立て直し、半ば自動的に剣を構える。

リザードマンは標的を外したその剣で空中を切り払い、当たらなかった事にイライラしているようだった。……そんな簡単に当たってたまるかよ。

俺の狙いは一つ。ただひたすらに避けて俺の唯一のスキルである『スラッシュ』をお見舞いする事だ。

このリザードマンは出会いがしらの跳躍といい、機動性に富んでるみたいなので、隙を突く事は難しいだろうけど、かといって切り合いをして勝てるとも思えない。武器の質も向こうが上で、おまけに盾もあるのだから、それで受けられて反撃されればかなり厳しくなる。

方針は決まった。あとはそれを実行するだけだった。

リザードマンが先程の跳躍とは違い、小刻みに跳ねるようにこちらへ向かってくる。俺はただひたすらに待つしかないので、リザードマンから目を離さないようにしながらその周りを回るように走る。リザードマンは走る俺を追うように跳ね続ける。このままだと堂々巡りか……。

敵の隙を見つけるために敵の周りをひたすらに回るのは、アクションゲームでは割と有効的な手段だが、時折ひたすら回るとそれを追って敵もひたすらに回り続ける、いわゆるループ状態に陥る時がある。

これを抜けるには俺自身の動きを止めるか、敵の動きが変わるか、他に乱入者が現れるか。

今この状況で二対一になるとまず逃げるしか無いだろう。そうならない事を祈るのならば、俺か、リザードマンが行動を変えなければならぬ。

しかしリザードマンはAIで行動が限られているだろうから、実質的にはプレイヤーである俺が動かなければならない。それが分かっても具体的にどう行動すればいいのかはまだ答えが出ていない。だがこのループ状態ならば考える時間はいくらでも作り出せる、…

：俺の体力が続く限りだが。だから今は冷静に考える。

むやみやたらに突っ込んで切りかかって、盾で防がれて反撃の一太刀を受けるのは目に見えている。

ならば最初の出会い頭の一撃をかわしたように、敵の攻撃を誘いそれをかわし、反撃を叩き込む、というのはどうなるか。……まず前提が難しいかもしれない。

まだこのデュアルワールドでの戦闘は三回目で、人型で剣を使う魔物の相手にするのは初めてだ。もちろん現実で剣を相手取ったことは無いし、経験が全く無い俺が、リザードマンの剣を正確に見極めて避ける事が出来るとは思えない。

最初の一撃は、大きく跳ぶ、剣を思い切り振り上げていた、そういった動作があったからこそ、見極めて横に避ける事はできたが、それでも無様に転がりながらで、なので、完璧に避けれたとは言えないだろう。それを狙って確実に出来なければ、相当な深手を負うことになる。

選択肢が無い。でも何かしらの作戦がなければ、俺の実力では勝てないのは明白だ。

このデュアルワールドは、RPGにしては戦闘の部分はアクションゲームに近いものがある。それもVRゲームと言う媒体のせいなのだろうが……。そのおかげでアクションゲームの知識も役立つ事はあるのだけれど、コントローラーを握って操作するのとは違い、自分が動く事で操作となるので、指先だけの操作よりは反応が鈍くなるのもあるし、自分の行動がリアルタイムで反映されてしまうので、頭が考えるよりも早く体が反射的に動いてしまうのを止める事は出来ない。その例としては、レースゲームで曲がるときに体を傾けたりや、ホラーゲームで驚いた時に体が反応してしまうのがいい例だろう。

だから原始的な恐怖に本能的に体の動きが止められるのを防ぐ事も出来ない。ましてやそれが真に迫るものならば尚更だ。

だから突然動きを変えて襲ってきたリザードマンの剣に、一瞬だ

け体が固まり、相手が剣だと言うのに腕を盾代わりに交差させて防いでしまう。

剣が深々と腕を裂く感覚だけを感じる。

それを振り払うように無造作に剣を振り、リザードマンを牽制する。後ろに跳びそれを避けたリザードマンが、余裕のある顔でさっきの借りを返したと言わんばかりの顔をするので、若干イラッとする。

切られたのは左手だったようだが、まだ動く。痛みを感じないから体を盾に使うという手もあるが、今回はレベル上げが目的なので出来る事ならば攻撃を食らう回数は減らしたい。

一旦距離を取り、相対するが、状況は劣勢だ。

ループ状態だと思って考え込んだのが間違이었다。この世界ではNPC達が意思を持ち、自分で考えて行動するのだから、それと同等とはいかなくても、魔物なりの思考回路があつてしかるべきだった。従来のゲームと同じに考えていると、今の俺のように怪我をする、か。

覚悟を決める。敵が高等な思考を持つのなら、小細工のような作戦じゃ駄目。かといって作戦の幅は少なく、俺の力じゃその数少ない選択肢すら実行出来ずに、リザードマンを敗れない。

ならば、俺が変わってその作戦を成功させるしかない。

敵の剣を避けられる自信が無い、なんて言つて逃げてる場合じゃない。もうそれしか勝つ見込みが無いのだから。

両方が動かない。俺は相手の攻撃を待ち、敵は俺の出方を探る。

緊張感が走る。仮想の心臓が悲鳴を上げるが、それすら押さえ込んでリザードマンの動向に目を配る。無理だと諦めた、敵の攻撃を誘い、かわし、一撃をお見舞いする作戦。出来なきゃ多分、死ぬ。でもやるしかない。

そして、リザードマンが動いた。地面を蹴り、一息に放物線を描いて跳躍する。

油断はしない。思い切り振り絞られた、その腕の先の鉄の剣に意

識を集中する。

最低限の動作で避け、最大限の攻撃を叩き込む。攻撃ポイントは人型の魔物なので、人の急所と同じ首を狙う。

リザードマンが目の前まで迫り、腕を振り下ろす。俺はそのタイミングに合わせて、剣を振るために一度引く動作をして、紙一重のところでの剣をかわす。

リザードマンの剣は俺に当たらずに、勢いのまま地面に吸い込まれていく。だが地面に刺さる前に、俺の一閃が、地面に平行に振るわれた『スラッシュ』が青い軌跡を残して首を切った。

手ごたえは確かに感じた。しかし血も出ないし、首が真っ二つに切れる事も無い。だがリザードマンの動きは不自然に固まっており、こちらが構えを解くと同時に糸が切れたように倒れこむ。もはやそれは『リザードマンの死体』と表記されるアイテム扱いになっていた。

それを四次元ポーチへ放り込む。そして何も無かったような静寂に包まれて、ようやく実感できる。

「……勝つ……たー！」

今の戦闘で精神がかなり削られて、もう正直帰りたい気持ちだった。

リザードマンの一撃を食らった事を思い出し、HPの確認にメニューを開く。HPは半分程度になっていた。連戦するには心許なかったので、アイテムの欄から薬草を取り出す。

「……これどうすんだ？ 塗るのか、食うのか……」

薬草は使えばHPが回復するのはもはやRPGに限らず、ゲームをよくプレイする人達にとって別に不思議な事ではない。ただ、問題はどうかやって使うか、だ。

コマンド式ならば薬草を選んで”使う”でも選べば済む事だが、このデュアルワールドではそうもいかない。とはいえずり潰したりする道具も無いし、はっぱをそのまま負傷したところに当てておく事も試したが、効果は無い。……やはり食べるしかなかった。

唾を一回飲んで、意を決し口に入れ、噛む。

感想、凄まじく苦い。良薬は口に苦し、とは言いつけれど、薬草如きで良薬と言っているいいものなのかも定かじゃないし、苦すぎて舌の感覚が無くなってくる。これ実は舌にダメージでも入ってるんじゃないのかと思うぐらいに、苦い。

でもメニュー画面を見るとちゃんとHPが回復されているので、効果はしっかりとあるようだ。……だがもう食べたくない。

レベルはまだ三のままだったが、薬草を取り出した時に見たアイテム欄に、リザードマンの死体と共に、その装備品である鉄の剣が何故か入っていた。残念ながら皮の盾は無いようだったが、これはリザードマンからのドロップって事でいいのだろう。早速装備品を入れ替える。

みすばらしかった剣がグレードアップして、なんだかようやく様になった気がする。

さっきまでは俄然弱気だったが、ここに来てこのドロップで自然とやる気も出てくる。

その後も出てきたのはリザードマンばかりで、一対一で戦えるので俺には丁度良かった。薬草の苦味を味わいながらも、限界まで戦い、レベルも六へと到達した。

APの振り分けは宿に帰ってからする事にしよう。振り分けてる途中で襲われたら確実に一撃は食らうだろうから。

レベルが上がったおかげで、スキルも『ストライク』という突き技を新しく覚えた。あまり使う機会は無さそうだなあ、とか思ったが、ウルフリーダー戦で突きを使った事を思い出し、考えを改める。相変わらず盾はドロップしてくれはしなかったが、鉄の剣を装備しているのを除いて二つ入手。

レベルアップの副産物にしては中々良い拾い物だろう。売ればそれなりになりそうだ。ついでにリザードマンの死体も溜まっていたので明日の朝一番で売り払ってしまおうか。……少し素材に見るのもいいかもしれない。

門の前で相変わらず警備を勤める門番の兵士に軽く挨拶をして中に入る。俺が出る時と同じ人だったので、どうやらこんな時間でも怪しまれずに通れたようだ。

そして、宿へ戻るために歩を進める。

現実時刻は夜九時。デュアルワールドの時間は、もう日が昇り始める頃だった。

目覚めの朝

現実時間で九時を過ぎた頃、デュアルワールドでは朝になっていた。

夜のレベル上げの後、宿にこっそりと戻ってシアに気付かれないように再び眠る。どうやらプレイヤーである俺がこのデュアルワールドで睡眠を取ると、デュアルワールドの中の時間が急速に進むようだ。最初こそ時間は合っていたが、睡眠を取ったおかげでズレが生じたのがその証拠だった。

目を覚ますと目の前にシアが居た。なんだか奇妙な表情をしていた。

怒ってるようで、恥ずかしがっていて。悲しそうで、嬉しそうなそんな複雑な表情。女心が手に取るように分かるスキルもアビリティもないので、今の俺にシアの本心がどういったものなのか分からないが、とりあえず謝っておく。多分俺が原因だと思うので。

「……なんかよく分からないけど……ごめんな？」

シアは反応こそすれど、言葉で返す事はしてくれなくて、俺に取れる選択肢は限りなくゼロになり、俺も困る。

気まずい沈黙が空間に満ちるが、俺に何かしらの原因があるっぽいので、俺は動けない。ただただシアがこの沈黙を破ってくれるのを祈って待つしかない。今の俺にはそれしか出来なかった。

やがて、シアもこのままだと何も進まない事に気が付いたのか、ようやく口を開いてくれた。

「……っ……んです、か？」

シアが俯きながらも搾り出した言葉は、良く聞き取れなかった。

細く消え入りそうな声で呟くように言ったので、最初の方が聞き取れない。

「触っ、たん……ですか」

……これは、どうしたものか。触ったと言えば触った事になるが、決してそんなやらしい事をした覚えも無い。とはいえシアは触ったかどうかしか聞いて無いので、変に自分から墓穴を掘るような事は避けたいところではあるのだが。

様子見でまずは真実を告げよう。何か勘違いしている様ならその誤解を解けばいい話だ。変に考えると余計に面倒な事になる。

「……触りました……」

途端に、シアが俯いていても顔が真っ赤に染まっていくのが分かる。

その様子を見て俺は慌てて理由を付け足す。

「ちょっと待ってくれ！ そんなやましい気持ちじゃなくて、起きたらシアが隣で寝てて、俺に氣遣ってくれたんだと分かったんだけど、やっぱりシアみたいな女の子がベッドで寝ないのも体に悪いからさ、ちょっと動かしたただけなんだよ、本当に。本当に」

「え？ えっと…… 本当に、それだけ、ですか……？」

「もちろん」

「そっ、ですか……」

なんとかシアも分かってくれたみたいでほっとした。

そういえば朝食とかはどうなるんだろう。一応夜動いて寝た分は、腹も減っていて、余裕で食えるのだけど。あと今日の予定も立てないといけないなあ。俺一人じゃなくてシアもいるし、ちゃんと話し

合って決めないと。

あ、リザードマンの死体を忘れてた。朝にでも換金しようかと思
ってたけど、シアを驚かすために、まだ秘密にしておく。

とりあえず、朝食でも取りながらシアと今日の予定を立てる所か
ら始めよう。

「シア」

「はっ、はい！」

ただ呼んだだけなのにこの過剰反応なのは、やっぱり弁解したけ
ど納得できていないんだろうか……。とはいえ俺にはもうこれ以上
どうする事も出来ないなので、そのまま提案をシアに示す。

「いや、そんな怯えなくても……。今日の予定なんだけど朝食でも
取りながらどうだ？」

「はい……。大丈夫です」

案外、素直に応じてくれて良かった。もしかしたら断られるんじ
や無いかとか思ったりもしたが、元気が無さそうではあるが了承し
てくれたので、そのままシアと会話を続ける。

「それじゃあ行くか、ってここで出してくれるのかな」

「……ここらへんの宿だと大体ご飯は付きませんね。朝夜問わずに」
「そうなのか……」

これは予想外だった。昨日の夜は『覚能乃湯』で風呂に入り、そ
のまま夜食を取ったので、宿での食事の事は何も考えていなかった。
思い返せば、宿を出る時に食事の事を何も聞かれなかった。あれは
元から食事の準備が宿には無く、普通の客と一緒に、他所で食べる
ものだと思っただろう。ましてや俺が聞いたのは近場にあるお湯

屋。その詳細もあの店主の青年は知っていたようだったし、そこでそのまま食事を取るものだったはずだ。

そして俺自身も食事の事を忘れていたために、自然と普通の客と同じ利用方法を図らずも取ってしまった、と言う事だ。

しかし、そうなると再び覚能乃湯に向かうしか……他に俺が思いつく食事処は無い。

いや……街の探索している時に見たような気もするが、生憎と場所も名前ももはや記憶から抜け落ちている。

「あの……」

これから予定を立てるための朝食の時間を取るために、食事処を考えていた俺の思考はシアの遠慮がちな声に遮られる。

「どうした？」

「その……食事を取れる所を考えているんですね？」

まだ一日しか一緒にいないというのに、思考を見透かすのはスキルかアビリティか。ともあれ間違っではないし、別に否定する事でも無いので素直に頷く。

「私がお勧めの場所があるのでそこにしませんか？」

「よし、じゃあそこにしよう。道案内よろしく」

「はい！」

シアは元気をすっかり取り戻したようで、さっきまでの様子はどこへやら。女心と秋の空、とは昔の人もよく言ったものだ。そんな事を思うがもちろん口には出さずに、部屋を出て宿の階段を下りる。

「ニケさん……」

「ああ、なんか騒がしいな」

階段を下りる前からなにやら下が騒がしい。叫び声……いや、怒鳴り声か。太い声は男のようだが、一体誰に？ それにあの店主の青年は仲裁に入ったりしないのだろうか。

色々と疑問が浮かぶものの、状況がはっきりしない上に、どのみち階段を下りなければ外に出られないので少し気後れしながらも、階段を下りていく。

階段を丁度降りきったところで、一層強い怒声が気圧されるほどに響く。

「だから！ こんなものに金を払えるかって言ってるんだよ！」

恐る恐る歩を進めると、一回のロビー部分で中年の男性が、小柄な人にこれでもかと言うぐらいに怒鳴っている。それが騒がしかった原因なのは一目で分かったが、店主の青年の姿が見えない。こういう時は真っ先に対処するはずの人物が居ない。だからこそこんな朝っぱらから騒々しい事になっているのだろうか。

店主が居ない事にはこの宿を出て行く事も叶わないので、とりあえず怯えているシアをなだめつつ、中年の男と小柄な人の動向を観察する。

「そうは言っても、これを注文したのはアンタだし、事前に金額と出来上がる日にちは伝えてたはずだけど」

中年の男に相對していた人は、小柄な女性だったようだ。その声を聞いてようやくはつきりとする。髪は方に届くかどうかの短さで茶色。服装は汚れてはいないものの、工事現場でよく見る感じの服装だった。腰に手を当てて、怒鳴る中年に一步も引かずに対応しているのを見ると、隣に怯えきったシアが居るせいか、際立って強い

女性に見えてしまう。心なしか背中も大きく見える。

「出来が悪いって言ってんだよ！　こんなものに金を払うくらいなら、魔物にでもくれてやった方がまだましだ」

「……アンタ、自分が言ってる事分かってんの？」

あ、なんかやばそうな雰囲気が漂ってらっしゃる。無関係と言われればそうなので無視する事も出来るが……。ここで無視できるようならばシアにも会ってない訳だ。

「ストップストップ。二人共落ち着いてください」

「何だお前」

おおっ……。まさか二人が綺麗に同じ言葉を返すとは思わなかった。

だがとりあえず俺の話は聞いてくれるようなので、説得のしようもあるというもの。

「いえ、少々騒ぎすぎなのでは、と思ひまして。他に寝泊りしている人も居るでしょうし、こんな朝からそんなに騒ぐ事も無いでしょう？」

俺がそう言つと、意外にも反発してくるのは、女性、シアと同じくらいの女の子だった。

「アンタには関係ないでしょう。私はこの人と仕事の話をしているの」

「その仕事の話のせいで周りが迷惑してるって言ってるんだけど」

「それはこの人が全面的に悪いわ。怒鳴ってるのもこの人だけだし」

そう言っ指差す少女の態度に俺は呆れ、中年の男は頭の血管が浮き出るほどに怒りを溜め込んでいて、今にも爆発しそうだ。

自然と小さなため息が一つ出てしまう。またこれか、とは思わないでもないが、首を突っ込んでしまった以上仕方ない。やるしかない。

「……分かりました。私は無関係な人間なので本当はとやかく言う権利はありませんが、円滑に事態を解決するために、私がお二人の間に立つのは如何でしょうか」

「余計なお世話だ！」

中年の男が怒りを俺に向けて放出したのか、再び怒鳴り声で俺の提案を跳ね除ける。

そのせいで俺もどう会話を続ければいいものか迷っていたが、もう一人の当事者である女の子が、それよりも早くその口を開く。

「いや頼めるならぜひ頼みたいね。この人は話を聞く気も無いし」

女の子の言葉に反論出来ないのか、男は黙る。

話の流れはなんとなく掴んではいるものの、具体的に何が問題になっているのかがわからないので、そこから話を聞く事にする。

「それで、何が原因でこんな騒ぎに？」

「これさ」

女の子は腰の所から何かを取り出す。

取り出されたのは赤色の皮に収まった、シアが持っているような短刀だった。

「……これは？」

「魔紋付きの短刀。私の自信作さ。これをこの人が頼んで、それを

届けに来ただけど、そんなものに払う金はないとか言い出すもので、揉めていたんだ」

魔紋という言葉に聞き覚えが無かったが、とりあえず付加価値的なものだとして理解して飲み込んでおく。

どうやら話を聞くに女の子に武器を依頼した男が、出来上がるといらないと駄々をこねてる訳か。いい年して何をやってるのやら……。その手首にある青い冒険証がこの街の冒険者であることを示している。

女の子の話を聞く分には明らかに男の一方的な我侘だ。要らないから料金を払わない、なんて子供みたいな言い訳が通じるはずもない。しかしそれだけで結果を決めるのはあまりにも不平等なので、一応男の方にも話を聞いておきたい。

「それじゃああなたの方は何かありますか？」

男に問うが、さっきまでの威勢と罵声はどこへ言ったのか、静かに黙り込んでいる。

待っても、もう一回聞いても、反応が無い。

痺れを切らしたのか、女の子が男に向かって冷静に、静かに問う。

「もういいわ。唯一つ聞かせて。これを買うのかどうか」

「……さっきから払う金は無いつて言ってるだろう」

「あっそ」

女の子はそれだけ言うつと短刀を仕舞い、身を翻して宿から出て行く。丁度入れ替わりで店主の青年がやってくるが、もう事態は収束してしまっただ後なので、一步遅かった。

男も何も言わず、ただ俺をその目で一瞥し、同じ様に去っていく。

「なんだっ たんだ……」

「さあ……？」

呆氣に取られている俺とシアはただ呆然とその場に立ち尽くし、二人が出て行った宿の入り口を見つめていた。店主の青年がなんだろうと見ているのが分かったが、少しの間動けずに居た。

その謎の拘束を腹の虫が破り、ようやく動けるようになった俺達は、奇異の目を向けていた店主の青年に宿の代金を払い、外へ出る。四千と少しばかりの所持金が今は、昨日のお湯屋で使った分も含めて半分ほどになっていた。だがまだ昨日の夜中に一人で稼いだ分を換金していないので、それを所持金に含むのならまだ金欠とも言えない位には持っている事になるはずだ。

「こつちです」

シアのお勧めの食事処を楽しみにしながら、先を歩くシアに付いていく。

シアは髪型を再びツインテールにしていた。黒いリボンで結ばれたその綺麗で艶やかな髪をつい触りそうになるが、何とか堪える。

シアは通りを何分か歩き、そこからいかにもな路地裏へと足を踏み入れる。

多分、地元の人でも限りある人しか知らないような、秘境の店なのだろうか、とか思いつつ、置いてかれないように付いていく。

やがて目の前に現れたのは定食屋だった。通りには目が届くものの、少し離れているせいか通りからは注目もされないような寂れた所に建っていた。

店の名前は『こりゆう』暖簾にそう書いてあった。

朝食の時間

昔ながらの定食屋をそのまま持ってきたような、どこか浮いたその存在にシアは何のためらいも無く暖簾をくぐり、引き戸を音を立てて開き、入っていく。

確かに、いかにも高級そうなレストランとか、そんな上流階級のお店よりは心が落ち着くが、それにしたって少しみすばらしい気がする。

シアの後に付いて暖簾をくぐると、その内装もいかにもな感じだった。

お店の半分ほどを占領するカウンター席。そして人がやっとひとり通れるほどの通路があつて、テーブル席が三つほど並んでいた。

カウンターのの中には歳を取ったおじいさんが居て、いらっしやいとゆっくりと言ってくれる。

どうやらシアがお勧めと言っただけあつて、シアはこのおじいさんと顔馴染みらしく、シアの姿を見るとその顔を綻ばせて、ひさしぶりだね、と言うのだった。シアは同じくらいに笑って言葉を返す。そのついでに注文を頼んでいたが、いつもの、で通じる辺り相当な常連客なのだと思わされる。俺は何にすると言われたが、シアと同じでいいと答えておく。シアがいつもの、で通るほどに食べている物ならば、ハズレは無いだろうと思えるし、どうせならこの店を勧めてくれたのだから、料理もシアのお勧めに従って見るのもいいんじゃないかと思ったからだ。

注文した後、三つあるうちの一番奥のテーブル席に俺とシアは腰を下ろした。

注文が来るまでの間に、さっき聞きたかった事でもシアに聞いてみる事にしよう。

「シア、さっきの人が言ってた『魔紋』って何なんだ？」

「えっと、魔紋っていうのは魔法が使えるようになる特殊な文様の事です。武器や防具、アクセサリーに刻んで持ち歩くのが普通ですね」

シアはそう言うつと首の後ろに手を回して、何かを取り外し、手に乗せた後、俺に差し出してくる。

シアの手に平に収まっていたのはペンダント。赤く細長い宝石に鎖が繋がっていた。

「これは？」

「私の魔紋付きのアクセサリーです。この宝石の表面を良く見てください。……紋様が見えると思うんですけど……」

シアにそう言われて改めて宝石の表面を見る。確かにそこには、宝石の赤よりも深く濃い紅色で複雑な紋様が描かれていた。

「これは何度か使った見せた火炎装填ファイアチャージを使えるようになる魔紋です。これが壊れたりすると、もうその魔法は使えなくなるんです。もちろん同じ紋様を用意すればまた使えるようになるんですけど……」

シアにそこまで言われて、俺はふと疑問に思う事があった。シアが使った魔法は二つ。昨日確認した事なので今も変わってないはずだが、その一つが魔紋によるものだとして、もう一つは同じ様に魔紋なのか。そうだとすれば、魔法を魔紋無しで使う事は出来ないという可能性も出てくるのだが、答えを知るにはさらにシアに話を聞かなければならないのに、丁度そこへ、店主の奥さんだろうと思われるおばあちゃんが、器用に二つの盆を片手でそれぞれ持って現れた。

料理を運んできてくれたおばあちゃんも笑顔がとても穏やかで綺麗だった。ごゆっくりどうぞ、と言う声も優しさが感じられて、こ

の店がシアのお勧めになるのも分かる気がする。

恭しくお辞儀をして去っていく。

運ばれてきた料理は、和の定番ともいえる内容の定食だった。

鮭の塩焼きに大根の千切りの味噌汁。おひたしと二切れの漬物に、輝くような白米。どれも出来たてで、暖かそうな蒸気が空中に舞っている。こんな和を体現したような定食なんていつぐらいに食ったものか……。日本に居ながらも、食べるものは和食からはかなり離れた生活をしているので、なんだか凄く新鮮に感じる。

意外とシアは日本食が好きなんだなあ、とか思ってしまう。外見はファンタジー世界の住人そのもので、一切、日本らしいポイントは無いのにも関わらず、好むのが日本食というのは何が基準で決められているかは俺には分からない。

一口ずつ全てに口を付けて見たが、やはり味の方も見た目通り、いや見た目以上に美味しい。

空腹も手伝って箸が進む中、先程の話の続きに戻る。

「魔紋で魔法が使えるようになるのは分かったけど、シアは確かもう一つ魔法使えたような気がするんだけど、それも魔紋の魔法なの？」

ヒールドロップ

「いえ、癒水は魔紋魔法ではなくて、私自身の魔法です。魔紋はあくまで補助的な物なので、習得して使うよりも消費は激しくなりま
すし、効果も少し落ちます」

あの威力で落ちた状態って事は、実際は相当威力があるんじゃないだろうか、とか思ったりもするが、確かに威力はそれなりにあったが効果時間については結構短い方だと思う。シアが四回ほどしか使えなかった事を考えれば、それが劣化した結果として妥当なのかも知れない。

説明を受けながらも、定食は滞る事も無くほとんど平らげつつあった。

魔紋という物は、言ってしまうえばお手軽な魔法だと思えばいいのだろうというのはわかったが、問題はその魔紋入りの道具等をどうやって手に入れるのか。

現段階で俺はレベルが五にもなつて、魔法の一つも覚えていない。魔法のアビリティは習得しているので覚えれば使えるし、習得して無いから覚えれないと言うことも無いだろう。アビリティを取ってから二レベルは上げているのだから。

なのでいつ覚える事が出来るのかわからない習得を待つよりは、魔法が使えるようになるという道具があるのならば、それに一度飛びついてみてもいいんじゃないかと思える。

「その魔紋入りの道具とかはどこで手に入れるんだ？」

「えーっと、そうですね。基本的には魔紋師と呼ばれる人達に頼むのが普通らしいです。それからあらかじめ魔紋が刻まれた道具類を購入するとかも基本的な入手手段ですね。値段は結構なものらしいですけど……。後は稀に魔物が落としたりもするそうです」

「なるほど……」

現実的に考えて俺が魔紋入りの道具を手に入れるためには、魔紋師に依頼するか、金を貯めて既存の魔紋入りの道具を買うか、その二つになるだろう。魔物のレアドロップに賭けるというのは正直、まだ早い気がする。

値段が相当なものだという魔紋入りを、魔物が低確率で落とすと言うことは、おそらく性能も普通に手に入るものよりも強力な物である可能性が高いし、それと比例してそのドロップする魔物自身も強力な可能性もある。今の強さでドロップするまでひたすらに戦うのは厳しいだろうし、どの魔物が落とすのかも分からない。むしろその過程で溜まったお金で既存の物を買った方が手っ取り早い可能性もある。

とはいえ、全体的な魔紋関係の相場が分からないので、あまりに

も手が届かないようならば、今回は諦めて地道に頑張るしか無いの
だか。

「魔紋を刻むのにはどのくらい掛かるかわかる？」

「それは……私の持つこれは貰い物で、私自身が刻んだわけでは無いので値段までは……。あとその刻む魔紋の質よっても結構な差があるみたいで、一概には言えないと思います……」

「そっか」

もう定食は完全に食べ終わっていた。米粒一つ残すのがもったいなくらいにうまくかったので、帰りにでもおじいちゃんとおばあちゃんにおいしかったと言いたいぐらい、気分が浮いていたが、肝心な事を忘れていた事に気付く。

そもそも朝食を取りながら今日の予定を話すはずだったのに、俺の好奇心から魔紋の説明だけでもう食べ終わってしまった。我ながら計画を立てて、それを無計画に潰すこの性格は何とかしないといけないかと思いつつも、今更どうにもならないので、少しここに居座らせてもらって今日の計画を立てることにしよう。とはいえ俺の興味は魔紋にしか向いてなかったのだけだ。

「すっかり忘れてたんだけど、今日これからどうしようか」

「えっ、魔紋の事を聞かれたかので、てっきり魔紋師のところに赴くものだと思ってたんですが……」

やっぱりそう思ってたのか……。とか思ってしまうが、どうせ他にどうしてもやりたい、なんて事も浮かばないので、そのまま魔紋師の場所を目指す事にするか。

「じゃあそうしようか。魔紋師ってどこに居るんだろう」

「街から少し離れた所に小さな町があるんです。そこに魔紋師達は

住んでるそうですよ」

「よし、じゃあ今日はそこに行ってみよう」

今日の行動方針も決まったので、席を立つ。二人してお盆を持ちカウンターへと差し出す。最初は普通にそのまま置いておこうとしたのだが、シアが立った後に盆を持ったので、に俺も持つ事にした。帰りにちゃんとカウンターの中に立つおじいちゃんと会計をするおばあちゃんに、美味しかったですと告げて、外へ出る。

その足で外へ出る門へと足を向けた。

魔紋師の下へ

門は前に見た時よりも開いており、多くの人々が行き交っていた。その中に紛れて外に出る。今思えば昼間に外出るのは初めてだったが、夜の時とはまた違った、開放感のある空間に妙に気分が高揚する。

門から少し歩き、行き交う人々の邪魔にならない辺りまで移動してから、隣を歩くシアに目的地を聞く。

「あの森の辺りに見える建物がそうです」

シアが指差す先には広大な森があり、その木々よりも少し高いせいか、人工物らしきものが頭だけを出している。何であんな所にあるんだろうとは思わないでもないが、今そんな事を考えていてもしょうがないので考えない事にしよう。

行き先が分かれば後はただ歩くだけだったが、夜の草原とは違い、目に見えてあちこちに魔物が徘徊していた。距離がありすぎて注視しても識別は出来なかったが、見た感じリザードマンほど強そうには思えない。

ゴブリンっぽいのが集団でいたり、スライムらしき半透明のぶよぶよした奴が跳ねながら草原を闊歩していたり、まさに最初の草原と言える魔物達ばかりだった。

最初は避けて通ろうかとも考えたのだが、目指すべき魔紋師達の住む場所までは結構な距離があり、敵を避けて迂回しながら進んでいたら日が暮れるんじゃないか、と言う結論に至ったので、真っ直ぐに敵をなぎ払っていく事にした。……こっそりとあの強烈に苦い薬草でも何個か買っておけばよかったとも思ったが、今更引き返すのも億劫なので、本当にやばくなったら引き返す事にして、今は猪の如く突き進むだけだった。

道中に戦った魔物を識別アビリティで見た限り、俺が思っていた通りスライムであったり、ゴブリンだった。

戦いになった時に俺は鉄の剣を抜いた。シアの記憶にあるのは赤錆びたような銅の剣だったので、すぐに疑問に思われた。昨日一人で夜この草原を歩いた事はあまり知られなくなかったので、レオンを使って誤魔化した。……後にばれそうだがその時はその時だ。

俺やシアのレベルではこの辺りの魔物は相手にもならず、^{ファイアチャ}火炎装填¹を掛けていなくとも、一刀の元に切り伏せる事ができた。もちろん楽に倒せるので、経験値は無いも等しい値しかもらえなかったが、数十分も草原を駆け回ると、ようやく建物を囲む森の入り口まで辿り着いた。

体力はそこそこに消費しているものの、傷や武器、防具の消耗もほとんど無かった。

うつそうと茂る森の中を注視するが、外から見えた建物の姿は木々に遮られて見る事が出来ない。しかし、この中にある事は確かなので、そのまま真っ直ぐ進めば着くだろうと考えて、そのままシアと共に森に足を踏み入れた。

真っ直ぐに、ただ真っ直ぐに歩けば着く、はずだった。

十分ほども歩いただろうか。そこまで経って違和感に気付く。

「なあ、シア……」

「……はい」

「なんか変じゃないか？　こんなに歩いて辿り着かないほど、外から見た時は離れて無かったぞ」

「そうですね……でもそんな、何かあるような話は聞いたこと無いですけど……」

シアがそう言った話を聞いた事が無いのならば、ここは本当に普通の森なのだろう。普段は、だが。

明らかに今は異常だ。方向感覚が狂っているとかそういうのではなく、延々と同じ所を歩かされているような、そんな感じがする。分かりやすく言うならば、この森が”迷いの森”になっているって事になる。

原因が定かではないが、何かしらの原因があるのは確かだ。そしてこのまま歩き続けてもおそらくは同じ事だろう。今まで取つてきた行動とは別の行動をすれば何か突破口が見えるかも知れない。

とはいえ、シアと別々に行動する訳にもいかないので、考えられるのは二つ。

木々に目印を付けていくか、焼き払うか。

後者は最終手段として取っておくとして、とりあえずは順当に、目印になる傷を木の幹に付けていき、ゆっくりと辺りを警戒しながら歩く。

再び同じくらいの時間を歩いた。メニュー画面の現実時間はこの世界の時間軸とはずれているが、何分経ったかの確認には使える。計りたい時の現実時間を見て記憶しておけば、その後見た時間から逆算して導き出せる。

おそらく合計で三十分も歩き通したが建物は見つからないし、辿り着きもしない。

そろそろ体の方も厳しくなってきた。肩で息するぐらいに疲れ、まるで体力がこの森に吸われているような錯覚すら覚えるほどだ。そして肝心な木に付けた傷。それをシアと二人で探す。

「……ありました！」

シアがそういうのでシアの目の前、調べていた木を見ると、確かに俺達が付けた矢印が刻まれていた。

矢印は進行方向に向けて刻んだので、今この木に刻まれている逆

向きの矢印は、俺達が逆に歩いている事を示している。

森が延々と続いていた訳でなく、俺達がどこかの地点で、気付かぬうちに反対を向かされて居たと言う事だ。

原因が分かれば、対処するのは実に簡単。

俺とシアは再び矢印の方向へ歩き出す。今度は木に刻んだ目印とは別の、地面に剣でを軽く刺してそのまま引きずるように歩いている。その結果、地面には歩いてきた方向、つまり俺達の後方に線が出来る。もし俺達が知らぬ間に反転しても、線ですぐに気付く事ができる。

多少は剣の耐久度も心配だったが、鉄の剣は後二本新品があるので、仮に壊れたりしても取り出すだけで万事解決だ。

そして少し歩くと、地面に描かれた線が気付くと目の前に、彼方まで延びている。

「ここだ」

さっきまでなら何も気付かずに、馬鹿みたいに来た道を戻る所だが、今回は反転する所をしっかりと見極める事が出来ている。そして正しい道へと歩を進めるために振り向く。

すると、突如空中が何も無いのに燃え上がり、やがて敵が現れる。即座に視線を合わせ、注視して識別する。

——迷わせのレイス。

その魔物の名前が即座に浮かび上がる。俺の識別アビリティはまだランク一なので、敵の名前、装備品しか見えない。名前しか浮かび上がらなかったと言う事は、装備品は何も無い状態という事になる。それは、敵の姿を見ただけでもすぐに分かる事なのだけだ。

突如現れたのは人を丸呑み出来そうなサイズの口を持つ、幽霊。

そうとしか表現できない。透けてはいないようだが、空中に風船のように浮かび、おぞましいほど大きな口を咀嚼でもするように動かし、口に比例した巨大な舌で、ご馳走を目の前にした動物のよう

に舌なめずりをしている。

ただのレイスではなく、二つ名的な物がついてる事から、普通の敵とは一線を越す存在だと言うのは分かる。その巨大さも相まって、威圧感と背筋が寒くなるような嫌悪感が凄まじい。

しかし、こいつがボスクラスなのは間違いなかった。

引きずっていた剣を軽く振って先端についてた土を払い、構える。……そういえば道中に敵が出なかったのは、こいつが居たからなのかもな。

そんな今更な思考も遮断し、目の前の敵の一挙一動に目を張る。

空気が鋭く刺すような緊張感に包まれる。下手をすると話の進行上まだ倒せない奴かもしれないが、とりあえずはやってみるしかない。

シアとの連携を取るために、視線を送ると、そこでシアの異変に気付いた。

剣すら構えず、怯えたように自分の体を抱いて後ずさる。視線はもちろんレイスへとしっかり固定されているのだが、倒すべき敵に向けるような目では無く、恐怖の大王でも見るかの如き恐れの目をしていた。まさか……。

俺の予感、その数秒後に発したシアの言葉で、当たっていた事を証明される。

「ひっ……お、おばけ……」

どうやら少しまずい事になっているようだった。

迷わせ幽霊

怯えているからといって、敵が情けを掛けてくれるはずもなく、レイスは真つ先にシアへと突進する。それを確認し、俺もまたシアの元へと駆ける。

距離と速さを考えるならば、俺の方が少し早かった。しかし、シアの元へと向かう途中で、はつきりと見えた。

あいつの舌が誰よりも先にシアを絡めとろうと伸びているのを。

右手の剣を握る。もし先に相手の舌がシアに触れようと、そこから一瞬の間も無く切りかければ大丈夫なはず。駆ける足に込めた力は緩む事は無い。

シアは突進するレイスに気がついていて、恐怖からか少しづつ後ずさるばかりで、ウルフリーダーと戦った時の繊細かつ大胆な、舞うような回避行動はその一片だって伺えない。

レイスの舌が一瞬はやくシアを絡め取る。短いシアの悲鳴が聞こえたが、俺は構わず、目標をその伸び切った舌に定め、剣を構える。斬っても良かったのだが、少しでも早く剣を届かせようと、選択したのは突き技『ストライク』。覚えたばかりの技だが、頭でイメージして動作を取ればそれがスキル発動の鍵になる。

そのままレイスの舌へと鉄の剣の鋭い切っ先が吸い込まれるように軌道を描き、突き刺さる。しっかりと手ごたえがあった。血はもちろん出ないが、レイスは拘束していたシアを離し、痛がるように空中で舌が暴れ回る。

俺はそのまま歩みを止めずにシアの元へ駆け寄る。

「大丈夫か！」

「あ……は、はい……すいません、ありがとございます……」
「戦えるか？」

俺の言葉にシアは力なく頷くが、その様子を見る限り戦えるような状態ではなく、俺が何とかしなければならぬ状況だった。

右手の剣を改めて握りなおし、レイスへと視線を向ける。俺が傷を付けた舌を完全に口に仕舞い込んで、空中に浮かぶ白い物体と化しているレイスに、俺は攻撃を仕掛ける。

五歩も歩けば届く距離にいる無防備なレイスに、今度は『スラッシュ』を叩き込む。

その攻撃は確実にレイスの体を捉える軌跡を描く。だが、レイスは避けるような素振りすら見せずに、ただ浮いたままだ。何かあるのか、と思う間も無く、レイスがその大きな口を歪んだ笑みに変えた。

確信する。だが今更攻撃を止めれるほどに余裕は無く、逆にこの勢いのまま斬る事で、強制的に相手の行動を阻害するしか俺の取れる道はなかった。

そして俺のスラッシュがレイスの体を、……通り抜けた。手応えも無く、ただ空を切っただけ。

剣を振るって気付かされたその違和感に、振るった直後の硬直の中、首だけを回しレイスを目で見て確認する。

傷は無い。本当に剣がすり抜けたのだとそれで確信できる。

幽霊っぽいからなのか、物理系は無効なのかもしれない。もちろんそれは外側に限って、だが。

さっきシアを捕らえた舌には確かに剣が通った。そしてそれを体内に仕舞い込んだ。そして外側は攻撃が通らない。弱点はすぐに導き出せた。

性質こそ違えど、基本的な攻略方法はウルフリーダーと何も変わらない。

レイスが、横目に捉えていた俺の硬直の隙を突いて、その舌を伸ばす。

俺はなす術も無く捕らえられ、締め付けられる。唾液と下の表面のざらざらした感覚が、体に寒気を走らせる。力を込めてもその拘

束を解く事は出来なくて、俺一人ではもうどうにもならず、ただ死を待つのみになる。

しかし。今この場に居るのはボスクラスの魔物である迷いのレイスと、駆け出し冒険者の二ヶだけじゃない。そしてその残る一人は俺の仲間だ。

幽霊型の魔物、レイスは甲高い悲鳴を上げる。俺を締め付けていた舌の力が無くなり、自力でもその舌の拘束から逃れる事が出来た。するりと抜け、右手の剣でさらに追撃をかけ、身を引く。隣に立つシアの持つ短刀には炎が宿っていた。

「大丈夫ですか！ すいません……私のせいで……」

どうやらシアはしっかりとお化けではなく、魔物だと認識すれば大丈夫なようだ。最初はインパクトが強すぎて、本物の幽霊だと思っ込んで恐怖したのだろう。

「いや……こっちは大丈夫。それより……」

鳴き叫びながらも、その弱点である舌を振り回し暴れているレイス。無差別に暴れるせいで無闇に近付こうものならば、たちまちその舌に弾き飛ばされるだろう。かなりの距離を取り、万が一に備えていつでも咄嗟の行動できるように構えておく。

すると突然あれだけ暴れ狂っていたレイスが、急に顔を下へ向けてその動きを止めた。

なんだ？ と思う間も無く、レイスがその顔を上げる。

おぞましいほど醜悪な顔で、その舌をまるで蛇のようにすばやく出し入れする。そしてその舌先がさつきとは違う事に気付く。

「なんだあれ……」

その舌先は二股に分かれていた。本当に蛇のように。

舌全体がピンク色だったのに、二股に分かれたと同時にその舌先の色が無くなっていた。

色彩の無い灰色。だが木々の隙間から入り込む日の光を反射して、その色は輝く。

レイスの行動パターンと形態が変化したのは、すぐに分かった。おそらく何度かヒットさせた攻撃でHPが規定値を下回り、その結果、レイスは第二形態へと変化した。

確かに形態変化はボスの専売特許だが……初期のボスとしては少し早すぎないか、とか悪態をつくが、レイスはそんなこっちの様子も気にも留めず、さつきよりも凶暴性が増した状態で、その舌先の鈍い輝きを俺達にぶつけるために振り回す。

レイスを中心に扇状に降られた舌をギリギリの所で、地面に伏せて避ける。シアは俺とは逆に、ウルフリーダー戦で見せた軽やかな跳躍で避けている。高速で自分の顔をレイスへと向け固定させる。

……見えてしまったのは不可抗力だと自分に言い聞かせる。

シアがそのままレイスに突っ込む。短刀を包む炎もそう長くは持たないために、今の内に出来る限り敵のHPを削っておきたいのだろう。炎を纏ったシアの短刀は、おそらく俺のただの鉄の剣よりも威力が稼げる。威力的には同等近いかもしれないが、そうなることや、はり攻撃スピアードで勝る短刀の方がダメージを稼げるのは明白で、短刀が炎を纏ってるうちは、出来る限りシアの攻撃チャンスを作るために、俺が援護に回る。

「シア！ 任せた！！」

俺がそう言つて地面から起き上がりながら、不安定な姿勢を無理矢理起こす為に地面を強く蹴り、振り子のように帰ってくるレイスの舌先に目掛けて、剣を振る。渾身の力を込めたスラッシュだ。ここまで三回のスキルを使つて、後どれくらい使えるかは分からない

が、感覚的に後一回は確実に使える。

遠心力によって威力が増大したレイスの硬質の舌先と、重心を前に倒して勢いを付加し、さらにスキルを使って力の底上げをした俺の剣とが、互いが吸い込まれるように引き合い、金属質の音を高らかに奏で接触する。

ぶつかり合っただけで、互いの力比べとはいかず、無様に剣を弾かれて吹き飛ばされる。体全体に響く衝撃とそれに伴う浮遊感。そして数秒後に訪れた接地の瞬間、視界が回る。

揺れる意識を引き戻し、すぐに状況の把握に努める。

俺がレイスの舌を止められなかった事で、シアがやられると言う事は無く、レイスの悲鳴が響く。シアがしっかりとその炎の短刀で何度か攻撃を与えたようだ。再び暴れまわるレイスからシアはすぐに離れる。俺の方へと視線を向けて心配そうな顔をするが、俺も黙って地面に転がってる訳にはいけないので、大丈夫だ、と手振りで示し立ち上がる。

俺の手に剣は無い。さっきの激突でどこかに飛ばされたようだ。今はそれを探す暇は無い。

すばやくメニューを開き、アイテム欄から鉄の剣を選択して装備する。

その瞬間腰には新たな重みが現れ、それとほぼ同時に剣を抜き、走り出す。

暴れ終わりに合わせて突っ込んだ俺に、レイスが気が付いた時には、もうその長い舌を振り回す余裕すら無いほどに接近している。そのまま舌の根元に斬りかかろうとしたが、剣は勢いのまま地面へと刺さる。

簡単な話だった。ただレイスが後方へとその体を動かしただけ。

RPGでだって敵は攻撃を避ける。そんな事すら頭から抜け落ちていた俺に、レイスは大きな口を開き、そのまま飲み込もうとする。俺は未だに攻撃の硬直で動けない。このまま行けば間違いなく食われる。

口の中は何も無い真っ黒な空間になっていて、その闇の中から舌が現れている。ここに飲み込まれたらどうなるかはわからないが、正直嫌な感じがする。こんな序盤からまさか、とは思うが、ある一つの特性を持つ攻撃をその空間は予感させる。

——即死攻撃。

食らったら最後。ただ死ぬしかない絶対の攻撃。

普通は滅多に見ないような攻撃だが、たまにその即死攻撃を持つ敵がいるのは特別珍しい事じゃない。ましてやボスクラスになれば、これだけは気をつけないと全滅の可能性がある、なんて攻撃を持っていたっておかしくは無い。さらにHPも相当削れている状態の事なら尚更だ。

その時、目の前に影が通る。シアじゃない。それよりももっと小さく細長い……。

レイスの大口に、そのまま俺の代わりに吸い込まれたそれは、一瞬の事だったが確かにその存在の正体が分かった。俺の手元にあるものと同じ、……鉄の剣。

それがさっき弾き飛ばされたものだというのは分かった。

視線を一瞬だけレイスから外すと、シアが投擲した直後の動作をしていた。その顔にはほっとした様な表情が浮かび、笑顔だった。まるで当たって良かったとも言うように。……あれ、俺に当たっていたらどうなってたんだろう。

剣を飲み込み、苦しむレイスが暴れようと舌を振り回す直前、かなりの距離まで接近済みの俺は改めて剣を構えて、上から下へ、舌の根元に向け剣を振り下ろした。もちろんスキルのスラッシュで威力の増幅は忘れない。

「……じゃあな」

ぱつさりと根元から切れた舌が地面に落ち、レイスは悲痛な叫びを一際強く短く鳴いた後、力なく地面に落下する。

それは迷いのレースのHPがなくなった事。そして、俺達が勝利した事を示した。

魔紋師の少女

人一人分の高さがある白い球体、もといレイスの死体をポーチへと仕舞い込む。最初はこんなに入るのか、と思ったが、そこはゲームらしく何の不都合も無くすんなりと収まる。

アイテム欄で見てもしつかりとその名前が表示されている。

ついでにレベルも一つ上がり、六になった。スキルは何も覚えなかったが、そういう時もあるだろうと少し残念だが納得しておく。

そして、ある事に気が付く。

レイスが居た所、つまりレイスの死体が落ちた所に、光を反射し輝く物が落ちていた。

手の平からすこしはみ出す位の大きさの紫色をしていて、向こうが若干透けて見える程度の透明度と、どこか見え覚えのあるその形。

「これって……」

その欠片を試しにポーチへ放り込んで、すぐにメニューを開いてある一点に目をやる。メニューの端にある、意味ありげなアイコンの表記がある所へと。

そこには今までゼロだったのが、一という表記になっていた。これが示すのは一つ事実しかない。

王様が言った星の命の欠片。俺がこの世界で探し、集めるべき唯一つの目標。いくつあるかはまだ定かではないが、そのうちの一片が、いま手に入った。

これが迷いノレイスのドロップである事は間違いない。

その変動した数字を眺めながら、まだ続く道程と確かに一歩進んだ事実を噛み締める。

「どうかしたんですか？」

シアが俺の行動に疑問を抱く。それもそうだ。他人から見れば何も無い空中を眺めて、うすら笑う変人にしか見えない。だがシアはすくなくとも俺にそういった感情は幸いにも抱いていないようで、ただ純粹に疑問に思ったただけだろう。

「いや、なんでもないよ。ただ、なんでこんな所にあんなのがいたのか考えていたんだ」

口から出任せだが、実際気になる事の一つではある。

迷いのレイスは二つ名が付いていた。それがただ強いボスクラスを表すのか、欠片持ちの魔物を指すのかははっきりとはしないが、その名の通りに俺達をこの森に仕掛けたトラップで迷わせた。

魔物達が独自の思考を持っているのは、リザードマン戦などで痛感しているので、レイスにも独自の思考があり、その結果ここを通る人間を迷わせていた、というのは納得出来る。それが何故なのかは、今の俺には知る術が無いが、その事から浮かぶ疑問が一つある。

俺達が目指していた魔紋師達の住む所は、レイスに惑わされなければものの数分で辿り着くぐらいの距離のはずだ。もちろんそこに住む人達はこの道を行き来するはずなのに、街でそんな噂は聞かなかったし、今朝宿で会った女の子は届けに来た、と言っていたから、状況から考えてこの先の街から、今日、品物を届けるためにこの道を使っただけだ。様子がおかしい事もなかったし、俺が見抜けなかったただけとしても、先にここへ戻るはずの女の子とは森の入り口でも道中でも会わなかった。

もしかしたらまだ戻っていないという可能性もあるだろう。その場合は、行きはよいよい、帰りはこわい、みたいな事になっていたのかも知れない。

「本当、なんだったんでしょね……。最近魔物の活性化が進んで

るって聞きましたし、そのせいかも知れませんか。これからをもっと用心しないと……」

「そういえばそんな事も聞いたな。まあ、どちらにしろ俺達に出来る一番いい方法は強くなる事だ。状況次第だが、もし魔紋が刻めれば俺も少しは強くなれると思うし、先を急ごう。迷ったおかげで時間も食ったし……」

「そうですね、行きましょう。あ、ニケさん怪我とかは大丈夫ですか？ 回復していかないと何があるか……」

「俺は大丈夫だ。そんなに気にするほどじゃないさ」

「そうですね…… ならいいんですけど……」

シアの心配を他所に俺は歩き出す。実際の所、HPは半分以上を保っている。

それに、迷わされていたとはいえ、街まで実際に必要な距離の半分以上を使っていた迷いのトラップが、もう今は存在しないというのならば、少し歩けば敵に出会う前に街に辿り着いたってなんら不思議じゃない。

だけど、目の前に現れた光景には少し拍子抜けさせられる。

魔紋という少し禍々しい響きを持つ、そんな不可思議なものを刻む事が出来る人達が住む街。そのせいで少しはダークな雰囲気を想像していた。森に囲まれ、まるで外の人を拒絶している、なんて状態も少しは手伝っていただろう。

だが目の前に現れたのは最初の街、フィルストと同じぐらい、いやそれ以上に活気のあるまさに職人の街だった。

あちこちで職人気質な方々の怒号が飛び、その度に、その声に弾かれるように声が返る。 師匠と弟子。その関係がありありと見て取れた。

あちらこちらで金属を叩く音が響き、やかましいぐらいだった。その立地条件や話に聞く分で半ば分かっていた事だったが、どうやらこの街には受け入れるといった意思は無いようで、大きな門も

無ければ、街の入り口を示す装飾すら一切無い。

ただそこにたまたま人が集まっている、とでも言いたげな整合性の無い雑多な街。

「あれ？ アンタは朝の……」

その声に振り返ると、後ろには今朝、宿で一騒動起していた女の子が、こつちを不思議そうに見ていた。

「君は……」

「私はトツネ。ここにいてるって事は魔紋関係でなんか訳あり？」

「ん……ちよつと試して見ようかと。まあ、様子見程度に」

「……そつか。じゃあ私の店に来なよ。これも何かの縁だ、付いて来て」

それだけを言うとトツネは歩き出す。なんだか押されてしまったが今更断るわけにもいかないし、そもそも目的は魔紋をより知って、あわよくば刻んでもらって戦力強化を図る事だ。

話を聞くだけでも損は無いだろう。そう思って隣のシアが戸惑った顔でこつちを見ていたので、軽く頷いて俺の意思を示し、先を歩くトツネに置いて行かれない様に歩き始めた。

大きな通りから外れて裏の路地を歩く。日も当たらず冷え切った薄暗い路地裏は、陰鬱な気分させる。

しかし前を歩くトツネは一切を気にせずに軽快に進んでいく。後ろにはシアが俺に付いてきて、実質、女の子達に狭い路地裏で鉢まれる形になってしまっていた。

何をするでもないが、現実ではまずありえないシュチュエーシヨ

ンなうえに、外見は二人ともかなり可愛い部類に入るので、少なからず意識をしてしまう。

そんな俺の思考は無事二人に読み取られる事も無く、街の入り口から五分で目的地に辿り着く。

そこはどこかの家の裏で、トツネは止まる事無く壁にある扉を開き、中から手招きする。

ここはトツネの家の裏口のようなだった。

「ごめんね。表だと色々と厄介だから」

そんな事を言われたが、俺はともかく、シアも大して気にした様子も無く、むしろ普通じゃありえない対応に楽しそうな表情を浮かべている始末だ。

家に入るとそこは二つに分かれていた。壁によって区切られていたとかではなく、全く異質の空間同士が無理矢理くつつけられた様な、そんな光景。

片方は店の裏側と言うしか無いような空間。注文を受けたりするカウンターがあつて、その下の、外側から見えない位置には色々と雑多に置かれている。その他には魔紋を刻んだ既製品だろうか、金属の鎧や槍などの武具が並んでいた。

そんないかにも魔紋を扱う店のような風貌とは反対の、俺達がいるのがおそらく居住スペースなのだろう、木の温かみを感じられる白めの木造で、一本足の丸テーブルと、トツネが座り、あと二つの空きがある椅子も木製だ。

丁度店の外側からは見えない位置に居住スペースはあり、そこはしっかりと考えられているようだった。

今はまだお客さんもないようだったが、今トツネが帰ってくるまではどうしてたんだろう、とか考えてしまうが、俺に答えが出る訳も無く、空いている木の椅子に俺とシアはそれぞれ腰掛ける。

「それで？　なんか聞きたいことはある？」

テーブルに両肘を置き、手は組んであごの下にして、どこか嘘くさい笑顔を顔に貼り付けて、そんな事を言うトツネに何だか嫌な気配を感じて、俺は待った区別の話題を振るという手段で様子を見る事にする。

「その前に聴きたい事があるんだけど、今朝ここに来る途中の森の中で変なのに出会わなかった？」

「変なの？なんだそれ。見てないぞ。そんな事より……」

「いや白い丸い幽霊みたいな奴を……」

「知らないよ。そんなのがいたら皆の噂にもなるし、第一それって魔物だろう？ 逆に皆競って倒しにいくと思うよ。それより……」

やっぱりあのレイスの存在は誰も知らなかった。それならば
 何で俺達を通った時だけ反応したんだ……？

この町の人々に無くて、俺達にはあるもの……。何だかなぞなぞのような問い掛けだが、実際問題そうなのだから仕方ない。

しかしいくら頭を捻ろうとも答えが出ない。どうしたものか
 と思っていると突然ツネが音を立てて椅子から立ち上がった。

何かと思う間も無く、トツネはその声を張り上げる。普段から声を出しているのか、耳を塞ぎいでしまうほどの大音量だった。

「話を聞けえええええええ！」

それは耳を塞いでいてもはつきりと聞こえた。叫び終えて肩で息をするトツネは俺を睨んでくる。シアは突然の事で、まるで雷に怯える子供のように瞼をきつく閉じ、耳に手を当てて震えてる。

「なんだよ、急に！」

俺の抗議の声にトツネは一層その剣幕を強くし、拳句その身を乗り出して顔が触れそうなほどにまで近づけて、それから俺の問いに怒気を帯びた声で答える。

「あんた達、魔紋の事知りたかったんじゃないの!? いきなり変な魔物の話なんかしちゃってさ、聞く気あるの?」

「あ、ああ……ごめん」

俺がそう言っても、トツネは少しの間近づけた顔を離す事無く、不満そうな顔でいたが、やがて諦めたように再び椅子に腰掛ける。

「えっと……魔紋を刻むのにどのくらい掛かるのか、ちょっと相場を聞いてみたくて……」

俺がそう言うとうとうやくトツネはその不満そうな顔を引っ込めて、改めて顎の手をやり話し始める。

「相場、ねえ……。魔紋の種類とそれを刻む物次第でかなり差は出てくるけど、本当にしょぼいもので三千、最高級なものなら二十万とかかなあ」

価格の差が凄まじいのに驚いたが、よく考えれば現実世界でも楽器なんかは物の質によってその価格の差は激しい。そう考えると何だか納得出来る気がした。

トツネの言った最低限のものならば今の手持ちでも出来るが、本当にしょぼいとまで言われると、なんだかそれで妥協すると損をするような気がする。

とはいえその付加される魔法の効果にもよるので、詳しいこ

とを聞かなければ一概に答えは出せない。

「その低めな所は具体的にはどんなのがあるんだ？」

「うーんと、単調な音を鳴らすだとか、剣先に指ぐらいの火を灯すとか、そんなしょぼいのばかりだよ。つける人はまずいないね」

正直もう少し使えるようなものだと思っていたが、どうやら値段が低いほど子供騙しのようなものしかないようだ。となるともう少し高めのものでないと、ただ記念に刻んだ程度のもものになってしまう。懐に余裕があるならそれでもいいが、生憎と駆け出しの懐はそんなに暖かくない。

「……実用レベルの物となるとどのくらいからだろう？」

「ああ、あんたら冒険者だったね。それなら……うん、大体一万ちよつとぐらいかな。まあそれでも『ライティング照明』とか『フローティング浮遊』のサポート系だけだね。冒険者なら持ってた方が役立つでしょ？」

確かにそういったサポート系の魔法は各地を回る際には必須のものだろう。様々な障害もそれに対応する魔法で突破する、なんて事もあるかもしれない。これから冒険者としてやっていくにはあって困るものではない。しかしそれだけ便利なものが実践で使うものよりも安い値段なのは、やはりプレイヤーへの配慮なのだろうか。まあ、どちらにしろ今の俺達にとって一万を超えるものは高級なものである。とてもじゃないが手を出せない。

「うーん、そうか……。欲しいものではあつたけど、今の俺達には手が届きそうに無いな。また今度、改めて来させてもらおうよ」

そう言つて俺は椅子から立ち上がる。大体の情報は手に入れたし、元から手が届きそうも無ければ取りやめる予定だったん

だ、今更ここで値切りの交渉もどこかみつともないような気がして、同じく席を立ったシアと共に入ってきた裏口から外へ向かう。

そんな俺たちの背中にトツネは声を掛けてきた。よく聞き取れず最初は別れの挨拶だと思ったが、振り返ってその顔を見ると、どこか悲しそうな表情で、ただ立ち尽くしていた。

そのあまりにも予想外なトツネの姿に俺は固まり、つい声を掛けてしまう。

「どうしたんだ……？」

「あ、……いや、その……」

どこか歯切れの悪いトツネを見ると、何か言いたげな事があるのだとすぐに分かるのだが、少し舞っても中々口を開かないので仕方なくこちらから声を掛ける。どちらにしる、そんな顔で見送られたら、ずっと気になって気持ちが落ち着かなくなるのは分かっている。

「言いたい事があるんだろ？」

「………う、うん」

ようやく絞り出された声に、俺再び椅子に座る。シアは俺が座った後にその意味を理解したようで、慌てて戻ってきて椅子に座った。

その様子を見てからようやく立ち尽くしていたトツネも椅子に座り、話し始める。

「………本来掛かる魔紋刻費を半分にしてあげる」

「………そして、その裏とは？」

そんなうまい話がタダで転がってる訳が無い。それにそれを

最初から言わずにいた事も、口籠っていた事もあつてますますその真意が怪しい。

そもそも宿で少し会っただけの人間を、たまたま再会したからって家にまで連れてくる必要は無いはずだ。その上での話なのだから裏が無い方がおかしいと思うのも普通のはずだ。

「……………手伝って欲しい事があるんだ。それを無事終えることが出来たら、その報酬として半分の費用で刻んでもいい。安心して、腕は確かだから、アメノの名に賭けて」

そう言ったトツネの顔は真剣で、信じるに値するようなもののような気がした。それでも自分の実力が低いのは自覚しているので、無理そうならばおいしい話ではあるものの、断る事も考えていないと駄目だ。

「とりあえず、話だけでも聞かせてくれるか？」

「……ああ、……なるべくすぐ必要な鉱石があるんだ」

「それを取って来い？」

普通に考えるならばそんな所だろう。いわゆるおつかいイベントだ。それなりの物しか手に入らないのに労力が見合わないものが多い印象のイベントだが、今回はその報酬が先に提示されている。だから報酬はいいものだと分かるが、問題はその対価、鉱石を取りに行くとなるとやはりダンジョン的な所に行かねばならないだろう。しかしレベルがレベルだ。その雑魚ですら倒せないほどの高難易度だと今は手も足も出ない。

俺の言葉にトツネは予想外な言葉を返す。もつともいい方向での裏切りだが。

「違う違う。元々私の父さんといつも行ってる所なんだけど、父さ

んが仕事で行けなくなっちゃって、私一人だとちょっと荷が重いから、その護衛って所」

「なるほど。それなら何とかなりそうだけど、護衛って事はそこに魔物とかが出るって事になると思うんだが……」

「ああ、出るけど大した奴はいないよ、雑魚ばかり。でも数が多くてね、万が一って事もあるし」

「ならいいんだが……」

やっぱり話を聞けば聞くほどにうますぎる話だとは思う。だけどその報酬は今の俺にはとても魅力的で、掛けて見る価値はあるかも知れない。

少し悩んで、シアの方へ目線送る。どのみち俺一人では受ける気はさらさら無い。シアが領かなければ、俺はこのまま何も聞かなかった事にして帰るのだが、シアは俺の視線に気付くと軽く頷いた。それを確認してから俺はトツネに向き直り、真っ直ぐとその視線を目と合わせ、右手を差し出し、言った。

「わかった。受けよう」

俺のその言葉にトツネは表情を明るくし、俺の差し出した手に被せるように右手を差し出し、固く握った。それは口約束のようなものだが、しっかりと報酬が用意された依頼でもある。

その成約によって俺達はトツネを依頼者として、従う必要があるだろう。まあ、当然の事だが。

「それじゃあ、なるべくすぐに……、今日の日が落ちるまでは終わらせたいんだけど、そっちの準備はどう？」

「こっちは問題ないけど……、そうだな、強いて言うなら万全な体制を整えるのために、道具屋かなんかががあると助かるんだけど……」

実際、回復アイテムの類は皆無に等しく、レース戦での負傷によつてHPも減っている。見知らぬダンジョンに突入するのなら、HPは満タンで、アイテムも潤沢でないと行く気すら起きないのは、きつと俺が過剰な心配性だからだろう。特別今に限った事でなくゲームでは毎回こんな感じで進めるために、ゲームオーバー画面に遭遇することはほとんど無く、その代わりにプレイ時間が以上に増大する。つまり慎重すぎるプレイスタイル——友人にはチキンとか言われたが——な訳だ。

「ああ、そういうのを揃えるならここから通りに出ればすぐに見つかるよ」

「わかった。すぐ済むと思うから、申し訳ないけど待っててもらえるかな」

「それくらい大丈夫だよ。私も万全にしてもらえると安心できるし……つと、あんたら武器を少し貸してくれるかい？」

「え……、なんで？」

突然のトツネの言葉に俺は戸惑い、家の裏側、つまり入ってきた方から出ようとしていた足を止めた。

正直言つて、そこらの道具屋に行くのでも何があるか分からないため、武器を手放したくないという気持ちがある。

俺のそんな疑いを感じ取ったのか、トツネは慌てて付け足した。

「ああ、その武器結構使ってるだろう。直してあげるよ。これは今回受けてくれたサービスみたいなもの」

「魔紋師なのにそんな事出来るんですか……？」

トツネの言葉にシアが反応した。

普段はあまり喋らないシアでも反応するほどの何かが、トツネの言葉に含まれていたのだらう。俺には何の事か分からないので、黙

つてその顛末を見守る。

「私は魔紋と鍛冶の両方を生業にしてるの。厳密に言うならその二つが混ざったうちの家特有のものなんだけどね。そのおかげでこの店『一目連』が成り立ってるようなもんさ」

「はあ……」

そう自慢げに言うトツネを見ると、悪い人ではないのかなとも思えてくるから不思議だ。それは純粹にその事を語るトツネの目が輝いていたからだろうか。なにせよトツネは見知らぬ人よりは信用できる気がした。

「それじゃあ、これ。お願いするよ」

俺はその腰にある鉄の剣を皮鞘ごとトツネに手渡す。それにならってシアもスカートの中から白い肌の足を覗かせながらも、短刀を取り出してトツネに手渡す。

二人の渡した剣をトツネは受け取り、軽々と持つ。

「任せて、買い物から帰る頃には終わらせるから」

「ああ、頼む。それじゃあ行つて来る。ほらシア、行くぞ」

「は、はい！」

そして俺達はトツネに見送られながら、裏口から外へと出た。

道具屋での出来事

トツネの店『一目連』を裏口から出て、案内された裏路地を通り、再び街の迎え入れる気のない質素な入り口へと戻ってきた。相も変わらず怒鳴り声が飛び交う通りを、今度はシアと二人、並んで歩いていく。

通りは見通しはよく向こう側の街の外まで、一直線で繋がっていた。

その通りの中で道具屋を探す。トツネが言ったのは見れば分かるという言葉だけだ。具体的な場所は教えてもらっていないが……確かに、通りに目を向けていればすぐ分かる。

数ある店構え——おそらくほとんどは魔紋や鍛冶の店——すら霞むような、一回りも二回りも大きい建物で、道具屋を示すマークがあしらわれた看板が、建物の大きさに比例して大きくその存在をアピールしていた。

「確かに見てすぐ分かるな、こりゃ……」

「ははは……そう、ですねー」

シアはどことなく苦笑いを浮かべながら、俺の意見に同意する。

怒声と甲高い音の響く通りを歩き、その道具屋の前までやって来る。建物は赤暗い色で、汚れなどが窺える事から、相当年季の入ったレンガ造りなのだろうと予想がつく。扉は木製で黒鉄で補強され、取っ手も黒鉄の環だ。どうもこの世界はこういう扉の造りが多く、宿屋『哭椿』の扉もこのタイプだった。まあ、世界観からすれば、さして違和感のない扉なのだが、やはり俺はドアノブを下げたり、回す方に慣れてしまっているせいか、違和感が拭えない。

微妙に不器用になりながらも道具屋の扉を開ける。

そこに広がるのは雑多で視界全てが埋まってしまうような品物の数々。よく見ると薬草などのＨＰ回復系だと思われるアイテムが、一まとめに整理され置いてあり、他にも見ただけである程度、使い方が連想できるようなアイテムから、何だこれ？ と首を傾げてしまうような謎のアイテムもあった。

言うなればそこは宝箱だ。未知のアイテムが溢れる箱。

俺がＲＰＧをプレイしていて楽しい事はたくさんあるが、そのうちの一つとして未知のものと遭遇がある。アイテムや人、イベントに限らず、土地や敵に至るまで、自分の知らないものがそこにある。そしてそれを知る事が楽しいのだ。……確か、こういうのを知識欲とでも言うのだったか、まあ俺の場合は本やゲームなんか限定の事なのだけど。

元々このＶＲゲームに手を出したのもそんな興味からだった。木製の棚やテーブルに置かれたアイテム達に囲まれた空間は、はたから眺めている視点でプレイする普通のゲームと違い、その数によって圧迫されているような錯覚すら覚えるほどで、それを見て触れると思うと、胸が躍った。

そんな俺を正気に戻すのは、若い女性の声。

「いらっしやい。ゆっくり見て行つて頂戴」

その空間、扉を入った正面に、店の中央を陣取る机を挟んだ向こう側、カウンターで木製の揺り椅子に座つて優雅にそこにいる女性は、この道具屋の店主だとすぐに分かる落ち着き払った対応で迎えてくれた。

金色の長い髪に、妖艶な雰囲気漂わせるその女性は、それ以上何も言わず、ただただ椅子に揺られていた。

今思えばこの世界の道具屋というものに入つたのはこれが初めてだ。だからこここまで感慨深いものを感じてしまったのかも知れない。

しかしいつまでも自分の世界に浸っている訳にもいかない。

トツネに武器の修理を頼んでいるから、多少は時間が掛かっても大丈夫だと思うが、それでも今日中には終わらせないといけない依頼だ。道のりに掛かる時間もまだ分らないし、道具を買うぐらいであまり時間をかけてもいられない。じっくり見るのは時間がある時にすればいい。

そう思い、俺とシアはその道具屋へと踏み入り、様々なものにざっと目を通して、必要になりそうなものを揃えていく。

手にしたのは回復アイテム。薬草より回復する上位のHP回復アイテムである、薬瓶を五個、念のためにMPを回復するアイテムである星の実、というアイテムを二個手に取る。

薬瓶は、薬草から絞り汁を取り、そこに幾つかの薬実という物を混ぜて作られた物らしい。不純物を取り除き、より薬草の効果を高めたもので、手の平に収まるほどの小瓶に入っている。見た目は力キ氷にかけるメロンのシロップのような感じ、だと第一印象に思ってしまった。

星の実とはMP回復のアイテムだ。薬草と同じように効果のある自然物をそのまま持ってきたのだろう。球体に棘が付いた様な形をしていて、言うなれば金平糖が大きくなったような印象を受けた。しかしその大きさは金平糖を二つほど並べたぐらいの直径で、シアでも一口でいけるだろう、というぐらいの大きさにしか過ぎない。そして星の実の名に違わず、店内を照らす照明に一つ摘まんでかざすと、逆光によって黒い星の形を取る。だからこそ星の実なのだろう。

これらの説明が分かるのも、ひとえに説明画面が表示されるからだ。物に触れながら何なんだろう、これ？　とか思っている所に、説明画面が何の予兆もなく現れた時は、思わず声を出してしまつて、シアと店主に何事かと視線を向けられたものだ。少々きつかった……。

そのおかげで俺はシアにいちいち尋ねる事もなく、スムーズ

にアイテムの知識を得ながら買い物を済ませる事が出来た。VRゲームとして入り込んでいる人にとっては興醒めだ、なんて言われてしまいかも知れないが、大半の人はこの親切設計を喜ぶだろう。

それらの商品を抱え、女店主のいるカウンターへ置く。それに気付いて女店主は揺り椅子から体を起こし、カウンターの机に体を預ける。その際にその豊満な胸がより強調された気がするが、見ないように努めながら、ポーチへと手を入れる。

女店主は手早くその商品を目で追って数え、すぐにその合計を弾き出す。

「全部で千五百^{クロム}Cだね」

「あ、はい」

俺はポーチから手を抜きながら千五百のCを取り出すように思考する。それでポーチから引き抜かれた手には、丁度それだけのCが握られる仕組みになっている。それでもう残りの資金はかなり心許なくなるが、まだ換金していない死体もある。ここにくる時の二つ名持ちの魔物であるレイスの死体も、どのくらいになるかは分からないが、少なくとも普通の魔物よりは高くなるだろうとは思う。そう考えればここでの多少の出費はマイナスにはならない。

俺はしっかりとCを握った手をカウンターへ差し出し、そのCを置いた。お札が一枚と金貨が五枚。千五百ピツタリだ。

女店主はそれを丁寧に確認し、間違いなくある事を確かめると、笑顔で、毎度あり、と言うのだった。それはその大人びた顔にしては可愛らしいもので、少し惹かれるものもないとは言えないのだが、今は隣にシアもいるのであるべく表情からそれを悟らせないようにして、俺も笑顔で返すのだった。

「あなた達冒険者でしょ？ それだけ買って行くって事は、坑道での護衛かしら？」

「えつと、どうなんでしょう？　場所こそ聞いてないんですけど、護衛はしますね」

あっさりと依頼内容を喋るのもどうかと思ったが、この街でこれだけ大きな道具屋で、トツネもこの場所を教えてくれたし、利用もしているだろうから、この女店主とも知り合いだと勝手に決め付けて良しとしおく。

「うーん、まあここで護衛の依頼ならまず坑道だとは思っけど……本当にあなた達だけで行くのかしら？」

女店主はそんな意味深な事を言うので、俺は何を言いたいのか、をその表情から探ろうとするが、そこにあるのは疑問の色と不安の色だ。

「どういう事です？」

「最近魔物が活性化しているって話は聞いたかも知れないけど、その波がここまで来てね、坑道に棲む魔物も少し凶暴化してるのよ。それでこの前、この街全体でその坑道への町民の出入りを一時禁止にして、クリーチャーズコレクションCCにその魔物達の掃討を依頼していたんだけど、やっぱりいくらやってもきりがなくてね。仕方ないから鉱石を掘りに行く際には護衛をつけるように、って事で収まっちゃったのよ。だからそんな所にあなた達のような護衛だけを連れて行くってのが、どうにも腑に落ちなくてねえ」

「それは私達がその魔物に勝てない、という前提で話をされますけど、何故なんですか？」

その話はこの街の背景を知る事が出来て、聞いて得をした気分なのだが、あからさまに魔物より弱いと見られると少し頭にくるものもなくてはならない。

確かに駆け出しだが、ここに来るまでにそれなりの戦闘経験も積んだし、シアとの戦闘連携も結構なものだとは思う。本当の最初に比べれば随分と様にはなっていると思っていた。だからこそ、そんな少しばかり伸びた鼻っ柱を叩かれると、やっぱりきつめの言葉が出てしまう。

女店主もそれが分かっているはずだ。その表情から余裕は消えず、なお変わらない表情で、俺を諭すように優しく俺の言葉に答えた。

「私も長い事ここで仕事してるからね。人は星の数ほど見てきた。この街に住む人達、魔紋師や鍛冶を目当てに来て、そのついでに寄る冒険者達。話もたくさん聞いたわ。だから、そうね。言うならばそうだった経験から来る法則性かしら。私の目で見ると、あなた達がまだまだひよっ子なのは手に取るように分かるわ。だからこそこうして話しているの、これがあなたのした質問の答えだけど、如何かしら？」

完敗だった。俺はそれを示すために両手を軽く挙げて降参のポーズを取る。

「自分が間違っていたと思った時に、素直にそれを認めれるのは良い事よ。あなたは大成するわね」

「それも経験から来る法則ですか？」

「いえ、……女の勘よ」

少しばかり女性の恐怖というものを再認識した気がする。

シアは大人しいし、妹は馬鹿で騒がしいが、俺が上なので気にする事も無い。母親は俺が家事をして、バイトもしてるのであまり文句を言うことはない。もっとも彼女がどうか、そういう話は持ち出すが……。

そこまで考えて俺は思考を止める。折角のVR世界を楽しむ時間を現実の事で無駄にするのはもったいない。それにこの世界での時間もあまりない。

少々世間話にしては長話をしたかと思い、俺はシアに目を配る。いわゆる助け舟を出し欲しい、の合図だ。

シアは俺の意図に気付いてくれたようで、今まで一切口を出さなかったが、おずおずと前へ出てきて俺の隣に來ると、女店主に不器用ながら話しかける。

「……すいません、そろそろ……時間なので……」

「ああ、そうね。店主と客の立ち話にしては長く話し込んでしまったわ。それじゃあお二人さん、気をつけてね」

「はい、ありがとうございます」

俺はカウンターの商品をポーチへと流し込み、女店主に礼をする。そしてそのまま店を出ようと、扉に手をかけたところで、不意に女店主の綺麗な声を掛けられる。

「坊や！」

俺は何事かと思いながらも振り返る。後ろを付き慕うように歩くシアも同じく女店主の方を見る。俺とシアの視線を集めた女店主は不適に笑い、何かを投げた。

それを慌ててなんとかキャッチし見ると、それは星が付いたヘアピンだった。その形状はまるで流れ星のようで、なんというかシアに似合いそうだった。

「まだ名乗ってなかったわ、私はニア。それは饞別。死なないようにね？」

「ニケ、です。ありがとうございます。またいずれ」

「し、シアです！」

慌てふためきながら、しっかりと名乗ったシアを俺とニアさんは軽く笑い、一度視線を合わせれば、もう何も言うことはなく、ただその道具屋を後にするだけだった。

外に出て、職人たちの怒声が飛び交う通りに出る。そして後から出てきたシアが、道具屋の扉を閉めたところで、俺はそのシアの頭にそのヘアピンを付けてやる。

「動くなよー」

シアは何事かと慌てていたが、俺がそう言っているとピタリと動きを止める。そしてそのヘアピンをつけたシアの姿を遠くから眺めて、頷く。

中々に似合っている。俺の間は間違ってはいなかった訳だ。シアはゆっくりと頭に手を伸ばし、探るようにそのヘアピンに触る。

「なに、したんですか……？」

「ヘアピン。似合ってる、可愛いぞ」

俺がそう言いとシアは顔を真っ赤にして俯いてしまいが、それが何だか面白くて、敢えて俺はシアを置き去りにしようと走り出す。

「時間ないぞー！ 急げー！」

実を言うと俺も少し恥ずかしかったりもした。こんな事を現実とするなんかまずないからだ。だからこの追いかけても恥ずかしさを誤魔化し、気持ちを落ち着かせるためのものでしかない。ま

だ時間は昼前だ。無理に急ぐこともない。それでも走った。

昼前の双子

「トツネ、戻ったぞー」

迷わないように近道しようとはせずに、同じ道を通って『一目連』へと戻ってきた。

念の為に裏口の扉を数回叩き、中にいるはずのトツネに確認を取ってから、中へと入る。

そこに待ち受けていたトツネの手には、買い物に行く前に俺とシアが手渡した二つの武器が収まっていた。それを入れて早々に手渡される。

「無事に終わったよ。確認してみな」

自信満々な表情を浮かべたトツネにそう言われて、俺は皮鞘に納まった鉄の剣を抜いた。そこには光り輝く、新品のような鉄の剣が、少し変わった状態であった。

シアも俺と同様にその短刀を手にとって、物珍しそうに様々な角度から眺めていた。

「これは……」

「いやー、直すだけって言ったんだけど、作業してるうちについ……」

新しく手渡された鉄の剣は、刃の部分が鮮やかな赤色に染まっていて、ただの鉄の剣に比べて幾分か軽いような気がした。別にそれを勝手にしたからといって怒る訳ではないが、純粹に何をしたのか気がなってしまう。それとその効果に付いても知っておきたい。デメリットがあるのならば知っておかないと、いざという時に痛い

目を見る羽目になる。

「これは……なんか効果あるの？」

「えっと、まあ大したものじゃないんだけど、キイカの方は少し切れ味が上がるように、シアの方は炎の威力が増すように、それぞれちよつとだけ手を加えたの。もちろんないよりマシ程度だけどね」

「それでもないよりはいいさ。ありがとう」

「いや、ついやってただけだから……ははは」

トツネは両手を頭の後ろで組みながら恥ずかしそうに笑みを浮かべて、はぐらかそうとしていた。

トツネは魔紋師であると同時に、鍛冶も出来る。むしろトツネの持つ技術は魔紋と鍛冶が混ざったものだと言っていたのだから、本当にトツネ自身にしてみれば、それは大した事ではないのだろう。修理のついで、と言うのも納得できる。

……でもちよつと待てよ。どうしてトツネはシアが炎を使う事を知っていたんだろう？ トツネの目の前では使った事はおるか、戦闘さえしていないはずなのに。シアの短刀だってあの時手渡して初めて目にしたはずだ。それなのにシアの短刀に炎を強化するような細工が出来るのだろうか。

俺の剣に切れ味が上がる細工をするのは、納得できる。そもそも魔紋を刻みたいのは俺な訳だし、現に俺の戦い方もただ隙を見て切りかかるだけのものだ。強力な戦闘になればこそシアに炎を付加してもらふ事もあるが、雑魚戦ではその機会はほとんどない。

どうにか傍目で見た時に、シアが炎を使うのが分かったような痕跡を探し、記憶を探って見るが心当たりが浮かばない。

何だか気になるのでその疑問をそのままトツネにぶつけてみる。

「なあ、俺はともかく、なんでシアが炎を使うって分かったんだ？」

「ん？ ああ、簡単だよ。武器に付いた傷とかで、偏った使い方し

ていればすぐに分かるんだ。二ケのも炎の痕跡こそあったけど、あんまりメインに据えて使ってるようじゃなかったから、無難なものにしたんだ」

素人目ではトツネが言うものは一切確認出来なかった。

レイス戦の後に、俺は新しく取り出した鉄の剣を再びポーチへと格納して、今まで使っていた鉄の剣に装備し直した。その際にその剣を少し見たが、特別焦げ痕があった訳でもないし、刃も新品の物と変わった様子はなかった。それを見て俺自身が、あんな乱暴に吹き飛ばされても目立った傷は付かないんだなあ、とか思っていたのだから間違いない。

そしてそれを完璧に見抜く辺り、今朝の騒動の時のような態度を取っていたのは、全て実力の裏返しだったのだろうと思う。自信があるからこそ、それを否定されて悔しくて、食い下がっていたところなんだろうか。

「それで、なるべく早いところ出たかったんだけど、もうすぐ昼だしね。ご飯を食べてから行く事にしよう」

「いいのか？」

俺達は特別急ぐ事はない。元々成り行き上の話なので、相当危ないと思わない限りはトツネの言うように動くつもりだ。

対してトツネは何だか焦っていたような様子だったし、のんびりとお昼なんか食べてる暇はあるのだろうか、とも思ってしまうのだが、その当の本人であるトツネが昼にしようと言いつ出すのだから、俺達に一切の反論はなかったが一応確認は取っておく。

「いいよ。片道十分ぐらいで、行き帰りと魔物が出る事も考慮しても、二、三時間あれば事足りるし、このまま行って空腹で力が出せませんでした、なんて言われても困るもの」

「そんな事はないと思うけど……」

俺の言葉はある音によって遮られた。一瞬で空気が一変する。
響いたのは可愛らしい腹の音。その音の出所は明らかにトツネだった。

「……………」

「私がお腹減っているからお昼にしよう」

「……素直でよろしい」

顔を赤く染めながらも堂々と言い切ったトツネに拍手を送りたい気持ちだったが、それよりも早く、トツネはシアの手を引いて裏口の扉に手をかける。なんだ？　と思う間もなく、トツネは「買出しに行つて来るから待つてろー！」とだけ言つて、あつという間にその姿を消してしまった。シアも何が起こったか分かつていないような表情を浮かべたまま、扉の隙間に吸い込まれていき、扉がひとりでに閉まる音とその後訪れた静寂だけが、俺に残されたものだった。

「いや……どうしろって……」

ただ一人残された俺は、変に歩き回る事も出来ず、あれこれ触る訳にもいかず、ただただ椅子に座つて、今の状況だとか、このデュアルワールドについて考察でもして、暇を潰すしかなかった。

メニューを開く。現実時間はもう日を跨ぐような時間だ。でもVRGの発売に合わせて、連休を取った俺に死角はない。流石に限界まで眠くなってきたら辞めるつもりではいるが、出来る限りはやり続けたい。

この世界で起こった事を思い返す。まだ現実時間では一日しか経っていないがこのデュアルワールド内の時間は一日半にも及び、R

P Gとしてはまだまだ序盤の範疇だろう。

武器を見たのも未だに、銅の剣、鉄の剣、あとはシアの持つ短刀に、トツネが持っていた短刀だけだ。そして俺の使ったのはそのうちの半分である二種類だけ。武器の総数がどのくらいなのかは俺には想像もつかないが、その数は少ないのが明白だ。

星の欠片も未だに一個だし、全てを踏破しクリアする頃には、現実時間でどのくらい掛かるのか想像もつかない。

改めて自分のステータスを確認する。

レベルは六、HPは五十をようやく超えた所で、椅子に座って休息しているおかげか、少しずつ回復している。

SPはレイス戦でギリギリまで使ったはずだったが、今はもう完全回復している。

戦闘後に自分の状態を確認した事がないので、それがHPと同じ自然回復なのか、戦闘終了後に自動回復するのは定かではないが、とりあえず勝手に回復してくれるようなので、当分はSP回復アイテムは必要ないだろう。

MPは言うまでもなく最大値のまま動いてない。これから使う機会も増えるだろうから、その数値を見るが、シアの魔法の消費MPを見る限り、そこそこにはあるらしい。これで魔法は覚えただけMPが足りなくて使えない、何て事にはならないだろう。

筋力以下の各種ステータスも二十から三十の値でおおよそ揃っていて、順調に育っているのがわかる。ステータスが上がった事で体が嘘のように軽くなる、なんて事はあまり実感がないが、戦闘においての行動の際には、確かにそれを実感できる。

敵に近付いたりする時のダッシュも、現実ではまずありえないような速度が出るし、武器もまるで重みがないような感覚で振り回せる。もちろん何かに当たった時には手ごたえもあるし、岩なんかを打ち付けた時は手が痺れるような衝撃が伝ってくる。

だから実際に剣には重みがあるのだろうけど、それを振るう俺の感覚がそれを消してしまっている、という事になるのだろう。

習得スキルは二つ。切りかかる攻撃にさらに威力を乗せる『スラッシュ』と、突き攻撃に威力を乗せる『ストライク』の二つだ。

アビリティは武器消耗軽減の『手入れ』に、魔法の使用に必須な『魔法』。それと疲れが早く取れる『休息』に魔物解析の『識別』の四つ。

アビリティポイント

APはレベルが上がるごとに二ポイントなので、アビリティ習得に使った四ポイントを減らし、残りは六ポイントだが、今から新しくアビリティを取るよりは、既存の物を強化するために貯めておきたい気持ちの方が強いので、とりあえずは置いておく。

後は星の欠片が一つと、買い込んだアイテムに、溜め込んでいる魔物の死体コアブスぐらいのものだ。

俺は一通りの状態を確認して、やる事もなくなったので、メニューを閉じた。そのまま天井に顔を向けて一息つく。

「あら、お客さん？」

そんな俺に、不意に声を掛けてきたのは女性だった。おそらく二階に続いているだろう階段から、突如として現れた長い金髪の、どこかで見たような顔の女性。

「あれ……？ ニーアさん？」

そうだ。さつき会ったニーアさんとその姿形がそっくりなのだ。髪型も、その色も、肌の色も、顔立ちも。違う所といえばその胸のサイズと優しい眼差しだけだ。

俺の言葉にその女性はゆったりとした動作で手を持ち上げ、横に振る。

「違う違う。ニーアは私の妹。私はディア。トツネのお母さん、だよ」

「え……………って、はあ!？」

その目の前にいる女性、ディアさんは、その見た目からすればどう見ても二十代前半と言ったところだ。それがトツネのお母さんって……。

トツネはその見た目ではシアと同じくらいのもので、おそらく十六、七程度だろう。それをディアさんの見た目年齢から引くとんでもない事になる。これは俺がディアさんの年齢を大きく読み違えている可能性が一番高いが、そうは言っても、見た目からすれば三、四十代とはとても言えない若さと美貌を持っている。

……………これこそファンタジーか……。

ディアさんは階段を下りて、椅子に腰掛ける。丁度俺の真正面だ。

「ふふふー、初対面の人はそうやって驚いてくれるから面白いねー」

そんな暢気に語るディアさんの正体不明な感じに若干恐れおののいていたが、いつまでもそうしている訳にもいかず、とりあえず挨拶だけはきちんとしておこうと思った。

「ああ……………っと。お邪魔させてもらっています。はじめましてニケです」

「ニケ君、ね。初めまして。ゆっくりして行ってね」

「は、はい……………」

「トツネとは知り合いなの？」

「え、はい。まあ今朝知り合ったばかりですけど……………」

「そうなの……………、あの子をよろしくね、ニケ君。あの子はちょっと向こう見ずな所があるから」

そういえば朝は結構大柄な男にも一步も引かずに言い合いしてたもんな。理がトツネにあったとはいえ、変な奴だったらあそこで逆

に怒って暴力振るう可能性もないとは言えなかったのに。そう考えると確かに少し危うい所はあるのかも知れない。

「俺程度でどこまで出来るかわかりませんが、出来る限りは……」

「もう！ 男の子はそういう時に、堂々と胸を張って任せてください！ って言うものなのよ」

「そう、言われなくても……」

ディアさんは自分の胸の中心に右手を当てて、胸張ったポーズで言うのだけど、俺はレベル六の弱小冒険者なので、自信満々かつ無責任にそんな事は言えず、ただただ情けないながらも苦笑いを浮かべて誤魔化すしかなかった。

そんな俺を射抜くディアさんの眼光は、まるで見透しているようで少し寒気が走った。

「冗談よ。まあ、ニケ君にはシアちゃんがいるから大丈夫だと思うけど……」

「一体全体、何の話ですかね……？ といつかなんでシアの事を……」

俺がそう言うと、無言でディアさんは指を上を指す。それに付られて俺も上を見るが、そこにあるのは天井だけだ。

「二階まで丸聞こえなのよねー、この家」

「なっ……」

つまり、ディアさんは二階にずっといて、さっきまでの会話を全て聞いていた訳だ。だからこそ、シアの事も知っている。

しかし、もしそうならば、それまでの依頼の件も全て聞いていた事になる。まあ別に困るような事でもないのだけど、親としては子

供の事が心配なのかも知れない。だけど、ディアさんは何も言わないし、表情にもそういった心配の色は窺えない。

だというのに。

「だから、多分苦勞する事になるかも知れないのだけど、あの子を頼みたいのよ。それとあの子の魔紋もしつかりと刻んで欲しいの」「どうしてそこまで……」

ディアさんは穏やかな表情だというのに、その言葉の端々にどこか尖ったようなものが感じられて、その言葉を素直に受け取れない。

「……本当は言わない方がいいのかも知れないんだけどねー、ニケ君になら言ってもいい気がするの。だから聞いてくれる？」

「……………はい」

判断に迷った。でもそれは知っておかないといけない事だ。

依頼してきた本人であるトツネの事である事は明白だ。それを俺が勝手に知る事は、きつとトツネ自身はいい顔をしないだろう。しかしその親であるディアさんは、トツネの傍にいつもいるからトツネを一番知っている。そんな人が、俺に何かを話そうとしてくれているって言う事は、ディアさんの言葉通りで、俺がそれに足るものだと思ってくれたのだ。

それに、現実的な話。トツネは未だに何かを隠しているのは実に分かりやすい。そしてそれを隠したまま依頼を実行し、その際に何らかの事故が起きる可能性もなくはない。

俺だけならまだしも、シアもそれに巻き込まれてしまうのはやっぱり避けたい。そうなると出来るだけ話を聞いておくのは、悪い事ではないと思う。

つまりは、俺が勝手に本人の知らぬ所でトツネの話を聞いて、罪悪感を持ってしまうのに問題がある訳だが……シアの事を天秤にか

けると、俺の中ではシアの方に傾いてしまう。

だからトツネの事は本人には内緒にしておいて、今はディアさんが聞かせてくれるという話を素直に聞いておく事にした。

「なんだか悪い事考えてる顔ね」

「えっ！ いやそんな事は……」

「まあ、いいわ」

どうやら考えが表情に出ていたらしい。俺は慌てて表情を繕い、ディアさんと視線を合わせた。吸い込まれそうなその瞳は、とても穏やかで、鮮やかだ。

「あの子はね、技術を持っているんだけど、それが評価されない事に悩んでるの」

「評価されない？」

トツネの技術の高さについて、俺はなにも分からない。技術があるというのは話を聞いてたり、修理された鉄の剣を見れば分かるが、それが俺の中で基準であり唯一なので、比べるものがなければ、最高にも最低にもなってしまう。しかし、俺とシアが買い物に行っていた時間で、修理はおろかオマケすら付けれる事を考えると、その腕の高さが見える気もするが、如何せんゲーム世界の鍛冶の時間は信用ならないものがある。しかもそれが俺の目の届かぬ所で行われているのだから尚の事だ。

「ええ、それがヒコネさん、私の夫の名前のせいなのよ」

「どういう事です？」

「身内が言うのもあれなんだけど、ヒコネさんの練り上げた魔紋鍛冶の技術は、どこにも負けないような一級品のものなの。名の立つ冒険者の方々や王様なんかも目をつけてくれるほどの最高級品。も

ちろん手間が掛かる分値段も高くなってしまっただけど、その辺りがトツネに仕事が入らない原因になってるの」

最高級品と聞いて、驚きが隠せなかった。魔紋の事を詳しく知るためにここに来て、たまたまトツネに出会った。そして連れて来られた先が最高級の店だったとは、少々出来すぎな気もするが野暮な事は考えず、今は聞かされている話について、トツネについてのみに思考を絞る。

ここが王様も目をつけるほどの店ならば、その技術を継いでいるトツネにも、その名にあやかつて人も集まるのが普通だとは思っただが、現にあの宿ではトツネ自身が造った物を手渡していたようだし、依頼が全くない、と言う訳でもなさそうだった。それでも評価されないと云うのだから、俺の考えが何か間違っているのだ。

改めて聞いた事、見た事を思い出して考える。

最初にトツネが男に断られた時に、男は「こんなもの」と言っていた。それはつまり、手渡されたトツネの作品に対して、明らかに下に見た発言だ。しかし、ディアさんはトツネに技術はあると言う。それならば、トツネの技術は最低でも一般的な基準だと考えてもいいはずだ。そしてそれを見下ろすという事はその上があるという事になり、それこそがトツネの父親の作品なのだというのは簡単に考えられる。だから原因だとディアさんは言ったのだ。

「その表情だとおおよその予測はついたみたいね。察しのいい男はモテるわよ」

ディアさんに茶化されるが、俺にとってはまた表情に出ていたという事実の方が驚きで、再び慌てて繕うのだが、それをみたディアさんに笑われてしまい、少し恥ずかしい。やっぱりこの世界の年上の女性はどこか苦手だ。

「トツネの技術は正直言つてヒコネさんに及ばないものの、普通の所よりもいいものだとは思う。鼻屑目抜きにしても、ね。でもそれが返つて仇になつてるのよ。」

ヒコネさんはその技術があるから高めの金額でも依頼は来るのだけど、トツネは頑固な所はヒコネさんに似ちゃつて、「私の腕で作ったものは、それ相応の金額に見合っただけの価値はある」って言い張るおかげで、普通の所よりも値段を高く設定しちゃつてるの。もちろんそれが腕にあつた値段なのは確かなのだけど、やっぱり他の人からすれば、トツネのものはヒコネさんの劣化品、という認識にしかないの……」

「そして、普通よりも高いせいで、一般の人達からすれば高嶺の花、って事ですか」

複雑、でもないが、それでもそこには俺の理解できない職人のこだわりというものがあるのだろう。

もちろんお金を払う方だって、より良い物が欲しいと思うのは当然だ。流石に宿にいたあの男のような態度は許せないが、その流れも十分に考えられる話ではあつた。

トツネは今、中途半端な位置にいるのだ。最高級品としては実力が足りず、汎用品としては高く、そうなれば最高級品の代替品として売れる可能性もあるのだろうが、現実問題、売れていないのだから、おそらく代替品としては高いのだろう。

そして、そのせいでトツネは悩んでいる。それをディアさんは俺が打開出来ると思つたのだろう、だからこんな話を真面目に俺にしているのだ。でも俺は名がある訳でもないし、トツネの作品一つ満足に買えるだけの金もない。

俺はトツネに依頼されただけで、それをこなせば後はどこ吹く風でいいのに、そんな話を聞けば黙っていられないのは悪い性格なのだろう。

シアの時もそうだ。イベントだから、仲間になるかも知れない。そう考えてたのは事実だが、それとは別のものも確かにあった。

今回もそれに近い状況だ。魔紋を刻む費用の半減させるためという、ゲーム上の事を考えながら、トツネに出来る限り協力してやりたいと思っってしまったている。

「でも今回トツネ、さんは、魔紋を刻むのを半額にしてくれるって言ってました。プライドがあるのなら、そんな事はしないんじゃない？」

「そう。だから今回はあなた達に賭けようと思ったの。普段は頑固なあの子が、そんな事を言い出したのには、きつとあの子の心境に何かしらの変化が訪れようとしてるんじゃないかって思うの。そしてそれを引き起こしたのはきつとあなたよ、二ヶ君」

「俺、ですか……」

俺がトツネにした事なんて何もない。せいぜい宿で仲裁に入っただけだ。それもあんまり俺自身は言う事もなく、自然と解決してしまった。その後はこの町の入り口であっただけ。

俺が一体どんな影響を与えたのかは知らないが、もし、本当にそうだとしたら、俺にも何か出来る事があるのかも知れない。

「あの子が今、どう思っているのか、何を考えているのか、私でも完璧に把握できる訳なんてない。子供は親から離れ、子は親から離れなくちゃいけない。そして多分だけ今回を逃したら、あの子はもう変わらない気がするの。だから、どうかお願い。あの子を変えてあげて……！」

ディアさんの表情は完全に子を想う親の顔だ。そしてそんな顔でお願いをされた日には、俺は断る権利もなく、ただ無言で頷いた。

どうなるかは分からないが、おおよその背景は掴めた。後はなるようなるだろう。俺に出来る事は些細な事だが、それでも静まり返った水面に小石を投げるぐらいの事は出来る。後の事は本人次第だ。

「出来る限り何とかしてみます」

「……ありがとう」

そして、互いに微笑んだ。

無色の横暴

トツネはシアの手を引いたまま、路地裏を走っていた。あつという間に通りにまで出て、そこでその手をようやく離し、両膝に手をつけて体を休める。肩で息をする二人を何事かと行き交う人達は目をやるが、無為に関わる事もなく一瞥するだけに止まる。

二人はそんな事は露も知らず、踏みしめた石畳ばかりを眺め、その息を整えようとしていた。

「っ……はあ！」

トツネは先程までとは逆に体を反るように一気に起こし、それを仰ぎ見る。その頃にはもう行きは整っていた。照りつける日差しの眩しさに、右手を顔の前にかざして和らげる。

「トツネ、ちゃん……？　どうかしたの？」

シアはそう言うが、トツネは空を仰ぎ見たまま動かず、二人の沈黙を埋めるように辺りの喧騒がより一層、二人の間に流れる。

しかしそれを掻き消すようにトツネは振り返り、シアに先程まで繋いでいた手を差し出す。そして日の光にも劣らぬ眩しい笑顔で、シアに応えた。

「……いや、何でもないよ。さあ行こう」

シアは戸惑い、その差し出された手と顔に何度か目を向けていたが、やがてその手を恐る恐る握った。するとトツネは再び振り返り、通りを歩き始める。シアは引っ張られるように歩き出し、やがて隣に並ぶ。

二人の身長はあまり変わらず、見た目も歳が離れているようには見えない。

行き交う人達からすれば仲の良い友達、もしくは姉妹のように思われるだろう。しかもその手を繋いでいるとすれば尚更だ。

シアは少しの間戸惑い、トツネに手を引かれながら歩くだけだったが、やがてその状況にも慣れたのか、足取りも表情もいつも通りに戻っていた。

それでもどこことなく不安そうな表情を浮かべるのは、見知らぬ土地だというのが大きかったのだろう。今は頼っていた二ケも隣にはいない。

シアにしてみればこの土地の勝手知ったるトツネより、何かあっても守ってくれるような二ケが隣にいた方が安心できたのだ。

「それで、どこに行くの……？」

シアはそうトツネに尋ねる。昼の買い物だという事は分かっていたが、具体的にどのような場所に行くのかは、先導するトツネのみが知っている。

そもそもお昼といっても何を食べるのかすら決まっていなかったから、その材料を揃える以前の話だ。だからシアはトツネが既にそのメニューを考えていて、その上で必要なものを買って揃えるのだと思っていた。しかしトツネはゆっくりと歩みながら、シアと繋いだ手とは反対の、手持ち無沙汰な手の人差し指を顎に当て、何かを考えているように唸っている。

その姿を見たシアはもしかして、と思うが、その予想をトツネはすぐに言葉で肯定するのだった。

「どうしよっか」

シアの僅かな希望は砕かれて、二人は何の計画も無しにただただ

通りを歩いていく。

「これとこれ……あと、これ」

シアとトツネがいたのは食材を扱う『天菜^{てんさい}』という店だった。そこには様々な種類の肉や野菜、その他加工品も揃っていて、現実で言う所のスーパーマーケットのようなものだった。だがもちろん現実のようにかごが置いてあったり、カートが用意されているなんて事はなく、ただただ物を詰め込んで並べているようにも見えるほど、隙間なくその空間に食材が詰まっているだけ。入り口兼出口の所に人が立っていて、そこで会計するのは現実と似たような感じだ。

その中を縫うように移動する二人組こと、シアとトツネの役割はきつちりと分かれていた。

シアはその視線を数ある商品に滑らせて、その質を見極めて、吟味した食材を手に取りトツネに手渡す。トツネはそれを受け取って、その手にある食材の山に加えて抱きかかえる。

トツネの手にある食材は肉や野菜等、多種多様。完全にシアが仕切って買い物をしていた。

「家事出来るって羨ましいなあ。私が出来るのは鍛冶くらいだし……」

……

「やらなきゃいけなかったから、勝手に身に付いちゃっただけだよ。やればすぐに覚えるようなものだし……」

「そんなものなのかなあ……」

二人はそんな会話をしながら、店の会計を済ませ、紙袋に入れた食材達を手分けして持つ。支払いは全てトツネ持ちだった。シア自身がお金をそんなに持っていないのもあったが、トツネはこれ

も依頼のサービスみたいな物だと言って、気持ちよくその支払いを請け負ったのだ。

二人は再び通りを歩く。今度は空いた手もなかったが、話は弾む。

「……それで二ヶとはどういう関係なの？」

「えっ！？ ……いつ、一緒に旅する冒険者、だよ……？」

「ふーん……、そうは、見えないけどねえ？」

意味深な笑みを浮かべ、隣を歩くシアにその視線を向けるトツネに、シアは顔を赤らめて紙袋に顔を埋める。

トツネはそんなシアを数秒間見てから駆け出し、シアの数歩前でくるりと振り向く

「まあ、私には関係ないけどさ、大切なら離しちゃ駄目だよ」

「え……？」

トツネは笑う。シアが戸惑いの表情を浮かべても、何も言わずただ笑っていた。すると突然、進行方向に背を向けて進んでいたトツネが、シアの方へ駆け寄る。

「うわっ！」

驚きの声を上げるトツネを、声こそ上げないもののシアも驚きのまま受け止める。二人まとめて倒れたり、シアが突き飛ばされるといった事は無かったが、シアはトツネの肩越しにその目の前にいる存在に顔を向けていた。

トツネも自分の身に何が起こったかわからなくて、シアの顔を見てからようやく正面を向く。

そこにいたのは男が二人。一人は煌びやかな鎧に全身を包んだ、青目の青年。髪も青色で、少し長めの髪の手先は尖っているかのよ

うに鋭い。その背中には身長には及ばないほどの、相当に大きな大剣が担がれている。その鋭い、嫌悪の色が満ちたその瞳がトツネ達に向けられていた。

もう一人は、打って変わって地味な色のローブのような軽装に全身を包んでいる、赤めの青年。髪は掻き揚げられ、オールバックだ。腰には剣のようにぶら下げられているのは、ホルスターで固定された本。それもただの本ではなく。魔紋が刻まれた魔紋書だ。

魔紋書はページごとに異なる魔紋が刻まれていて、その該当ページを開いて魔法を発動することが出来る、いわば魔紋の集合体だ。もう一人の鎧の青年と見た目は同じぐらいで、シア達に向ける視線は鎧の男よりは柔らかいものの、嫌悪しているのは間違いなかった。

「人様にぶつかって、謝罪もなしか」

「あつ……つと、ご、ごめんなさい！」

トツネは慌てて振り返り、鎧の男に荷物が落ちない程度に頭を下げて謝罪の言葉を言う。それを見てシアも遅れて頭を下げる。

そんな二人を鎧の男は鼻で笑い、蔑んだような目で見下す。そして鎧の男は後ろのもう一人の男に振り返る。

「よく見ると二人ともそこそこだな。おい、ステイード、どうする？」

「いいんじゃないか？ 丁度いいだろ。悪くはないし」

二人の笑みは下品なものに変わり、その笑みを見たシア達は戦火に寒いものが走るのを感じた。直感で二人の言葉に隠された意味を感じ取り、それが嫌な感じがしたのだ。

だからトツネはすぐにシアの手を取り、走り出そうとする。

「行こう！」

しかしトツネの足は一步踏み出して止まる。いや、止められた。シアの手を掴むトツネの肩に鎧の男は手をかけていて、力づくでその動きを止めたのだ。そしてそのままトツネが振り向くように腕を引いて、その力に抗えなかったトツネはバランスを崩しながら振り向かざる終えなかった。シアも手を握られていたために少し引つ張られ、体勢を崩す。

「おいおい、人にぶつかつといてそれだけで済むと思ってるのか？
ちよつと付きあつてもらうぞ」

そう言つと鎧の男は強引にトツネの手を掴む。それをトツネが振り払つと、男の顔は歪んだ。

「女如きが調子に乗るなよ……！ 世界を救つてやろうつていう、俺のような冒険者の言う事が聞けないつて言うのか！？」

そう叫ぶ鎧の青年は、その振り払われた右手首についているものを、見せ付けるように構えた。

青年の腕には鎧に隠れていて見づらかったが、確かにニケと同じ、国の募集に応じた証としての無色の宝石が付いた冒険証があった。

それを見てトツネもシアも唇を噛む。それは決して偽造する事が絶対に出来ない代物だ。

それを持つのは大抵は力のある冒険者だ。だからトツネもシアも周りの人達も敵わないのがすぐにわかつてしまう。

だから無闇に動く事はできない。冒険者は各地を飛びまわるために、変な噂が立てば魔紋と鍛冶を生業にする街にとつては痛手になってしまう。だから出来るだけ穩便に済ませないけなかった。

だというのに、動く。その足を確かに一步踏み出す人影。紫の髪

を持つ少女、シアだ。

「その証を、あなたなんか掲げるなんて……そんなの許せません！」

シアは下劣な行為をする鎧の男が許せなかった。それはもちろん当事者として当たり前前の反応なのだが、それとは別に、その男と二ケが、無色の冒険証で重なってしまったからだ。

自分を救い、旅の同行も快諾してくれた優しい二ケと、目の前の力で暴虐を振るう男が重なる事が、どうしても許せなかった。だからシアは怒りのまま、物怖じせずに言い放った。

もちろんその言葉で鎧の男は激昂する。元よりプライドの高いうえに、それまでは冒険証を見せれば誰もがひざまづいてきたため、今回もそうだと思っていたから。自分の思い通りに行かない事が気に喰わないのだ。

「っ……てめえ！ 調子に乗りやがって……！」

状況は明らかにシア達の方が不利だった。周りの人々も助けるような事はなく、ただ周りに野次馬のように群がり眺めるばかり。トツネの知り合いもその中には混ざっていたが、やはり打つ手はない。しかし、そんな中密かに、誰にも気付かれない場所でそれを見ていた女がいた。

騒動の場所は道具屋の目の前だったのだ。

窓から事の顛末を見守っていた道具屋の女店主のニアは、その手に装飾が施された一本のペンを持ち、それを片耳に当てていた。それは現実世界で言う所の携帯電話と全く同じ役割を持っていた。もう既に誰かに掛けているようで、外の様子を心配そうに眺めながらも、そのペン先に声を掛ける。

「そうなの。……ええ、店の前で、トツネちゃんと女の子がなんか変な奴に絡まれてるの。ヒコネさんはいないの？……そう、私も出来る事はして見るけど、相手が厄介だからどこまで持つか分からないわ。出来るだけ早く……ええ、それじゃあ」

ニアはその耳からペンを離し近くの机に置いた。そして腹を決めて扉を開ける。

扉を開ける直前、それは男達に向ける台詞の練習なのか、吐き捨てるようにニアは呟く。

「国の冒険者だか知らないけど、流石に無理矢理は許せないわねえ」

無情の現実

ゆったりとした時間と空気は一変し、緊張が走る。

ディアさんが持つているのは万年筆で、その表面にはシアの短刀に描かれていた紋様と似たようなものが刻まれている事から、それが魔紋が刻まれた何かしら道具である事は確かだった。そしてそれをまるで携帯電話のようにキャップの部分を目に、反対側を口に近づけ、会話している。

相手側の声は聞こえないものの、ディアさんの受け答えの音が真剣さを帯びている事から、何かしらの事件が起こったのかも知れない。それが俺に関係あるかないかは分からないが、ともかく平和な昼下がりにはなりそうもなかった。

「わかったわ。ヒコネさんはまだ戻らないけど……」

ディアさんは俺にちらりと視線向けてくる。その視線の意味は詳しくは分からないが、俺に何かしら関係あるのはすぐに分かる。

それは俺に解決を頼むということなのか、俺に関わる何かが事件を起した、もしくは巻き込まれた、と考える事が出来る。その疑念からすぐに思いつくものがあつた。

まさか……。

「ええ、それじゃあ……」

ディアさんは通話を終える。手に持つ万年筆を机において、一呼吸の間を空ける。俺は気が気じゃなかった。もし俺の予想が当たっているのならば、今すぐにでも飛び出して行く、そう心に決めていた。

だからディアさんの口から、それを確信させる言葉が出ない限り

は俺は動かないつまりだった。むしろそうあった方が俺は落ち着けるのだ。でも、そんな俺の考えは甘く、あっさりと裏切られる。

「シアちゃんとトツネが冒険者と揉め事になっているそうよ。しかも無色の冒険証を持っているから分は悪いわ」

無色の冒険証は俺の腕にも付けられた、国のため、世界のために尽力する事を誓った冒険者のはずだ。なのになんでシア達が……。その時脳裏に言葉が浮かんだのは、レオン達との会話だ。そういえば無色の冒険証は何かと優遇される事が多い、そう言っていた。それを逆に利用してある程度好き放題が出来るという事でもある。そして俺は勘違いをしていたのだ。

レオンのような善良な冒険者ばかりだと、そう思っていた。でもこの世界のNPCは生きて、独自の思考を持っている。その人間臭さに俺は驚いていたはずだ。

どこまでも真っ白な人間が世界を覆いつくしている、なんてことはまずあり得ない。百の人間がいれば、百の思想があるからだ。

だから善良な冒険者がいれば、その反対の悪逆の冒険者だっていてもおかしくない。理不尽にその力を振るう、そんな輩が。

どの程度の揉め事なのか俺には検討も付かないが、少なくともシアとトツネが他人を不快にさせるようなことを好んでは思えない。だから揉め事の発生した原因は、相手の理不尽か、何かしらの勘違いって所か……。

「場所は！？　すぐに向かいます！」

「ニアの道具屋の前よ。ニアが時間を稼いでくれていると思うけど、長くは持たないと思うわ」

それだけ聞いてすぐに駆け出す。

腰の剣を走りながら握り、祈る。どうか無事でいてくれよ……。

通りに出るとすぐにそれは見つかった。明らかに異様な人だかりで騒がしい。しかしその中でも際立って耳に届いたのは女性特有の叫び声。

「くそっ！」

それが誰のものはわからないが、状況からしてシア達かニアさんのものだろう。俺は全速力で駆ける。これ以上どっかの冒険者なんかに好きになんかさせてやれない。

人だかりを掻き分けて前へ前へ体を運ぶ。視界が揺れて、それでふと思いつく。こんな状況がつい最近……、そう、シアを最初に助けた時もこうだった。

その事を思い出し、唇を噛み締める。あの時は舌先だけでやり過ぎたが、今回は相手が相手だ。口先だけでどうにかなる可能性は低く、最悪の場合はその冒険者と対等の証を持つ俺が、そいつと戦う事になるかも知れないが、そうになったらやむ終えない。どちらにしろ見捨てるという選択肢はないのだから。

人ごみを抜けた先にあつたのは、無残な光景だった。

ニアさんが倒れていて、それに寄り添うようにトツネがいる。

明らかにニアさんに意識はない。そしてその先、人だかりが作る円の中心にシアがいた。短刀を手に、服はぼろぼろで、それでもその瞳には絶対に負けないという意思があつた。

相対するのは鎧の男。それとその後ろに明らかにこの町の人ではない、ローブを被った男が嫌な笑みを浮かべながらその様子を眺めている。

「はっ！ だから女如きが俺様に敵うかよって！」

鎧の男はあろうことかシアの腹部に回し蹴りを放った。シアはそれを避ける事すら敵わずに、その体を吹き飛ばされる。

それを……、しっかりと受け止める。

「あ……、二ケ……さ……ん？」

「ああ、もういい。もういいんだ……」

俺は怒りというものを久々に思い出していた。あるいは憎しみという感情なのかも知れない。ともかく、目の前の男が許せなかった。

「ごめん、なさい……」

そう言ってシアは体の力を抜いて、その瞼を閉じる。血や目立つた外傷はないが、それでも相当な傷を負っているのは分かる。

シアの体をゆっくりと降ろし、トツネに任せる。

「二ケ、コイツには敵わないよ！」

「それでも……」

それでも、ここで引けるほど俺は理性的じゃない。鎧の男を注視するとそのステータスが識別で浮かび上がる。

装備は『蛇鱗の大剣』と青灯の鎧一式。浮かび上がった名前はグリード。

それが俺の定めた、敵の名前だった。

「……ここで引く訳には行かないんだよ」

剣を引き抜く。日の光を受けて、刃の赤ががより一層輝きを増し、まるで俺の怒りを表すようだった。そしてその切っ先を敵に向ける。

俺が向けたのは、その優越に浸った醜い顔のグリードという男。切っ先を向けても尚その余裕を崩さず、苛立つ口調で飄々と饒舌に語る。

「おいおい、騎士^{ナイト}様の登場ってか？　っは！　コイツあ傑作だ。その貧弱そうな体に、粗雑な鉄の固まり。それで俺と渡り合おうってか？　夢見る騎士ごっこもいいが、今は現実を見るよ、分かるだろ？　この状況がいかに自分にとって不利なのか。わかったらとつと消えろ、雑魚。なあに女は悪いようにはしねえさ。女は俺達にとつて貴重な清涼剤だからな」

「黙れよ、生きてる価値もない」

「……！！　つてめえ……殺すぞ！」

グリードの目の色が変わる。余裕に満ちたむかつく顔も、今は怒りと憎悪に染まった愉快な顔だ。正直な所、武器や防具を見る限り、勝てる気はしない。普通のゲームならば半ば諦めている所だが、今の瞬間だけは負けられない。どんな事をしてでも勝つと心に決める。

圧勝する必要もない。いたぶる必要もない。泣いて許しを請わせる必要もない。

ただ勝てばいい。それだけが俺の出来る事。

「口だけならいくらでも言えるさ。御託はいいからとつと来いよ、軟弱者」

「くそがあああああ！」

それが引き金になった。グリードは血管をはち切れんばかりに浮かび上がらせて、その背中の大剣を突進しながら引き抜く。

勢いに任せただの振り下ろし。それは俺の考えていた予想と全く同じ展開だ。馬鹿正直にやっても勝てるとは思えないのなら、相

手を馬鹿にするぐらいしか俺に勝ち目はない。

怒りは視野を狭くし、力任せの単調な攻撃に走りやすい。ましてやグリードのようなプライドの高い奴は、よりこの作戦にはまる可能性は高かった。

勢いも相まってその力は確かに凄まじかった。なにせ俺が避けて放たれたその一撃が石畳に直撃すると、剣先を中心に小さなクレーターが出来るぐらいだ。当たればただではすまないのだろうが、当たらなければ結局無意味だ。

攻撃を避けられ硬直する隙を逃さぬよう、剣をすぐさま振る。スラッシュで威力を増した一撃を胴へと横一線に振ったが、金属的な音と共に手に衝撃が走り、思わず仰け反ってしまうほど弾かれる。しかし少なくともダメージは通ったようで、グリードもよろけるモーションをするが、それもすぐに立て直して、同じ横なぎの一撃で反撃して来る。

それを後ろに軽快に飛んで避けた。

その短いの攻防を経て、二人は場所を入れ替えて再び対峙する。

俺の動きが予想外だったのか、少し青ざめたような顔をするグリードに、俺は言葉で煽る。そんな事で、これぐらいでその気持ちが冷めてしまつてはこちらとしても困る。

種火があるうちに再び燃やさなければならぬ。鎮火した後にはまた燃え上がらせるのは、かなり厳しい。だから今の内に決着をつけるか、手傷を負わせて有利な立場を確保するまでは怒りで冷静を燃やし尽くしてくれなければならぬ。

「……おいおい、さっきまで余裕はどうしたよ？　まさかこれぐらいで全力か？　本当に口だけなんだな、お前」
「……………ッ！」

その顔には言葉にもならないならぬのだろう。凄まじい怒りが浮かび上がる。

それでいい。そうでないといけない。だからもう少しだけ油断していてくれ。

今度は俺から切りかかる。考える時間を与えては駄目だ。剣のやり取りだけに集中させて、怒りだけを燃やし続けさせる。

一気に駆け寄り、右手に持った剣を無理のない軌道で斜めに切り上げる。

グリードはその軌道に交差するように大剣を構えて防御し、反撃しようと僅かに動く。しかし俺の狙いは元より剣にはなく、本当の狙いはただの蹴りだ。

切り上げた流れで体を捻り回し蹴りをガード出来るように、構えた大剣の中心に放つ。

それをすばやく察したグリードは律儀にそれをガードする。

今度は真正面で受けたので俺の蹴りの勢いのままグリードは押し込まれる。多少不器用な技でもステータスの数値によって威力はある程度は保障されている。

そのまま一瞬のための後、蹴りを放った足を地面へと強く降ろして体に無理矢理勢いを付けて振り降ろす。鎧で守られていない脳天を狙い放った。

滑らかとは到底言えない様な体に無理のかかる連携技だが、それでも十分だった。

やはり地力はあるのだろう、グリードにとっては完全に予想外の攻撃にもかかわらず、咄嗟に片腕でガードする。それでも初撃よりはダメージが通ったはずだ。

反撃に備えて距離を取る。

グリードは地に膝をつけて、まるでひざまづくようなポーズでいる。

……早く来い。……お前にはその状態が許せないはずだ。

ただ一方的にに攻めるばかりでは相手も防御に専念して、隙を作ることを考えてしまう。冷静に戦況を分析されれば俺にとってこの上ない不利になる。

だからターン制のように誘導し、適度に反撃させて調子に乗らせるのが俺の作戦だった。

なのに待っても、動かない。それどころか笑う。あれだけ激怒していたグリードが愉快そうに、笑う。

「……クツクツク……」

不気味なものを感じた。それと同時に作戦が破綻してしまったようない感じがした。何事も予想通りに行かないのは世の常だが、それでも単純な奴ならある程度はその行動を予測して罠に誘い込める、そう思っていたのだが……これは嫌な気がする。

「そんなに死にてえのなら……全力で殺してやるよ。おい、ステイード！」

「……はいはい。たくやりすぎないでよ、面倒だから」

グリードの言葉に反応したのは案の定、人だかりから浮いたローブの男。何か本を開きその口を動かしている。

その瞬間、本から光の玉が浮かび、グリードに飛んで吸い込まれる。他にも幾つかの光球が現れてはグリードに吸い込まれていく。

その意味する所はすぐに浮かぶ。支援魔法だ。

すぐに地を蹴って切りかかるが、軽々と大剣を振られ体ごと弾き飛ばされる。そして再び余裕を持った憎憎しいほどのしたり顔を浮かべたグリードが地面に垂直に剣を突き立てる。その行動で出来たクレーターは、初撃を遥かに凌ぐものだった。それはつまり、魔法の阻止に間に合わなかった事を意味する強大な力だった。

「さあて、ここまで舐めてくれたお礼だ。限界まで苛めて、てめえの目の前でその女共と遊んでやるよ」

怒りを忘れ、支援魔法でさらに強化されたグリードに、俺は……
打つ手が思い浮かばなかった。

負けられないのに、逃げられないのに、勝たなきゃいけないのに。
打開できる術が一切浮かばない。
絶望しか想像できなかった。

窮地の覚悟

状況は一変した。

ローブの男、ステイドと呼ばれた男の強化魔法でその身を大幅に強化したグリードは、今はもう怒りなど忘れ。その身を慢心に満たしていた。

しかし慢心はあくまで油断をするだけであって、怒りで我を忘れた時のような猪突猛進をする訳じゃない。勝つと確信しているからこそ、攻撃に備えて構えるでもなくその歩をゆつくりと進める。

一步ですら地面をへこませて風を生み出す、攻撃ともなりうる破壊力を秘めていた。その一步を二度、三度と繰り返し、人だかりによつて造られた闘技場のような円の空間の中心へと辿り着く。右手には軽々と大剣を持っている。

俺自身は倒れているシアとディアさん、それとトツネに、いつの間にか追いついてきていたディアさんがいるところまで下がっていた。吹き飛ばされたダメージはあまりなかったが、どのみちあんな状態になったグリードと正面きつて戦う事は不可能だ。見て分かるほどの強さは、もはや立ち向かう事すら許さないようだった。それでも……。倒れ、傷付いた姿のシア達を見れば、意地でもその足は持ち上がる。

「二ヶ、これ……」

「これは……」

突然近くにいたトツネがそれを手渡してきた。渡されたのは赤い皮に収まった短刀。それは朝にトツネが揉めていた原因の品だった。

「どうしてこれを……」

「母さんが持ってきてくれたの」

ディアさんは頷く。きつと何か力になると思ったのだろう。しかし俺はこれに刻まれた魔法を知らないし、使える魔法もアビリティの関係で初級の物しか使えない。どうやっても形成を逆転出来るような魔法は使えないのだ。

それでも受け取った。どうせ片手は空いてるんだ。そこに鞘から抜き取った短刀を持つ。

システム的には多分装備状態にあるだろう。

「おいおい、苦し紛れでもそれはないだろ。道化にでもなるつもりか？ それなら喜んで歓迎してやるがな」

そんな事を言うグリードから目を離さないようにしながらも、メニューを出して使える魔法を確認する。

魔法の欄にあったのは『^{ディスペル}解呪』の文字。それを見た時にふとした予感がよぎる。

もしこの魔法でグリードの魔法を打ち消せば、再びステイードが魔法が掛けられるまでの間は、グリードの強さも何とか出来るかも知れない範囲まで落ちる。

そうなれば今よりは希望が見出せるはずだ。やってみる価値はないとは言えない。

「そっちが来ないのなら、こっちから行ってやるよ！」

グリードが地面を抉りながら突進してくる。シア達に被害が及ばないように横に飛び、さらに二本の剣を交差させてグリードの攻撃に備えた。

グリードはシア達の目の前で体を捻り、片足を軸にした回転切りで俺を狙ってくる。

それをあらかじめ構えていた剣で受けた。……のに俺は宙を飛び、

人のクッションへと背中から突っ込んだ。

クッションになってしまった下敷きになっている人や、衝撃の余波で地面に倒れてしまった人に、短く謝罪だけしてすぐに駆け出す。最悪の場合街の人達に手を出さないと限らない。出来るだけ巻き込まないように気をつけながら、何とか解呪を試みるしかない。解呪は確認した時の説明に、剣が触れていないと使えないという説明が書かれていた。魔法が掛けられているのはグリード自身の体のみのようで、剣や鎧には包み込むような光のエフェクトは見当たらない。だから解呪をするのならば、グリードの体に直接短刀で触れなければいけない。それがどれだけ難しいかは身をもって証明しているが、それでも勝機を掴むにはそれを意地でも成功させ、隙が生まれた瞬間に一気に畳み掛けて終わらせるしかない。今はただ再起不能なダメージは負わないよう逃げ回って隙を探し、それを突く事のみに専念する。

「さっきまでの勢いはどうしたあ！　まだまだ俺は元気だぞ」

下品な高笑いを織り交ぜながら挑発の言葉を吐いてくるが、一切を無視する。なにせそんな事を言いながらも、手に持つ剣はいつでもどんな攻撃でも迎撃できるように構えられている。

そういった攻撃の気配を感じ取れるのは、リザードマンとの連戦で俺がシステムのものではない、経験として得たものだった。

しかし、手を出せば反撃が来る事が分かっている、そんなの構い無しに向こうから攻撃しに突っ込んでくるのには何の意味も持たない。

動き回る俺の行動を完全に先読みした、不意の一撃。

上空へ、太陽に突き刺すかのように振り上げられた大剣は、もう避ける事すら敵わない距離で俺を補足していた。

グリードもそれを分かっていたのだらう。だからこそその顔が喜びに満ちるように笑う。

——負けられない。

大剣がそこにとどまる事に飽いたのか、俺を切りたいと望むのか。ゆっくりと、まるでギロチンのように俺の頭へと落ちるのが見えた。

——こんなところで負ける訳には行かない……！

ただその一心で俺は腕をがむしゃらに前へ、その大剣を拒絶するように突き出す。

金属音が響き、衝撃が腕に伝い、背中に痛みが走り、見下したグリードの顔を見て、俺が地面に叩きつけられたのだと知った。

「終わりだ……」

そう言っただけグリードは再びゆっくりと大剣を振りあげる。今度はそれは俺を処刑するギロチンになった。

体が衝撃のせいで言うことを聞かない。動けと命令しても痙攣して動かない。

そうこうしてるうちにどんどん腕は持ち上げられていく。ゆっくりと、着実に、確実に。

そして……

勢いよくその大剣が振り下ろされた。

思わず目を瞑る。こういうのは原始的な恐怖だ。死なないと分かっているのに、痛みがないと知っているのに、それでも反射的に起してしまう。

もう気持ちは死んでいた。体が死ぬ前に、心が負けてしまっていた。

あれだけ負けたくないと思ってるわけには行かない意気込みで、おきながら、その力の差の前にはなにもかもが無意味だった。

気持ちで現実を覆らない。現実世界ならばまだ可能性があるかもしれないが、仮想現実のなかでは数字だけが全てで、唯一の絶対だ。意思だとか心が入り込む隙間はなかった。

だから俺はここで死ぬ。

……でも、俺が死んでこの世界、この後はどうなるんだ？ グリ
ード達が勝利して、シア達を手籠めにする？ 俺は死体として処理
されてしまうのか？

それともやっぱりゲームの定番で言う所のゲームオーバー画面に
飛んで、セーブした所からか？ 分らない。どちらにしろそれは
死んで見なければ分からない事だ。しかし、もし前者ならば、俺は
……。

想像すれば吐き気がこみ上げる。それと同時に怒りと苦しみまで
もがこみ上げる。

金属音が耳に響く。かなり近い距離でうるさいほどだった。

目を開けると意識はあり、腹立たしいグリーの顔が見える。俺
は、死んでなかった。それどころか大剣は俺に触れてもいない。

「殺すと思ったか？ 死んだと思ったか？ 残念。だったな。俺は
てめえを殺しもしないし、死なせるつもりもねえよ」

信じられない言葉だった。今までそんな素振りすら見せずに、本
気で殺しに掛かっていたグリードがそんな言葉を口にするのは、俺
にとって予想外すぎる行動だった。

もしかして、これは何かしらのイベント扱いなのか……。
イベントの負け戦闘や、一定時間持ちこたえたとイベント発生、
というのは別に珍しい事ではない。

だからグリーの取った不可解な行動がイベントの一端だとする
のならば、この状況を何とかしてくれる助っ人なんか来る可能性
はある。

それを僅かでも信じられるのならば、そこに希望が生まれる。

「言つたろ？ てめえの目の前であの女共と遊んでやるって！ だ
からてめえは殺さないんだ……ん？ つはいい表情だな。希望が絶
望に変わったようなその表情。心地いいぜ」

僅かでも、極僅かでも、その光を見出そうとした自分が馬鹿だったと知った。

だからもうこいつは信じてはいけないのだと、そう確信した。だから俺は左手に力を込める。

そこに握られたトツネの短刀が、今なら届くのだ。俺の絶望に油断し、かつ至近距離にいる今なら、短刀のリーチでもグリードの生身に届く……！

息を吸い、体に無理矢理力を込めて、大剣の柄を持つグリードの右手の鎧が守っていない部分目掛けて短刀を放つ。

「！ つぐ……」

捕らえた！ 俺の行動にすぐさま反応したグリードだったが、やはり油断しきっていたようで、避ける前に短刀が突き刺さる。

そして唱える。今度こそ光を見出すために。

「ディスプレイ
解呪！」

短刀が青く光る。一際強く光ったと思えば、すぐにその光はしぼんで消える。

隙を逃さぬようにすぐさま右手の剣を不安定な体勢ながらも振って、少しでもダメージを通しておく。地面に倒れたままの体勢からだ、鎧の隙間や鎧の力バーしていない部分に、片手剣を当てるのはその長さからいって難しいのだ。

腕の振りを使って今度は体勢を崩させるため片足を狙った攻撃を仕掛ける。鎧ならばその重さのせいで一度倒れてしまえばこっちのものだ。

作戦は順調だった。

グリードが体勢を崩した隙に起き上がり、大剣に足をかけて使え

なくしてから、首に目標を定めて右手の剣を素早く振った。

手に感触が伝わる。……………硬い、何かにぶつかる感触が。

グリードはその何も持たない手を掲げ、手甲によって改心の一撃が防いだ。

すぐに身を引く。取っ組み合いになっても勝てる見込みは少ない。そもそも対術なんて現実世界でも習った事すらないし、デュアルワールドでも剣ばかり降っていたのだから当然といえば当然なのだが、どのみちこれで解呪が成功していれば、再び魔法を掛けるなりするはずだ、その隙を今度こそ逃さなければ、行ける……………！

未知のものであればどうしようもないが、既知のものであれば破るための対策も考えられる。

「……………ツクツクツク……………魔法の初歩すら知らないとは……………とんだ騎士様だ」

すぐにその意味が分かった。その言葉は……………解呪が強化魔法には意味を持たないのだと、そう告げていた。

「残念だが徒労に終わったな。所詮安物の玩具か。どうする？ 万策尽きた今、お前には勝つ術はあるまい。……………そうだな、ここまで逃げ延びた褒美だ。裸で地面を舐めるといふのなら、お前も俺達の後で、女共と遊んでもいいぞ。どうだ？」

腐つてるとしか言えない。ありえない。そんな事、ありえないし、させもしない……………！

……………でも、グリードの言うように俺に策はない。

それに……………俺は内心負けたくないと思いつきながら、……………その実全くと言っていいほど、有利にすら立てていない。

……………それで勝つなど考えるのは……………我ながら滑稽だと思ってしまう。

「何しよばれてんだ！ ニケー！！」

声が聞こえた。それはトツネの声。励まし、激励する声。

「頼む……勝ってくれよ……！！」

スーッと体に冷たいものが抜けていく感覚がした。

多分、俺は無意識のうちに手加減というものをしていた。いや……正しく言うならば躊躇していたのだ。相手が人だから、人の形をしていたから。

……グリードは敵だ。倒さなきゃならない敵。人ではなく、魔物と同じ扱いでいい。そう自分に言い聞かせる。

……助けるべき人と同じ存在である者を、魔物と同じ物のような見方をするなんて、都合のいい事なのかも知れない。

だが今だけは……。

再び対峙した俺とグリードは睨み合っていた。

俺はただその態度、行動、思想、何もかもが気に食わなくて、腹立たしくて。

グリードは表に出す態度こそ余裕を保っているが、その手につけられた傷といい、俺の行動にそのはらわたは煮えくり返っているはずだ。

だからもう二人とも、ただ相手を倒すのではなく、殺す事しか考えていなかった。このデュアルワールドで死がどのような形になるのかは知らないが、いずれにしろ決着はつく。それだけで十分だった。

そして、二人は地を蹴った。

剣劇の終着

多分、それは躊躇する必要もなかったのかもしれない。

相手はデータの塊で、俺は意識こそ生身のものだが、体は同じデータの塊。

だから一切の容赦もなく、自分の身が削れようと痛みすら感じないこの体を、使い捨てるように使えば、強大な相手に立ち向かうのも難しいことじゃない。

腕一本を消費して相手の動きを止められるのなら——勝てるのなら安いものだ。止められる時間がたとえ少しの間でも、急所をつくには十分な時間。

互いの距離が一気に縮まる。数秒と持たないでぶつかり合う程度の距離しかないのだから、互いが互いに向かって走れば、そうなるのは当たり前のことだ。

グリードは一切の小細工もなしに、魔法で強化された力を頼りにして、無造作にその大剣を振るう。

まともにぶつかり合えばまず俺が負ける。それは今に限らず最初からそうだった。だから俺はグリードの剣をまともに受けることはしない。……いや、俺のしようとしていることはまともに受けるといったほうが正しいのかも知れない。

言わば、肉を切らせて骨を絶つ作戦なのだから。

距離を測り、右手を振り絞る。弓を引くように限界まで後ろに引く。全てはこの一突き——スキル『ストライク』で決める。そして左手やその他のことは全て捨てる覚悟だ。ただ一回だけの攻撃に全てをかける。そしてそれで全てを終わらせる。

グリードは案の定考えなしの振り下ろしだったが、単純にそれだけでも俺にとっては致命的な脅威だ。でも引かない、引けない！体を捻り左手を構える。自分の体を抱くように構えた短剣はフェイクだ。斬りつける格好はするものの、実際はグリードの大剣を受

け止め、横にそらすだけの盾。

距離を測り、丁度グリードの顔の位置目掛けて、左手を右から左へ薙ぐ。

俺の捨て身の攻撃に多少は驚いたようだったが、それで止まるほどグリードは臆病ではなかった。急制動を掛けて速さを押さえ、首を後ろに反らして短刀を避ける。

グリードの大剣はまるでグリード自身とは別の意思を持つように止まる素振りすら見せずに俺の体を両断しようと襲い掛かる。

それを振った左手で横合いから殴りつける。

大きく弾けるぐらいの力があればそれで傷を負うこともなかっただろうが、如何せんそううまくはいかない。だが予想通りだった。左手の感覚は一切がそぎ落とされたが、まだ体は動きをやめない。引き絞った右手に力を込め、急制動のせいで切り取られたように動きを止めたグリードの首へ、狙いを定め、打ち抜く。

風切るように、俺は腕を最大に伸ばしきった。

グリードを殺すための剣はその首を確かに傷つけていた。

真つ二つではない。首の横を掠めるように俺の剣は伸びている。

直撃しなかったのはグリードが直前で避けようとその首を無理矢理動かしたから。まずい、とその瞬間は思ったが、結果を見れば避け切れなかったのだから、これで十分だった。

グリードが膝を折って地面にうずくまり、大剣は派手な音を立てて地面に放られ、その両手で切り裂かれた首筋を抑えている。

明らかな致命傷だった。首筋を切られればその血管から溢れんばかりの血がこぼれる。それはすなわち死ぬ事と同じ。その猶予期間が出来ただけだ。

グリードの仲間であるステイドは、強化魔法を使っていたんだ、回復魔法ぐらい持つてはいるだろう。これで結局殺す事なく、殺される事なく事件は収束できる。後は俺が回復させる前に剣を突きつけて、回復させたきや負けを認めろ！ とでも言えばそれで終わる。助けられる……。

そしてそれを実行しようと剣をグリードに……………え？

そこにはうずくまったままのグリードが痛みを堪えるように傷口を押さえている。そして……………その抑えた両手の隙間から伝い滴り落ちるのは真っ赤な鮮血。

ちよつと待て……………このゲームは年齢制限がない。だからこんなにアルな表現は許されていないはずなのに……………グリードから滴るもの、それは紛れも無い血だ。

ある予感が頭によぎり、恐る恐る俺は自分の左手を、グリードに勝つために捨てた左手を見る。

言葉は出なかった。息を吸う事も吐く事も忘れ、それを見てしまった。

抉られた肉が裏返し、その隙間から血が滴る。それを認識してしまった瞬間、体を痛みが支配した。

俺はその場で膝をつく。

「な……………んで……………!!」

ありえない。こんな事はある。なのに現実としてそこにあった。

足音が聞こえる。それも複数の。

苦痛に耐えながらも顔を上げると、シア達が一斉に駆け寄ってくる姿が見えた。

少しほつとする。傷み自体が和らいだ訳じゃないが、それでも気休め程度にはなる。なにせ俺の勝利条件はこれで達せられたようなものだから。

最後に立ち上がる。ゆつくりと確実に。本当に最後の力を振り絞って。

シア達と同じく駆けて来たステイードに俺は震えた剣を突きつける。

——そう、これで終わり。これを言わなければ……………。

ステイドは痛みを堪え、死の恐怖に耐えるグリードと俺を交互に見る。その顔は不安に満ちた顔。それを鼻で笑ってやる。そして俺は告げる。

——そして、それを聞かなければ、終われない。

「俺の、勝ちだ……。負けを、……認め、ろ」
「……………ああ」

視界が暗闇に支配されていく。体は痛み、意識は眠気に。俺は全てを投げ出して、全てを支配され、意識を失った。

剣劇の終着（後書き）

短いお話ですがこれで一区切りと言う事で投稿させてもらいました。次の展開へと進む前に一度この物語を再構成したいと思っておりますので、しばらくは投稿の方も無くなると思います。この言葉を無かったように次を投稿するかもしれませんがね……。

休息の一時（前書き）

前回の後書きなんてなかったんです。一応手直ししていますけど、やっぱり先を書きたい気持ちもあるので、ペースを落としていく方向にしました。

休息の一時

……何か声のようなものが聞こえる。

『システム制限の一段階目が解除されました。引き続きゲームをお楽しみください』

明瞭な女性の声だった。頭に直接響くような不思議な声。

声によって揺り起こされた意識が、体の感覚を引き戻す。

……体が重い。ああ、そういえば俺はグリードと戦ったんだっけか……。

それで最後に捨て身の攻撃で一撃を食らわせて……そして、勝った。だけど俺も深手を負って……そのまま……。

記憶を探る。そして思い出す。あの鮮血の惨状を。

何で？ どうして？ あの時疑問に思っても、その答えを考えるほどの余裕はなかったが……今は考えるまでもなく、俺は答えを知っている。

システム制限解除……。それが血と傷みを俺に及ぼしたのだ。

何をきっかけにその現象が起きたのかは分からないし、そもそもその制限が解除されるような事はあつてはならないはずなのに、現に俺の身に降り注いでいるのだから、それは実際の出来事だと捉えるしかない。

粗方の情報を頭の中で整理してから、目をゆっくりと開く。

静かだった。耳をそばだてれば遠くの方で相変わらず怒声や鍛冶の音が聞こえるが、それが聞こえるのはこの部屋が静かなせいでもある。

窓から差し込む明かりは夕日の色をしていて、部屋をその色に染めていた。部屋は質素な造りだったが、宿よりはまだ生活感がある。ふと、俺は視界の端に映ったものに気付いた。寝ぼけ眼もそのおかげで覚める。

枕元にもたれかかるように眠ったシアの頭を撫でようと、包帯で

巻かれた左手を動かそうとする。

「つく……………！」

僅かな動きだけでも声が漏れ出てしまうほどの激痛が走る。腕から肩に傷みは伝染し、左半身までも支配する。

まるで長時間の正座で痺れた足のような感覚に近かったが、それに傷みが伴っているのだから笑い事じゃない。

「ん…………二、ヶ…………さん？ 目が…………」

多分きつと、そこでシアの動きが止まってしまったのは、俺が変な状態で、引きつった笑みを浮かべながらシアを見ていたからだろう。傷みを耐えながらも俺は必死に言葉を振り絞る努力をした。そしてようやく捻り出せたのは「…………たんま」というどうしようもない言葉だった。

「大丈夫、ですか…………？」

シアの優しい言葉に、健康そのものの右手を振って大丈夫だとアピールする。

二人で腰掛けているベッドは、流石に二人分の体重のおかげで沈みはするものの、その弾力のおかげで心地良い。使われていたのか分からないが、綺麗なシーツで、ホテルのような清潔さだ。

「なあ、シア…………あれから、どうなったんだ？」

俺は自分の傷よりもそっちの方が気になっていた。

戦いに勝って、負けを認めさせて……。そこまでしか俺は知らない。だからその後の事、傷を負ったグリードとその仲間である魔法使いステイード、ニアさんやシアも傷を負っていたし、シアは俺の看病をしてくれていたぐらいだから大事はないと思うが、それも含めて、どうなったのか。知りたかった。

「私と、ニアさんは軽い打ち身だけ……。あの人も剣は使わなかったから……。今はニアさんとディアさん、トツネちゃんが晩御飯の買出しに行ってます……」
「そっか……」

女は強い。体じゃなくて、なんというか心の切り替えの速さ、とでも言うべきか。もちろん全く気にしてない、考えてないって訳ではないだろうけど、そこを割り切って晩御飯の買出しに行けるのは、心をしっかりと持っているから、なのだろう。

俺ならばらくは怪我を理由に介抱してもらうのに……。

「あとあの人達はその場で傷を治してから、どこかへ行きました。何も、言わないまま……」

「……そっか。まあ、あの後また横暴な事しなかっただけマシか……」

実際、あの二人にはそれを行うだけの力もあっただろう。

グリードは傷さえ治れば普段と全く変わらない力を出せたはずだし、ステイードも強化魔法と治癒魔法しか使っていないから、それしきでMPが切れることもないだろう。その風貌から察するに魔法主体だとすぐにわかるし、たかだか数回の魔法でMPが切れてしまふようなら、グリードの相棒的立ち位置にはいられない。あの性格だ、弱ければ容赦なく切り捨てるはず。

それでも何もせずその場を去ったのは、傲慢故に屈辱に耐えれな

かったか、俺に敬意でも表してくれたか………ないな。まずない。
あの性格でそれはない。

まあ、いいか。何もせずどこかへ行ったんだ。今後会わないことを祈ろう。冒険者らしく魔物退治にでも励んでいれば、俺はもう何も気にする事はない。

わざわざ探し出してあれこれ言うのも面倒だし。

「そうだ、シア。ここは一体どこなんだ？」

「ここはトツネさんの家の二階です」

「ああ……」

ディアさんが現れたのは確かに二階だったな。それならこの生活感も納得いくが、誰の部屋だとかは考えちゃいけないだろう……。

そんな事を思っていると声が聞こえる。俺やシアじゃない、それでいてどこか聞いた事がある声が複数。少し竦ったような感じだが、言葉としてははっきりと聞き取れる。

そういえばディアさんが一階の会話は二階に筒抜けだって言うってたな……。

「母さん、準備手伝うよ」

「あら珍しい。頭でも打ったのかしら」

「そうじゃないよ。……ほら、今日の事件だって私が原因のようなものだし……料理ぐらい振舞ったってどうしようもないと思うけど、それでも……」

「……わかったわ。すぐに準備しましょう。ニケ君が目覚ます頃には出来立ての料理が並んでいなきゃ、示しがつかないわ。ニアは休んで。まだ傷が痛むでしょう」

「すまない、姉さん。食事まで……」

「気にしないの。子の責任は親の責任。あなたは私の子供を守ろうとして傷付いたのだから、謝られちゃ私が困るわ」

その後はもう声は遠くなり、会話は聞こえなかった。おそらくはトツネとディアさんが料理の準備に、ニアさんはそんな二人の後姿でも見ながら椅子にでも座っているのだろう。道具屋にいた時も心地良さそうに座りっぱなしだったし。

しかし、今の会話からするに、どうやら俺がこのタイミングで下に降りるとまずい気がした。

「もう少し、ここにいた方がいいかな？」

俺と同じく下の会話に耳を傾けていたシアに、俺はそんな事を投げかける。料理が出来たタイミングで降りた方が、色々と向こうにとって都合も良さそうだった。今から下に降りても何もする事もなければ、ただディアさんたちが申し訳なく思ってしまうだけだ。

それに……。

「……そう、みたいですな」

もう少しシアと二人きりでいてもいいだろう。あれだけの事をやって、予想外の痛みにも耐え、その結果として少しぐらい甘えたって誰も咎めはしない、はず。

はにかむシアの顔は夕日のせいで赤く染まっていた。

「……………」

沈黙が部屋を覆いつくす。何というか……この雰囲気は、どこことなく苦手だ。

シアと視線が合う。大きくて丸いその目に、吸い込まれるように魅入ってしまう。視線をずらす事は出来なかった。いや、俺が許さなかった。

時が止まったような錯覚を覚える。夕日の色が少しづつ変わっていくのが見て取れるのだから、それは間違いなく錯覚なのだが、それでも二人は止まっていた。

「……あ、あの！」

先に沈黙を破ったのはシアだった。日も落ちかけているというのに未だに顔は赤くて、必死にその言葉を紡いだのか、緊張で今にも心臓が破れそうな顔をしていた。

俺はそんなシアの顔を見て笑ってしまう。そのあまりにも真剣ながらもどこか間の抜けたような表情を見て、笑わずにはいられなかった。

「な、なんで笑うんですか……！」

少しむくれた表情へとかわるシアへ、俺はようやく笑いを収め、改めて向き合う。

「いや、悪い。シアを見てると面白くてな……」

「ど、どういことですか……！？」

今度は驚き慌てるような表情。見てて飽きない。

そんな表情を、ずっと見ていたい。もっと見てみたい。そんな事を思ふのはきつと変なのだ。

シアはゲームのキャラ。自分の頭脳と思考を持つてはいるが、それはAIであって、あくまで考える頭を持っているというだけ。そこに人間としての意志は……。

……何を馬鹿な事を考えてるんだ。シアは、いや、シアだけじゃなくてこの世界に住む人達はみんな人間だ。だってこんなにも笑って怒って悲しんで喜べる。それを人間と呼べないのなら、俺でさ

え人間じゃない。

デュアルワールドの住人には心がある。何も知らない人からすればふざけた戯言かも知れない。それでも俺はこの世界の住人が人間であると、断言できる。

でなければこの気持ちも嘘になってしまう。

「いや、気にしないで。独り言だから」

「そう言われると余計に気になるんですけど……」

もし俺がこの気持ちを打ち明けたとして、シアはどう受け取ってくれるのだろうか？ ゲーム的にはどうなるんだろうか？ それは見当もつかない。

なにせシステム制限すら解除されてしまっているのだから、これから何が起こきようとも何ら不思議ではない。

ふと思いついてメニュー何気ない仕草で開く。シアには画面は見えていないから、動作だけ自然にしていれば何も怪しまれる事はない。

メニュー開いたのはある一点を確認するため。この世界から脱出する手段である中断とゲーム終了の欄。それらがさっきのシステム制限解除というアナウンスがきっかけで、使えなくなってしまっていたりしないか、それだけを確認したかった。

漫画や小説、ゲームでも、時代を先取りしていて、このデュアルワールドのようなVRゲームで異常が発生し、大概はMMOが舞台だったので数千から数万というプレイヤーがログアウト出来ずに閉じ込められる、なんて話を見た事があった。

それと今のこの状況はまさに一緒なのだ。

世界初のVRゲーム。そして本来ありえない血の描写に痛覚の解放。それはこの仮想世界をより現実世界に近づける事象だ。

そして、ログアウトが出来ずにゲームの世界に閉じ込められた人々は、大抵が現実の死と隣り合わせの環境に置かれる。いわゆるデ

スゲームという事態に陥る。

アバターが自分自身となり、ゲームの世界で生き抜いていく。そんな筋書きに必要な条件が今の俺には、このデュアルワールドという世界には揃っていた。

MMOではなくオフラインのRPGなので、現実の人間がプレイヤーと言う事はないが、その代わりに仮想世界の人はたくさんいる。そして俺のアバターはシステム制限解除に伴い、より現実的にこの世界を感じる事の出来る、年齢制限などどこ吹く風の描写と、同じく痛覚の解放。そして俺が今確認しようとしている、ログアウトが出来ない、という状況にもなっていれば、ここは死が隣り合わせの箱庭と化す。

恐る恐る視線を向ける。中断とゲーム終了の文字がそこにあった。その色もまた白く、ログアウト不可能という状態にはないようだった。その見た目だけならば。

ただそこにいつもと変わらなくあるだけで、それを無条件に信じられるほど俺はこのゲームを普通に遊べた訳じゃない。グリードとの戦いでそれを知った。

ログアウトできなければそんな表記も何も意味はなさない。

だから俺は中断という欄に狙いを定め、指先で叩いた。

もし成功したとしても中断だけなら、デュアルワールド内の時間は進まずに済む。叩いた指先に反応して次の画面が空中に現れる。改めての確認の画面だ。それをもう一度力強く肯定の文字を叩く。

その瞬間、体から感覚が抜け落ち、意識が途絶えた。

合間の日常

目を開いた。そこは生活感のある見知らぬ部屋でも、隣で可愛い女の子が心配してくれるなんていう状況でもなく、左手に常に疼いていた痛みすら消え去って、何年と過ごした自分の部屋だけがあった。

俺は、無事に現実世界に戻ってきた。これで、あのゲームがデスゲームではない事が証明された。……もつとも、今は、だが。

あの声はシステムが第一段階解除された、そう言っていた。

あえて第一段階と言ったのだから、さらにその上、第二段階が存在していても、何ら不思議な事じゃない。具体的に何が解放されるのかは分からないが、どちらにしろそれは仮想現実がより現実世界に近づく、そういったものである可能性は十分にある。それこそデスゲーム状態になる、とか。

一人で考えていてもしょうがない。今は出来るだけデュアルワールドについて情報を集めよう。

こういう時に便利なのはパソコンだ。不特定多数が情報を持ち寄る、巨大な書庫のようなインターネットから、出来るだけ情報をかき集める。

一番欲しいのは、俺と同じくシステム制限解除を通告された者の情報だ。類似点でも見つければ何か制限解除の鍵が見つかるかもしれない。

あとはこまごまとしたゲームとしての情報。現実のように傷みが伴うのならば敵の情報、フィールドの情報は出来るだけ知っておいたほうが危険は少ない。

攻略前から情報を知るというのは、俺のゲームの楽しみ方に反する事で、普通ではまずありえなかったが、今は状況が普通じゃない。この明らかに違法で無法な現状を、警察などに通報するというのも考えたが、それは留まった。現状では十分な証拠がないのだ。

複数人、それも二人や三人ではない、結構な数の人がそう証言するならば警察も動き出してはくれるだろう。しかし今は俺しかシステム制限を解除した者を知らない。

だから俺以外にもシステム制限を解除したものがいる事を確かめてから通報した方が、何かと都合が良い。

俺一人で通報して、良い年した男がゲームばかりして頭がおかしくなった、とも思われたら一大事だし、ここは慎重になってもいいはずだ。まだデュアルワールドで致命的な事態が起きた訳じゃない。現実世界に戻れば痛みだって消えるのだから。

手早くパソコンの電源を入れ、情報の海へ飛び込む。デジタル表記の時計が示す時間は三時過ぎだった。

俺は時を忘れて出来る限りの情報を集めた。

しかし俺のようにシステム制限を解除した、という情報は一切なく、見る限り誰も彼もがただVRゲームとして楽しんでいた。

ふと、まるで俺だけが異常な存在になって、世界から取り残されたような、そんな感覚を覚えてしまう。

もしかしたらこの世界すらまだ仮想現実の中なのではないか、そんな事を思ってしまう。

夢から覚めるには頬をつねるといい。そんな事を思い出し、唐突に自分の頬をつねって見るが、もちろん痛くて俺はただ自分を苛めているだけだった。……そもそも仮想現実ですら傷みが再現されるのだから、こんな事しても何の証明にすらならない、全くの無意味だった。

気を確かに持て。そう自分に言い聞かせ、思い込む。

改めて集めた情報を元に判明した事実を頭の中で整理する。

まず事の始まりは全員が共通だった。王様の下に集まった状態で王様の言葉と共に決起の声が上がる。そして門の前まで出ると後は各々自由行動、という流れだ。

その後はもう各自が好き勝手やっていたらしく、あまり共通した情報は得られなかった。もっとも出現する魔物や、街の位置と施設

など世界の基礎は一切変わっていないらしく、ウルフリーダーに食
い殺された、だとか、道具屋のニアさんが俺の好みだとか、それ
らに遭遇している俺にとっては、どこか微笑ましくなってしまうよ
うなのも目にした。

しかしシアは一切その名前を挙げられていなかった。冒険の始ま
りからすぐの広場で人だかり作ってあれば、誰か一人ぐらいは俺と
同じように食いついてもおかしくないのに、ましてや可愛い女の子
ともすれば男達は放っておかないはずなのに。

起動時の乱数で発生するイベントなのだろうか……。そうだとす
れば俺は相当に幸運だったという事になる。

正直俺一人、初期レベルの初期装備で、ウルフリーダー達に勝て
る見込みはゼロだった。シアがいたからこそ俺は生き延びる事が出
来たのだ。

それ以外でもシアの力を借りっぱなしだ。戻ったら改めてお礼の
一つでもしないと……。

そこまで考えて、俺は気付いた。

俺はいつの間にか、またあの世界に戻る事を当たり前のように考
えている。

傷みが再現される世界だというのに、もはやゲームとはいえない
ほど危険な世界なのに、それでも俺はあの世界でシアと共に冒険者
として旅をする事を、当たり前のように、それが当然だと、疑問す
ら持たずに思っていた。

……もしかすると、これがシステム制限の鍵なんじゃないだろう
か。俺はそんな事を考えてしまう。

どんなに危険があろうとも、どんな困難だろうと、向かっていけ
る。それを誰かのために——俺ならシアのために。

俺は現実世界と仮想世界を行き来できる。だがシアは仮想世界の
住人で、現実世界には来る事は敵わない。再び会うには俺が仮想世
界へ向かわなきゃいけない。

でもそこは俺にとって死と隣り合わせの世界だ。環境の整ってい

る現代日本に比べて、魔物が蔓延る無法地帯の方が多い世界が、どれだけ危険かなんてのは比較するまでもなく分かる事だ。

それでも大切な人のために、立ち向かえる気持ちがあるかどうか。それが鍵となるのではないか。

……荒唐無稽もいいところか。

第一そのためには誰かと一定以上に親密になった上で、さらにその気持ちを汲み取る事が出来なければならない。VRGだけで俺の心が読み取れるとも思えないし、前提が揃わないのなら、すべては無意味だ。

見慣れた天井に向けたため息をつく。こうしたのはもう何度目か。もはや癖のようなものだ。

椅子が軋む音を立てて、俺の反った背中に合わせて曲がる。色々とあったが、真相ははっきりとしない。分からない事が多すぎる。

その真相を暴くためにはゲームをクリア、もしくはシステム制限とやらを解除していくしかないのかも知れない。もっともそれすら俺の推測に過ぎないが。

もう一度ため息をつく。考えすぎて知恵熱で倒れそうだ。パソコンの電源を落とし、椅子から離れベッドへと倒れこむ。その衝撃でVRGがベッドから落ちそうになったのを慌てて確保し、安全な所に置いてからうつ伏せになって再び考え込む。

幾つかの疑問は浮かべど、その答えは闇の中。思い出したのはシアの顔。

瞼が重い。ああ、俺は眠いんだと自覚した時には、もう睡魔の誘惑に勝てないほどに眠かった。

白を基調とした内装は清潔さを感じさせる。家具等は綺麗に整理整頓されていて、使っているのかどうかも怪しい綺麗さだったが、

ほこり等はなく、ちゃんと手入れが行き届いているようだった。

その中で静かにその駆動音を鳴らしながら、点滅する光、点灯する光が散りばめられた大きな箱のような物体の前に、一人の男がいた。全身が彩色のない地味な服装で、その格好は明るさと清潔さを演出する部屋の色とは反対で、混ざる事のない浮いたものだったが、それでいてどこか馴染むような矛盾する雰囲気だった。

優しく撫でるようにその箱の表面に手を触れている男の表情は、少し長めの髪に潜んでいたが、それでも垣間見える顔はどこか寂しげで、それでいてどこか悲哀なものを纏っていた。

「……やつと、一人目だ」

男は呟いた。誰かに語りかけるように、それでいて誰もいない空間での独り言のように。

それに応える者はいない。

それでも男はそれを気にも止めず、ただ稼動する箱に手を掛けたままだった。

まぶたを持ち上げると眩しい陽光が目染みる。そういえば夜にカーテンを閉める事も忘れて、そのまま寝入ったんだっけか……。思い起こすところどこか遠い思い出のような、デュアルワールドでの出来事が頭をよぎる。それでもベッドの脇に置いてあるVRGを被り、再びその世界に行けばそれが夢や幻ではない事は実感できるだろう。

携帯の画面に触れて、真っ暗な画面を消し、現れた待ち受け画面で今の時刻を確認する。

今日もバイトは休みを取っているために出勤する必要もないが、明日からはその分働く羽目になる。まあ、それも当然の代償だろう。

幸いにも俺がゲームをプレイしていない時間は、ゲーム内の時間も止まる。自分の都合で中断出来るのは色々と助かるものだ。

現在時刻は朝の七時。雀がその声で朝の挨拶をしているようだった。

真夜中まで起きていたのに、こんな時間に目を覚ましてしまうのもなんだか不思議なものだ。いつもなら昼前まで寝ているのが当たり前なのに、今日に限っては健康的な目覚めを体が欲していたのかも知れない。

睡眠時間自体はとても健康的なものとはいいがたかったが、少なくとも二度寝をするぐらい眠い訳でもないし、目が覚めてしまったのだから仕方ない。

折角この時間に起きてしまったのだし、久々に朝の家族の団欒でも楽しむ事にしよう。

デュアルワールドの事は後回しだ。ゆっくり考えても手遅れになる事はない。

そして俺は部屋の扉を開け、居間へ向かうのだった。

階段を降りて、居間に顔を出すと鼻をくすぐる良い香りがした。

見れば母さんが台所に立っていて、慣れた手つきで料理をしているところだった。

台所はカウンターのようになっていて、二階から降りる階段の所からだと、店員と客が向かい合うような形に自然となってしまう。

「おはよう、母さん」

「あら珍しいわね。おはよう、啓介。そうだついでだから由紀を起してきてくれる？」

「あー、うん、わかった」

居間に入っすぐに俺は踵を返して階段を上っていく。

妹の部屋は俺の部屋の隣だ。今日は平日だし、高校生はしっかりと学校のある日だ。この時間まで寝ているってのも高校生としてど

うなんだ、とも思わないでもないが、まあそこら辺は俺には関係ないのでどうでもいいのだけれど。

すぐにドアの前まで辿り着く。二回続けてノックをするが反応はない。もう一度……反応なし。最後のダメ押しでもう一回。結果は言うまでもなかった。

仕方ない……。あんまり気は進まないが……ドアノブに手を掛けてゆっくりと捻り、開く。

中は暗かった。とはいえ小玉電球——豆電球だとか常夜灯などと呼ばれる事もあるが——ともかくその夕焼けのような光のおかげで全く室内の様子が分からないという事はなかった。

しかし、明かりがついていようと、足の踏み場がほとんどないような状態だった。

暗がりですぐ具体的に何なのかというのは分かりにくい、床にこれでもかというぐらいものが散乱している。主に脱ぎ散らかした服だ。そのあまりの汚さに、つい、ため息が出てしまう。仕方ないのでその中を足の踏み場を見極めて進み、カーテンの掛かった窓へと近づき、一気に開く。

カーテンは音を立てて左右に引かれ、眩い日の光が窓を抜けて部屋を一気に明るくする。

「ん……っ……」

由紀の声が聞こえた。流石にこれだけやれば目も覚ますようだ。

俺は再び足場を探しながら部屋の電灯まで行って電気を完全に消す。

「……あ、れ……って、何やってんの・兄貴」

花も恥らう高校生としてどうなのかと問い詰めなくなる格好のまま、寝ぼけ眼を擦る由紀に俺はまたもため息をついてしまう。

「時間だ時間。起きないと遅刻するぞ」
「ふーん……あ、本当だ」

もぞもぞと携帯に手を伸ばして時間を確認する辺りは、兄妹故か現代の若者だからなのか。というかこいつは嘘だとも思ってたんだろつか……。もう一度ため息をつきそうになって、俺はそれを止める。

ため息の数だけ幸せが逃げる、とはよく言ったものだが、実際問題ため息をついてばかりでは何も進展がない。ため息をつく暇があったら動けと言ってるようなものだ、俺は思ってる。

「二度寝するなよ」
「分かってるって」
「あと部屋を片付けろ」
「うるさい！」

そんなやり取りをしながら俺は部屋をそそくさと出て扉を閉じる。俺の朝の一仕事はこれで終わりだ。とりあえず歯を磨いて、シャワーでも浴びるか……。

再び居間に戻るとテーブルには料理が並び始めていた。いつも俺が朝には大体寝たままなので、朝食は基本的に冷蔵庫に詰められているのだが、今日は珍しく朝に起きて来たからか食卓には俺の分の料理も並んでいた。

手早く手際よく配膳する母さんにしっかりと由紀を起こした事を告げて、俺は洗面所へと向かった。

俺と由紀、母さんの三人が食卓に座り、テレビの音声をBGMにして食事を楽しんでいた。

「何で兄貴がこんな朝っぱらから起きてんのよ」
「起きたからだ」

朝の食事は目玉焼きとトースト、それにサラダという随分とオーソドックスな品揃えだったが、朝にのんびりと食事をする事のない由紀と、そもそも小食な母さんはこれで十分だった。俺には少し物足りないが、腹は膨れるので何も言う事はない。むしろ毎日手間を掛けさせている分、この程度で文句を言うのも馬鹿らしい。

「でも本当に珍しいわね、啓介がこんな朝から起きてくるのも」
「たまたまだよ」

そんな会話を繰り返していると、ふと聞き慣れた単語が耳に飛び込んでくる。

『世界初のVRゲームは、発売から一日たった今日もまだその熱は冷めやらぬようで、その中でも一番人気なのはデュアルワールドと言うRPGゲームらしく、その購入者の数は……』

……思わずテレビ画面に見入ってしまった。そういえばまだ一日しか経ってないんだったな、現実時間では。

デュアルワールドでは実質二日に近い時間を過ごしている。それも色々と詰め込まれた濃密な時間だ。バイトで過ごす四時間が向こうの世界では一時間足らずのようにも思える。あくまで俺の体感での話だが。

「大丈夫なのかしらね、この……VRゲーム？　って言うのは……」
「大丈夫なんじゃない？　売られてるんだし」

母さんの心配する言葉にも由紀はどうでも良さそうに軽く返している。

しかし、俺は何とも言えない気持ちになっていた。

何故なら俺はそのVRゲームでありえない事態を体験しているのだ。それをここで告げるのは……。

迷った。でも、俺はそれを言わない事にした。多分言えば母さんは心配するし、由紀は馬鹿じゃねーの、とか言ってくるだろうけど、どのみちVRGは俺の手元からなくなる事になるだろう。VRGだけじゃない。そのソフトであるデュアルワールド、それと……俺がその中で過ごした記憶も一緒に^{データ}。

そんな事は今の俺にとってはありえない選択だ。

「……きつと、大丈夫だよ」

「……………兄貴なんか変だよ」

あっけらかんと言いつつ由紀の言葉に俺は驚いた。そんなに俺の心情は顔に出ているのだろうか……。

「そんな事ないさ」

「いや、絶対変」

……全く妙な所で勘がいいのは母さん譲りなのか、女の勘って奴なのか。やっぱり女って怖いな。

とはいえ真相を話せば、さっき考えたとおりの展開になってしまふし、俺は話題を無理矢理変えるために、一度息を細く吐く。

俺の反応を待っているのか由紀も母さんも箸を止めて、俺の事を見ている。

「由紀、時間だぞ」

「えっ、あ、本当だ。まずっ！」

俺がそう言うのと二人は一斉に慌てだす。

由紀は急いで食べ終わりそうだったトーストを全部丸めて口に放り込み、皿を全部重ね一つにしてから台所へと小走りで持っていく。母さんも由紀を追うように椅子から立ち上がり、玄関へ向かう。由紀の見送りのためだ。俺も今日は起きているし、久々に見送つてやるとするか……。

昔は一緒に登校したものだが、今はそんな事は全くなくて、極稀に見送りをする程度に収まっている。

玄関を開けて飛び出そうとしたところで俺も母さんに追いつき、玄関口に立つ。

「それじゃあ行ってくる」

「行つてらっしゃい」「行つて来い」

二人して由紀を見送った。扉が閉まる寸前に由紀がこっちを見ていたが、きつと俺がどこかいつもと違つと、そう感じているからなのだろう。

ゆつくりとドアは閉まっていき、やがてつまらない音を立てて完全に閉じた。

それを確認してから俺と母さんは居間へと戻ってくる。テレビの話題はもう別のものに切り替わっていた。

その後は俺と母さんが食事を食べて、俺が家事をしていると母さんがどうやら出る時間になつたらしく、今度は母さんを見送るために俺は再び玄関口に立った。

「それじゃあ行ってくるわね」

「ああ、行つてらっしゃい」

俺はスーツに身を包んだ母さんの背中を見送った。時刻は大体九時ぐらい。

そろそろいつもの俺が起き出して来る時刻でもあるのだが、今日に限ってはそんな事もなく、逆に見送る立場になってしまった。

そして俺は改めて気合を入れる。全ては家事をこなすために。

何というか、久々な朝の空気に俺の気分は何故か高まって、母さんが多分いつも通りの家事をこなそうとしたのだろう。それを俺は制して「後は俺がやっておくから」なんて言ったので、母さんは喜んでいたので、一方で「やっぱり由紀が言うように少し変よ、啓介」なんて言われもした。引きつった笑いだけでやり過ごしたが。

家事はすぐに終わった。洗濯、食器洗い、床掃除等など……。

普段は俺が起きる前に母さんが全てやってしまっただけで、俺だって手順を全く知らない訳じゃない。そもそも学校に通ってた時は毎朝やってたものだ。

全てを終わらせて俺は自室に籠る。もちろんやる事は一つだ。

VRGを手取る。それを被ってVR移行ボタンを押せば、それだけであのシアと二人きりの空間に飛ぶ事になる。

何をどこまで話していたかなんてのはもはや空の彼方まで飛んでいってしまったが、そこは流れを察知し、誤魔化して何とかするしかない。

息を吐く。なんだか最初に被った時よりも緊張しているような気がしないでもないが、多分本当に緊張している。……心臓の鼓動が強くなっている。

それら全て飲み込むように意を決して勢いよくVRGを被り、ボタンを押した。

感覚は吸い取られるように無くなり、思考も全てが遮断された。

現実と仮想

俺は、自分の意思でこの世界に戻ってきた。

左手に傷みが再び宿り、俺を苛む。鬱陶しいその痛みも今は俺が仮想世界にいる証になる。

部屋は薄暗く、普通ならすぐにも電気を点けるところだが、いまは体を動かす気にもならない。

そもそもゲームのシステムで勝手にやってくれる明度調整のおかげで、最低限の視界の確保はされている。流石に真っ暗闇だと、ものの輪郭が見える程度でしかないのだけど。

今は少しの明かりが部屋を——二人を照らしてくれているから、互いの顔も見れるし表情だって読み取れる。

俺はポツリと呟いた。

それは多分、俺の心の底にあつた想い。

「なあ、シア」

「……なんですか？」

現実に戻った事で生まれてしまった想い。

「もし、自分とは絶対に相容れない存在に恋をしたら、それは許される事なのかな？」

結局、それが全てを隔ててしまうのだ。どんなに人のような容姿を持っていても、どんな人らしい思考を持っていても、それでも間にある溝は埋められない。

「……良いと、思います。それが本当の気持ちなら」

「………そっか」

肩の荷が下りた、とても言うべきか。溝を少しだけ埋める事が出来た、と言うべきか。

なんにせよ、少しは気持ちも楽になる。

もう日は落ちたのか、部屋は暗い。夕焼けの色は欠片すら残っていなかった。

静寂の包む中、軋むような音がした。

「行こう、シア。どうやら準備も終わったみたいだ」

「……はい」

そして俺とシアが立ち上がると、床を鳴らす足音が扉の前で止まり、ノックの音が二回鳴る。

その返事代わりに扉へ近付いて開けると、そこには金色の髪を揺らして立つニアさんがいた。

「お邪魔だったかな」

「……そんな事は」

意味ありげな薄い笑みを浮かべたニアさんに苦笑いで返し、三人は並んで階段を降りていく。

階段を下りると、テーブル同士を引き合わせた急造の大きなテーブルに、料理が並んでいて、机のほとんどを埋め尽くしていた。そして椅子とテーブルだけで一階の空間の三分の一ぐらいは占領していた。

色とりどりの料理が揃い、湯氣を立てて出来上がったばかりだと誇示しているものもあった。

「ニケ君、起きたのね。怪我、大丈夫？」

「ええ、まだ少し痛みますけど、そんなでもないです」

「本当に大丈夫か、二ヶ」

「大丈夫、心配するほどじゃないよ」

ディアさんとトツネに心配されるが、なんて事はない。実際に痛みこそあれど動けない訳じゃないし、食欲もしっかりとある。だから俺はただの怪我人だ。

それにここでいちいち取り合っていたら折角の料理も冷めてしまう。

「そんな事より、食べましょう。冷めちゃいますよ」

俺はそれでも心配そうな表情のトツネに、大丈夫だと後押しするためにも、明るい表情を作り、元気で明瞭な声を作り、そう言った。そして全員が椅子に座り、食事を始める準備が整ってきた所で、勢いよく裏口が開いた。

「トツネ！ トツネは無事か！！」

叫びながら乱入してきたのは、すっかりとした体付きでいてその顔はどこか中性的なのが特徴的で、その背丈は俺と同じくらい。何か動物の毛皮なのか、高級そうな皮装備に身を包むその男は家に入るなり、全員が揃った食卓を――トツネを見て、その姿を確認すると飛びつくようにトツネを抱き上げて、喜びの声を上げていた。

「おお！ 無事だったかあ！ いやあ心配したんだぞ、父さんはお前が……」

「ああーもう！ 寄るな！ 離れろ！」

そんな事を言いながらも嬉しそうな顔を浮かべるトツネを見て、つい口元が綻んでしまう。

「もうヒコネさん。お客さんもいらしてるんだから程々にしてくださいね」

言うのが早いのか、屈強な男——つまりトツネの父親であるヒコネさんの傍にディアさんはいて、その皮製装備を預かっていた。

こうして三人が揃っている場面を見ると、家族なんだなあと思ってしまう。

そして今朝に俺が現実で過ごした時間も、傍から見ればこのように映ったのだろうか……。

その光景を誰も見れるはずはないのだから、その真相は闇の中なのだが。

「その嬢ちゃんがシアちゃんで、その兄さんはニケ君でいいのかな？」

「え？ あ、はい」

俺とシアは二人揃って戸惑いながらも返事をした。

その戸惑いはヒコネさんのその快活な声の勢いに押されたのと、どうして名前まで知っているのか、という二重のものだった。

そんな心情が顔に出ていたのか、ヒコネさんはその様子を楽しむかのように豪快に笑い、言葉を続けた。

「ああ、街の連中に聞いたんだ。一騒動起きた時にそれを解決してくれた冒険者がいる、ってな。流石にトツネやニア姉さんまで巻き込まれるとは思わなかったが……、何はともあれ無事で……っ
ていつでも怪我はしてるか。ともかく命に別状はなく、丸く収まったみたいで良かった良かった。本当に守ってくれてありがとう」
「そんな大したものじゃないですよ」

そもそも俺はシアを守りたかったただけだ。もちろん他の人が傷付くのもいやだし、傷付かせたくないという気持ちも持つてはいたが、その原点はやはりシアなのだ。

だからその褒美であるシアとの少しの時間をもう過ごしたし、これだけの料理を用意してもらって、その上またお礼を言われてもそれは身に余るものだ。

「それと……すまなかった」

「……何がですか？ 謝られるような事はされていませんよ」

「これは町の連中から会ったら伝えてくれと、そう言われてな。手助けも出来ずにすまなかった、と」

そういえばこの街の人々は一切手出しをしなかったな……。唯一抵抗したといえばトツネとニアさんぐらいなものか。

鍛冶やら何やらで肉体的には俺より明らかに強い人たちばかりだったのに、どうしてなんだろう。それに数もかなりいたのだから、全員で一斉に取り囲めばそれこそ被害もなく安全に取り押さえられて、俺の出番すらなかったんじゃないだろうか。

もっとも特殊な形態をしている街だから、特有のなにかまずい事でもあったのかも知れない。

現にこうして俺に謝罪を入れてくる辺り、ただ無視をしていた、どうでも良かった、という具合ではなさそうだ。

「気にしないでください。一応無事に解決したんですし」

「……そうか。ありがとな」

そう言ったヒコネさんは多分、これ以上この話を引っ張るのは勘弁してください、という俺の表情を読み取ってくれたのか、改めてその場を仕切りなおし、それを機に全員が明るく、笑顔になる。

ディアさんは預かったヒコネさんの服を二階に持って行き、父親が

ら解放されたトツネは顔を赤くしながらその頬を膨らましていて、まるで小さな子供のようなようだった。

ニアさんはそれ見て笑い、そのせいで体の痛みがぶり返したのか、体を捻って苦しみを避けながら笑うという何とも言えない状況になり、シアはそんなニアさんを心配しながらもその顔は笑っていた。そして俺は、それを遠目に眺めていた。

もちろん顔は笑ってる。楽しいと思うから笑ってる。

でもどこか馴染めない。あんなに皆生き生きとした表情で、心のままに生きているというのに、それを見る俺の目が曇っている。

楽しいはずの時間に、俺の気持ちが付いて来ない。まるで対岸の火事でも見ているかのように、自分とは無関係なものを見る気持ちでその光景を、傍観していた。

どんなに繕っても、どんなに隙間を埋めようとしても、相容れる事はない。

それが現実と仮想の狭間だった。

ここにいる人達、ここにあるものはすべてが仮想のもの。そして俺だけが現実なのだから、浮いて当たり前、取り残されたような気持ちになるのも当たり前。それでも俺はこの世界に自分の意思で足を踏み入れたというのに、また揺らいでしまう。

……俺は弱い人間だ。現実も仮想も関係ないと、シアがそう言ったように、俺も堂々と胸を張って言えればいいのに、俺の中の何かがそれを認めない。

その存在は俺にも明確に捉える事は出来ないものだ。

だからせめて、この場を壊す事のないようにだけはしなければいけない。それが俺の出来る精一杯だった。

空の星は綺麗だった。いつかの夜、一人で外を出歩いた時を思い出す。

あの時はアビリティを何に振るかで悩み、空中に浮かぶメニュー画面とにらめっこしながら歩いていたせいで、時間をかけて星空を観察する事もなかった。

今思えばそれは凄く勿体ない事だった。何せ現実とは比べ物にならないくらいに星が綺麗なのだ。まるでプラネタリウムを眺めているようで、とても心が落ち着いた。

二階の窓から見る眺めはとても壮観で、闇夜を町の明かりが照らし、遠くでは木々や山々が並び、星空に浮かぶ月は鮮やかだった。

俺が二階に上がる時は、一階で飲み比べをしていたヒコネさんと二ーアさんがノックダウンしており、その介抱をディアさんとトツネがしていた。

そして「今日は泊まって行って」というディアさんの好意に甘えてあてがわれた一室でのんびりと過ごしていた。

シアはトツネの部屋で一晩を過ごす約束をしていたらしく、今夜は俺は一人だった。

とはいえ特にする事もなく、だからこそ景色を楽しんでいたのだ。もつとも、それすらどこか落ち着かない気持ちを静めようと、無意識にしまった行動なのだと思う。

俺は不器用だ。だから両方の世界を確かな現実だと認める事など、出来なかった。

左手の包帯を眺め、あの戦いを思い出す。何のために戦って、何のためにこの傷みを受けたのか。

……そして俺にとって現実とはなんなのか。

その時——小さな音が聞こえた。

振り向くと扉を開けて立つシアの姿があった。

「どうした？」

表情は俺を窺うようで、何か物言いたげだった。

「いえ、少しお話でもしたいなと思ひまして……迷惑、でしょうか……？」

俺に断る理由もない。

むしろ心の底では俺もシアと話したいと思つていたところだ。

「そんな事ないさ。どうぞ、入つて」

シアは俺の言葉を聞くと小さく頷き、ドアは小さな音を立てて完全に閉まつた。

風呂上りなのかその髪は濡れていて、シアが傍まで来るといい香りが鼻をくすぐる。

艶やかな雰囲気纏うシアは、どこかいつもより大人っぽくなつたようにさえ見えてしまう。

「何かしてたんですか？」

「いや何にも。強いて言うなら景色を眺めていた」

「景色……ですか？」

「ああ、星とか綺麗だなあ、つて」

本当にそう思つていた。都会の空は星さえ見えないような、汚れた味気のない空。その色は灰色と言つてもいいぐらいのものだ。

だからこのデュアルワールドの星空は新鮮で、それでいて綺麗だと思える。昔、旅行に行った先で見た星空よりもよりその輝きは心に染みた。

そんな俺の隣でシアは笑う。

「意外とロマンチックな事を言うんですね、ニケさんって」

「男は大抵ロマンチストなもんさ」

「そうなんですか？」

「そついうもんなの」

男はどこか未知のものに憧れる。
それが何なのかは人それぞれだが、俺の場合は……。

「だからさ、宇宙人とか、異世界人とか、そんなものもいるって信じてるんだけど、シアはどう？」

「宇宙人や異世界人、ですか……？ 考えた事はないですけど。………
そうですね、素敵です」
「……素敵、なの？」

俺はそれに驚いた。普通はもつと受け入れがたいものだとばかり思っていたからだ。

実際の所、俺に限らず人類はその存在を知ってはいるものの、どうせいる事のない存在だと思っている。もちろん例外もいるが、大半はそんなものだ。

それをよく考える事もせずに、あっさりと言つてのけたシアの本心は俺に分からない。

「ええ、素敵です。……私は自分の知らないものを知る事が好きなので、冒険者の皆さんが聞かせてくれる異境の話とかが好きで、ついつい聞き入っちゃったりして……そのせいで怒られた時もあったんですよ」

「……そりやまた意外だなあ」

「……だから、私は……」

言葉が途切れた。

話に耳を傾けていた俺は、その突然の沈黙に何事かとシアに顔を向けるが、そこで動きが止まってしまう。

なぜならシアの顔が俯き、その目に涙をためていたから。

「……どうしたんだ？」

俺はそうとしか言えなかった。

触れれば割れてしまう水晶のような——そんなシアに触れる事すら出来ない、臆病者だった。

だからその涙を拭う事も出来ず、ただ眺め、答えを待つしかない。

「……今の話、きつとニケさんの事、ですよね……」
「……………どうして、そう思ったの？」

確かに少しばやかしてはいたものの、間違いなくこれは俺の事だ、直接聞く勇氣もなく、それでいて聞いて欲しいと思ったから、まるで人事のように振る舞い、シアに話を振った。

自分でも笑えるぐらいの臆病っぷりだ。

それを看破されて、俺は多分、なにかが振り切れてしまった。

言い換えれば……、俺に現実と妄想は違うと思わせていた何かが、いま壊れてしまったのだ。

「夕方目覚めた時もそうでしたし、最初に会った時から不思議だったんです。国の募集に応じる冒険者は大抵が腕に自信のある人達ばかりで、まるつきり初心者がなるなんて事はないですし、わざわざフィルストで王様の召集に応じたのに、国の事は何も知らなくて、それでいて魔物の事すら知らない。他所の国から来たのなら少なくとも魔物の存在ぐらいは知っているはずです。国家間の道中で魔物の出ない場所なんてあるはずがないんですから」

シアの言った言葉の大半は、考えて見ればその通りだった。

そもそも俺はいきなり王様の前に放り出されて、星の欠片を探せと言われ放り出された。だってそれはこのゲームの設定だから、俺が

どうにかした訳じゃない。

しかしこの世界に生きているシアからすれば、俺は何も知らないくせに無謀な事をしている奇妙奇天烈な人間に見えたはずだ。

俺だって逆の立場だったらそう思うだろう。

それでもシアは今の今までそれを口にしないで一緒にいてくれたのだ。

シアの表情は、いつの間にか強さを持ったものに変わっていた。

目の周りは赤く腫れていたが、もうそこに雫はない。

「何か隠している事があるのはわかります。それを言いたくないのなら言わなくても私は構いません。でもこれだけは覚えていてください」

言葉を一度区切り、言った。

「私は、傍にいます」

吐く息が揺れた。息を吸う事すら忘れ、何かが溢れ出すのを止められなかった。

シアが俺の体に寄りかかる。

それを何も言わずにただ抱きしめた。

泣き顔を見られるのが恥ずかしくて、俺はずっとシアを抱きしめていた。

そして、全てを無視した無遠慮に頭の中で声が響く。

『——システム制限の二段階目が解除されました。閉ざされた箱庭で生き延びてください』

それはデスゲームの始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5022x/>

現実世界の仮想現実

2011年11月26日15時50分発行